真理探究　第1回～第32回

九二年十一月よりロシアTV「ツー・バイ・ツー」で放映
1～3、6、9、10、20、21は『検証！「死」』(1994.1.24初版)／13～17は『チァクラの科学』(1994.1.30初版)に掲載

1. サマディの科学的検証　PART I
瞑想とサマディ

[説法] オウム真理教とは

こんばんは、麻原彰晃です。

皆さんは今、自分自身が生きていることに対して疑問を感じたことはありませんか？

わたしたちはこの人間の世界においていろいろな経験をします。しかしその経験は、わたしたちにとって利益をもたらす経験より不利益をもたらす経験の方が多いのです。

それはなぜでしょうか。

それはこの人間の世界の本質的なものが、煩悩を欲求することを背景として形成しているからなのです。したがって、この世の経験をわたしたちが追求し続ける限り、わたしたちは煩悩、つまり、より具体的な形のあるものに対するとらわれの心が増大し、それによって、その形のある世界にとらわれ、縛られ、そして流転を繰り返すのです。

ところで、このデータに対してその対峙的な立場に「真理」というものが存在します。これは煩悩と反対側の極にあり、煩悩を止め、そして煩悩を完全に破壊し、それによってわたしたちの本質に至らしめるための考え方、あるいはデータであると言うことができるのです。そしてその真理の中で最も大切なもの、それが「無常」なのです。

では「無常」とは何でしょうか。

例えばわたしたちは、生まれ、成長し、老い、そして死にます。これは、わたしたちの一つ一つの細胞が、「変化」というものを土台として活動し続けているがゆえに起きる現象です。もしこの変化を止めることができるとするならば、わたしたちは永遠の生命を得ることができるはずです。しかし、わたしたちは、この無常から脱却することは、本質的にできません。それはこの細胞の一つ一つが、先程述べた無常の心を根本として物質に影響を与え、成立しているからにほかなりません。

そしてこの宇宙の構成も同じです。その創造・維持・破壊という無常。これをサンスクリット語で表わした場合、それは「オウム」という言葉になります。つまり絶対の真理の本質の中心である、宇宙の無常を表わす「オウム」と、それから「真理」というものの複合的な名称、これが「オウム真理教」の由来なのです。

さあ、皆さんも、今自分自身の生きていることに対して疑問がおありなら、オウム真理教の門を叩いてみてはいかがでしょうか。

[対談]

キリスト教の開祖イエス・キリスト、そしてイスラム教の開祖マホメット、仏教の開祖真理勝者サキャ神賢（仏陀釈迦牟尼）。これら世界三大宗教の開祖ほど長きにわたり人類に偉大な影響を与え続けている存在はないと言っても過言ではないでしょう。まずこの三人の偉大な人物の共通点を探っていきたいと思います。なぜなら、この三人の教えの背景には、共通の普遍的法則、すなわち真理というものが存在していると思われるからです。

◉三人の聖者の共通点――超人的な力

(司会)さて、それでは三人の聖者の共通点について、何か意見はありますか？

(S)歴史上の偉大な宗教家によくあることですが、彼らはある種の超人的な力を持ってることが挙げられますね。例えば、サキャ神賢は多くの奇跡を起こしていますね。テレポーテーションや空中浮揚をはじめとして、様々な神通力を使っていたことが仏教の経典にはうたわれています。

(MM)キリストも、ただの水をぶどう酒に変えたり、病気の人をたちどころに治してしまったり、といった記述が聖書の中にありますね。

(司会)どのようにしたらそのような超人的な力が付くのでしょうか。

◉瞑想――超人的力を身に付ける方法

(MM)そうですね。一つの答えとしては、それは「瞑想によって得られるということ」ではないでしょうか。実際さっきの三人の聖者、これはみんな修行者で、瞑想をしていたわけです。

(S)そうですね。サキャ神賢が菩提樹の下で瞑想を行ない、偉大な悟りを得たのは有名な話です。そしてマホメットも、メッカ郊外の丘で瞑想にふけるようになり、やがて大天使ガブリエルから神の言葉の啓示を受けるようになったといわれていますね。

◎瞑想とは何か――心の働きによりすべての現象は動く

(司会) そうですか。ところでその、「瞑想」とは何か、少しご説明願えますか？

(麻原旧団体代表・以下A) この瞑想というのは、意外に聞こえるかもしれないが、一般の人たちも行なっている、精神的作業であることは間違いないんだよ。例えば、おなかがすいたら、その自分の食べたいもののところに行く。例えば、食べたい店屋に行って、そしてそこで何か食べると。これと同じように、心の働きがすべての現象を動かしているということが、もともと、瞑想の根本であるということは言えます。したがって、例えば神と遭遇したいと考えるならば、その魂は必ず神と遭遇することとなり、また、偉大な神の力を得たいと考えるならば、必ずそうなるのです。もちろんそれには特殊な方法が必要ではあるけども。

◎瞑想の最終目的――本質的な自由・幸福・歓喜を得る

(司会) 「瞑想」についておぼろげながらわかってきたような気がいたしますが、そもそも「瞑想」というのは、何を目的にしているのですか。

(A) いろいろな瞑想の段階があります。例えば、サキャ神賢の教えにおける瞑想の最終目的は、わたしたちが本質的に自由・幸福・歓喜である状態を得るということでした。

イエス・キリスト、あるいはマホメット等の瞑想の目的は、神との合一、そして、神の世界に自分自身の身を置き、そこで長きにわたる、――経典によっては〝永遠〟とも書かれてるわけだけど、実際は、考えられないほど長きにわたる生命をそこで楽しむということが目的である、ということができます。

◎瞑想とサマディの違い――感覚・イメージ・呼吸の停止

(T) 尊師、瞑想とサマディの違いがよくわからないんですが、その点に関してお聞かせ願えませんか。

(A) この「サマディ」というのは、瞑想ステージの中の最後の段階を表わします。もちろん、世界にはいろんな経典があって、その経典によっては、瞑想とサマディを同義語としてとらえているわけですが、正確にそのサマディの状態を表現するならば、感覚の停止、そしてイメージ等の停止、呼吸の停止と言うことができるでしょう。

(T) なるほど、わかりました。

◎なぜオウム真理教なのか

(司会) 今日スタジオにお越しいただいている方々は、科学者であると同時に、麻原彰晃尊師の弟子でもあるんですね。今回は番組の最初でもありますから、自分がなぜオウム真理教を選んだのかということについてお伺いしてみましょう。

まず、Tさんからお願いいたします。

(T) そうですね、わたくしは物理学を勉強していたわけですが、物理を学びながらも唯物的なものの見方ですべてわかるんだろうかという疑問を持っていました。これに対する完全な解答がオウム真理教の教義にあったというわけです。例えば、現代の科学ではどうにもならない「死」という問題がありますが、これに対しても明快な解答があり、しかもその教義どおりに死を超越する体験をしておられる先輩方が何人もおられると。まあこういった点ですね。

(司会) なるほど。次は、S師、お願いいたします。

(S) はい。わたしがオウム真理教を選んだ理由は、オウム真理教の教義が、人の生きる目的、そしてその目的に至る方法を明確に指し示していたからです。わたしは無常感から、ごく一般的に行なわれている生き方について疑問を感じていました。例えば、いくら物質的に豊かになっても、物の価値というものは時が経てば変わり、物は必ず壊れます。そして、避けることのできない死をもって、手放さなければいけません。このように考えると、すべては無常で空しく思われました。では、どのように生きればよいのかという問いが出てきますが、この問いに対する解答が、オウム真理教でいわれている解脱・悟りを目指す生き方だったのです。

(司会) ありがとうございます。では次に、聖者MM供養値魂はいかがでしょうか。

(MM) はい。自分が何のために生きているのか、自分自身の人生の目的がわからないために、いつも何か空しく満たされない思いを持っていたわたしは、麻原尊師の本に触れて、これは本物である、これこそが真理であるという思いを強く持って、それで修行の道に入ったのです。

そして瞑想によって自分自身の過去世を思い出し、尊師のもとで救済活動のお手伝いをするために、使命を持って生まれてきたことを知り、尊師のもとに出家したわけです。

(司会) ありがとうございました。

それでは、第一回の締めくくりといたしまして、尊師の方から何かコメントをいただけるでしょうか。

◎「真理探究」の役割――瞑想体験への科学的示唆

(A) 人間には二つの生き方があると言うことができます。そしてその二つの生き方は、正しい生き方をなし、瞑想し、そして人間以上の世界を経験する、つまり神々の世界を経験するという生き方が一つ。それから第二の生き方は、欲望を満足させ、エネルギーをロスし、そして疲労と苦しみの世界を経験し、最終的には下の世界の状態で死を迎える、つまり、例えば痛や、あるいはリューマチ等の痛みだけの

状態で死を迎える、という二つの生き方が存在すると思います。

そして、この第一番目の生き方についての明確な科学的示唆というものが今までなかったわけですが、それについて、この番組が、このロシアの皆さんに大きな貢献を与えることができるならば、それはこの番組の存在価値として、目的を果たしたこととなると思います。したがって、ロシアの皆さん、この番組に大いなる期待を寄せていただきたいと思います。

2．サマディの科学的検証　ＰＡＲＴⅡ
水中エアータイト・サマディ

【説法】選択・現世の喜びは一時的喜びにすぎない

こんばんは、麻原彰晃です。

世界には多くの宗教が存在しています。代表的な宗教としては、キリスト教、仏教、あるいはヒンドゥー教、そのヒンドゥー教の教えを体現するための、ヨーガ、イスラム教、あるいは中国に存在するタオイズム等です。これらの教えは本質的には同じ土台であり、そして、その教えを説いた根本的な教祖の心のステージ、つまり宗教的経験により、その段階が形成されます。

しかし、例えば、代表的なイエス・キリストや仏陀釈迦牟尼、この二人の偉大な聖人を対比して考えましても、二人とも出家修行を説いていますし、またその根本には、この世の中の本質――それは「無常」であり、そしてこの世の中にとらわれることそのものは、わたしたちに本質的な喜びを与えるのではなく苦しみを与えるものである、ということをはっきりと言明しています。

ではなぜ、この世の中にとらわれてはいけないのでしょうか。それは、この世の中のものは、第一回にも述べましたとおり、「無常」を根本としており、この「無常」の本質は、愛着すればその愛着によって苦しみ、また、喜びがいつ苦しみに変わるかわからない、といった条件を絶えず具えているところにあります。

そしてわたしたちが、この世界、つまり愛欲の世界から脱却するだけでも、わたしたちは大きな喜びの世界を経験することができるのです。

あなたは、いにしえの偉大な聖者の教えを実践し、そして自己の本質を知り、それによって本当の意味での絶対の幸福や自由や歓喜を味わうという、素晴らしい道を目指しますか。それとも、無常を根本とした、一時的には喜びを与えるかもしれないが、その背景には多くの苦しみを有しているこの現世の喜びを求めますか。それはあなたが、本質的に宗教的な素質を有しているかどうか、科学的な素質を有しているかどうかによって決まりますね。

わたしはあなたが、宗教的な、そして科学的な素質を有していることを望みます。

【対談】

◎サマディ――究極の瞑想状態

(司会)前回は、サキャ神賢、キリスト、マホメットといった三大宗教を興した聖者の共通点を探りました。

(Ｔ)そうですね。彼らの思想というのは世界に大きな影響を与えてきましたし、そして、今も与えているわけですけれども、これはやはり何か、共通の、普遍的な法則といいますか、一種の〝真理〟があるんじゃないかというわけですね。

(ＭＭ)はい。サキャ神賢、キリスト、そしてマホメットと、彼らの共通点は何か。結論としては、それは彼らが瞑想をしていた、そしてその瞑想の目的はサマディであった、ということでしたね。

(司会)そのサマディというのは究極の瞑想状態だったということでしたね。そのときには。

(ＭＭ)ええ、前回もお話ししましたが、「呼吸が停止する」と経典には記載されています。

◎サマディの実験

(Ａ)今、実際、このサマディの実験を担当しているのはＳ君なわけだけども、オウム真理教では、今現在はどういう実験が中心となっていますか。

(Ｓ)はい、今行なっている実験というのは、密閉されたチャンバーで修行者に瞑想してもらい、その瞑想中の酸素消費量を測定しています。

(Ａ)そのチャンバーは、どのように密閉されているかどうかのチェックをしていますか。

(Ｓ)はい。その密閉性のチェックというのは、チャンバー内部を加圧または減圧してしばらく放置しておきます。で、そのときの圧力変化を見ます。もしチャンバーに漏れがあるならば、圧力が減るはずです。その変化がないことをもって、このチャンバーに漏れがないということをチェックしています。

◎水中エアータイト・サマディ
――十一時間二十分にわたる呼吸停止

(Ａ)ところで、オウム真理教のこのサマディの実験は、ＭＭ「水中エアータイト・サマディ」から始まったんだったよね。

（ＭＭ）そうです。最も完璧に気密性を証明するという意味において、水の中にチャンバーを沈め、その水が漏れ込まないということをもって、気密性の証明にしました。

そして経典に記載されたその呼吸停止を証明するために、瞑想の妨げにならないように非接触で測定する必要があるということから、チャンバー内の酸素濃度の変化、これを基にして酸素消費量を測ったわけです。

（Ａ）ところで、Ｔ君。具体的には、その「水中エアータイト・サマディ」はどのような構造で実験されたのかな。

（Ｔ）はい。まず測定装置について説明しますと、この実験のポイントとしては、サマディ室に漏れがないこと、これが挙げられます。

この条件を完璧にクリアするために、我々は二重の水槽を用意しました。

外側の水槽に水を入れ、被験者の入った内側の水槽をその中に沈めます。この方法ならば、完全に内側の水槽が密閉されていることがわかります。そして、この内側の水槽の中で、被験者が瞑想に入るわけです。

内側の水槽、つまりサマディ室には、酸素濃度計が置かれています。この酸素濃度計のデータは、コンピューターに取り込まれ、データ処理がなされます。

（ＭＭ）それでは実際に、一九八八年に、尊師の一番弟子であられる聖者ＭＫ最上善逝が水中エアータイト・サマディに挑まれた、そのときの様子を紹介しましょう。

（司会）このときは、聖者ＭＭ供養値魂が測定を行なっていたと聞いているんですけれども。

（ＭＭ）はい、実際の測定はわたくしがいたしました。

一九八八年五月十七日、富士山の麓で水中エアータイト・サマディは行なわれたんですが、わたしはこのとき、ずっと付いて計器をモニターしていたんですけれども、全く酸素濃度計の表示が動かないので、非常に心配したものです。しかし、十一時間二十分経って、酸素濃度計の表示は〇・一パーセント下がりました。その後も、非常にゆっくりと、酸素の消費があることがわかり、酸素濃度計が正常に作動していることがわかりました。

（Ｔ）ここにグラフがありますが、十一時間二十分にわたって、酸素消費量がゼロの状態が記録されています。

（司会）うーん、すごいですね。十一時間二十分呼吸が止まっていたわけですか。うーん……。

でも時々、いったん死んだというような判定が下されたのちに、生き返ったりするような例を聞くことがあるんですが、この実験の被験者である聖者ＭＫ最上善逝は、そういう状態になられたのでしょうか。

◉サマディの状態――鮮明な意識の連続

（Ａ）いや、意識は普通の人に比べて最も鮮明な状態を続けていると言うことができるね。これは例えば、経典の中で「パーラーヤナ」という経典があるわけだけども、この中で

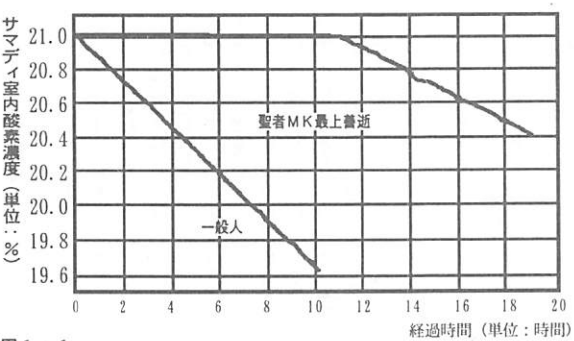


図１－１
聖者ＭＫ最上善逝サマディ室内の酸素濃度の変化
（1988年5月17日　静岡県富士宮市オウム真理教富士山総本部道場）

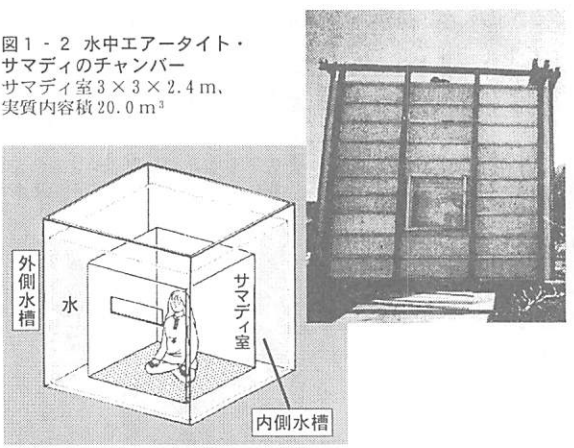


図１－２ 水中エアータイト・サマディのチャンバー
サマディ室３×３×2.4ｍ、
実質内容積20.0ｍ³

図１－３　チャンバーの構造
二重の水槽になっている。

も覚者の意識状態というものは連続したはっきりとした意識状態でなければならないと出ています。もしこのときに、気絶が起きるとするならば、それは呼吸停止、そして心臓停止、気絶をもって"死"と言うことができます。したがって、サマディと死の違いとは、呼吸停止、例えば心臓停止があったとしても、意識は鮮明に連続していなければならないということが、違いとして挙げられるでしょう。

◉心の本質（真我）による肉体のコントロール

（司会）そうですか。それから、サマディに入っている修行者がサマディから目覚めたときに、肉体的に障害が何か起きたりするようなことはないんですか。

（A）それは、全くないと言うことができます。

（司会）それはなぜなんですか。

（A）もともとこの肉体というものは、わたしたちのカルマ、わたしたちの過去世の行動・言葉・心の働きによって成立しているわけですが、そのサマディに入る途中の段階において、この肉体・感覚・イメージ、そして経験の構成と呼ばれている光の粒、データの移入されている光の粒があるわけですが、これらを一つ一つコントロールしていって最終段階としてサマディに入るわけです。ですから、心の本質とも、あるいは真我とも呼ばれているものがこの肉体をコントロールしますので、そのことについては全く危険性はないと言うことができます。

◉修行者の内的体験――六神通と覚醒した意識状態

（司会）修行者というのは、多分内側の経験をしているのではないかと思うんですが、実際、どういう内的な体験をしているんでしょうか。

（A）これについては六神通と呼ばれるプロセスを経験するか、あるいはそれよりも最終の段階である、純粋に動かない意識、覚醒した意識しかない状態を経験するかの二通りがあると言うことができます。

現代の人には、前者の六神通の体験の方が楽しくて、しかも興味深いとは思いますが。

（MM）それでは、聖者MK最上善逝に、サマディ時の体験について語っていただきましょう。

（MK）サマディに入っているときの意識状態はとても鮮明で、そしてサマディが深くなればなるほど、ますます鮮明になっていって、また、自分の周りの光もものすごく強くなっていきます。そして肉体に意識がある状態で、同時に、光の世界にも意識が入っています。

普通、深い瞑想状態に入ると、身体の代謝が落ちるのはよく知られていると思いますが、サマディに入ると完全に肉体の機能が停止します。そして肉体の機能が停止すると同時に、自分の思考も停止して、雑念が全くわかない、全く雑念のない状態になります。当然このときは感情もありません。意識はとても研ぎ澄まされています。そして完全に自己の肉体をコントロールしている状態です。ですから、肉体に意識があるのもよく、また肉体から変化身が抜け出して、意識が外側に外れるのも自分でOKですし、それはコントロールできます。

そして、このときは、時間の感覚が全くありません。そうですね、時が止まっている状態、多分、時が自分の外側にあって、自分とは無関係に流れているような状態になるのだと思います。

言うならば「時を超えた状態」ではないでしょうか。

死んでしまったら、肉体に意識が戻ることは普通はありません。サマディは、自己の肉体と心を完全にコントロールしていますから、もうこのサマディに入ることができれば、生死を超えた、本当の自由を得ることができた、と言えるのではないでしょうか。

（司会）それでは、最後に麻原尊師の方から何か、コメントをいただけますか。

◉宗教を選択する三つのポイント

（A）宗教には多くの宗教が存在しています。しかし、どの宗教を実践するかによって、わたしたちの来世は全く違った方向へといざなわれることになります。

そして、どの宗教が正しいかどうかは、教義、その教義を裏付ける実験、そしてそれを体現している人たち、この三つが必要ではないかと思うわけです。

あなたも宗教にだまされず、自分自身の未来を自分自身で決めていただきたいものです。

3．サマディの科学的検証　PARTⅢ
経典の記載事項の科学的証明

［説法］共産主義を超えて、真理へ

こんばんは、麻原彰晃です。

この大変雄大な国、ロシア。このロシアは、多くのことを歴史において経験してきています。そして何よりも大きな経験は、共産主義を実体験したということではないでしょうか。

もともと共産主義は、本質的にはわたしたちを物質的に豊かで、そしてこの現実の世界において不満のない社会を形成する理論をもととして作り上げられた教えです。

しかし、その共産主義が崩壊した理由は何であるかというと、それはこの無常を根本とした世界の上に、無常を根

本とした理論を展開したことにある、と言うことができるでしょう。

もしこの世の中が、無常ではなく、つまり死というものを持たない世界であるとするならば、その論理的な教えが正しければ、そして、それが正しく実践されているならば、すべての人が物質的に豊かで、そしてその背景としてある「他の人を利する」、つまり他の人に利益を与えるという思想なるがゆえに、すべての人が幸福であるはずです。

しかし、例えば、人間は働くなればなるほど欲望を増大します。この欲望の増大は、結果的には利益の独占を生み、そしてそれによって不平等が成立するのです。したがって、もし共産主義的な考え方に加え、その一人一人が煩悩を滅尽する修行、つまり宗教的な実践を行なうならば、その国家は偉大な最高の繁栄を得る国となることでしょう。

この共産主義は、資本主義から一歩進んだ教えであると言うことができます。その資本主義を超えた共産主義を実践したあなた方が、その共産主義をもう一歩超えた、科学を背景とする宗教である絶対の真理を取り入れるならば、このロシアはこれから数年後、大いなる繁栄の国へと変わることとなるでしょう。

わたしとそしてわたしの弟子たちは、その一助を担うことができるならば、幸いだと考えます。

[対談]

◎煩悩と呼吸回数――呼吸回数が少なければ煩悩も少ない

(MM)今回取り上げる内容ですが、仏教経典には、呼吸の量とそれから煩悩との間に密接な関係があると記載されています。つまり、ステージの高い修行者ほど、煩悩が少なく呼吸の回数も少ないのです。

(A)聖書にも、イエス・キリストが四十日間の断食を行なったという記載や、あるいは仏典には、サキャ神賢が三年間の断食を行なったという記載があります。また、わたしの弟子で九日間の断水断食、つまり九日間全く食物も水も取らなかったという例があります。これらはすべて、煩悩が少ない、あるいは煩悩を滅尽していることを表わしているのではないでしょうか。

◎呼吸回数の少なさはステージの高さを表わす

(司会)ところで今、聖者MM供養値魂の方から「ステージ」という言葉が出てきたのですが、具体的にステージの高い低いはどう判定されているのですか。

＊「呼吸を停止するとサマディに入る」ことを示す経典の記述

「より優れた部分の部門(アングッタラ・ニカーヤ)九節」
オウム真理教翻訳チーム訳より

第三　生命体の居住地

三一　段階的な滅尽

(略)

二　第一の静慮が生起したならば、愛欲の認知が滅尽されるのである。

第二の静慮が生起したならば、種々の熟考と吟味が滅尽されるのである。

第三の静慮が生起したならば、喜が滅尽されるのである。

第四の静慮が生起したならば、種々の入息と出息が滅尽されるのである。

(略)

(MM)はい、わたしたちオウム真理教では、ステージを解脱の七つの段階で表わしております。

下から、ラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガ、マハームドラー、大乗のヨーガ、アストラル・ヨーガ、コーザル・ヨーガ、そして最終解脱です。もちろんこの上のステージに到達すればするほど、煩悩は少なく、神秘的な力を有し、当然呼吸も少なくなるのです。

そしてわたしたちがクンダリニー・ヨーガの成就を果たしているかどうか、これを判定する実験として、五日間の断水断食を地下に埋められた特別の密室の中で行ない、その酸素消費量が一定の基準値以下であるという条件を満たさなければなりません。

(A)このステンレス・チャンバーに入る前に、四つの体験を自己申告しなければならないことになっています。その自己申告しなければならない内容とは、まず第一はエネルギーが上昇し、そして体が持ち上がるということ。第二番目は光を絶えず見続けているということ。第三は、この肉体の身体ではなく別の身体に意識が移り、そこでリアルな体験をし、それは現実的に証明可能であるということ。そして第四は、寝ているときも起きているときも意識が連続しているということ。この四つの条件を満たした者が、初めてステンレス・チャンバーに入ることができるのです。

ところで、今日の実験の被験者はaだったよね。S君。

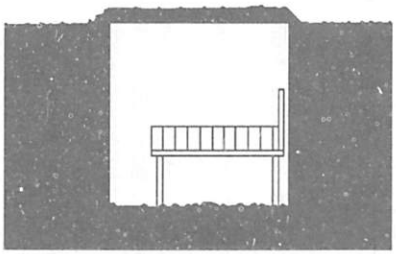
(S)はい、そうです。

◎チャンバーでの実験――酸素消費量は常人の六八%

(A)じゃあ、その実験についていただこうか。

(S)はい、では、測定装置から説明しましょう。測定におけるポイントは、前回の「真理探究」でご紹介した、水中

＊チャンバーについて
図２　チャンバー概念図



A．形状
　ステンレス板を溶接して造られた体積7.3 M³立方体。密封性は、内部を加圧・減圧して放置しても内部圧力が変化しないことで確かめられている。
B．測定装置
酸素濃度計　１台
温度計　　１台
C．測定方法
　測定装置のデータを、１分ごとにコンピューターに取り込んで処理。なお、チャンバー内は一定の温度に制御されている。
D．精度
　このチャンバー内で、0.01％の酸素濃度の変化を識別できる。これは、一般人が約３分間呼吸したときに生じる酸素濃度の変化を識別できる精度である。
E．測定地について
　測定地の標高は、約1000Mで、この地における酸素濃度は、標高０Mの地点の86.8％である。

＊注１　本報告における一般人の酸素消費量とは、体重60kgの男性が、座った状態で安静にしているときの酸素消費量285cm／分である。
＊注２　本報告における酸素消費０の時間というのは、このチャンバーの測定精度で酸素濃度の変化が見られなかった時間のことである。その時間、酸素濃度の変化は、0.01％ということになる。

エアータイト・サマディのときと同様に、チャンバー、つまり被験者の入る密室に、空気の漏れがないことです。そのためにチャンバーは、ステンレス板を完全溶接して造られています。その気密性は、内部を加圧もしくは減圧して放置しても、内部圧力に変化がないことで確かめています。

　測定装置は酸素濃度計・気圧計・温度計・湿度計が室内に設置されています。

　チャンバーの内部は、温度変化による測定誤差をなくすために、温調器によって一定の温度に保たれています。酸素濃度計がコンピューターに接続されていて、データ処理がなされます。

（司会）では、被験者であるａ正師が五日間、密室の中で瞑想を行なった際の酸素消費量の測定結果について説明していただこうと思うんですが、それとともに、ａ正師のステージなども説明していただけませんか。

（ＭＭ）はい。ａ正師は、オウム真理教のクンダリニーヨーガの成就者です。四種類の秘儀瞑想をはじめとする厳しい修行を一日二十四時間、五カ月にわたってこなし続け、多くの煩悩を止滅させ、一九九二年五月十五日にクンダリニーヨーガの成就を果たされました。

　酸素消費量の測定結果については、Ｔ君の方から説明していただけますか。

（Ｔ）はい。上側の線①は、正師が入ったチャンバーの酸素濃度を表わしています。そして、下側の線②は、一般人がチャンバーに入った場合の酸素濃度の変化を予想したものです。一八・〇六％の酸素濃度から開始し、五日後にはａ正師の場合一三・二二％まで酸素濃度は低下しました。そして、一般人の場合は、一一・五七％まで低下すると考えられます。この結果を表にすると、このようになります。（図３参照）

　一般人の予想酸素消費量が七〇三％あるのに対し、ａ正師の場合は四・八四％の酸素しか消費していません。これはａ正師の酸素消費量が一般人の六八・八五％であることを示しています。（図４参照）

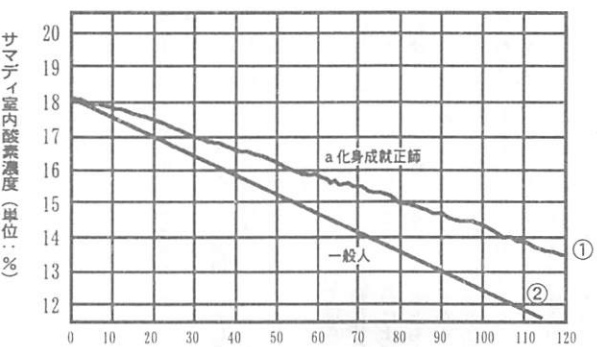


図３　チャンバー内の酸素濃度
ａ化身成就正師 Date 1992.5.4～9
酸素消費量　4.84％、一般人に対する割合　68.80％

ここで、初期酸素濃度が、通常の二一％ではなくて一八・〇六％であることについて説明しましょう。

この実験は、標高一〇〇〇メートルの高地で行なわれました。したがって、酸素濃度を平地の値に換算すると、このようになるわけです。つまりこの実験は、非常に不利な条件で行なわれたということになります。

さて、密閉された室内で、五日間の断水断食をしながら瞑想修行を行なう場合、二つの困難が生じます。一つは、酸素の減少。もう一つは、二酸化炭素の増加です。それではまず、酸素濃度の低下によって表われる症状を示しましょう。（図5参照）

次に、二酸化炭素の増加によって表われる症状を、以下に示します。（図6参照）

いかがでしょうか。一般人の場合にはこのような危機的な状況が訪れます。しかし、a正師は、平然と五日間の断水断食、そして瞑想修行を達成したわけです。また、密閉された、外的刺激のない環境に閉じ込められる精神的なプレッシャーについても、修行の進んでいない者を入れて、わずか数時間で耐え切れずにチャンバーから出てしまった例もあったということを付け加えておきましょう。

（司会）はい、ありがとうございました。ところでいくつか気になった点がありましたので、質問してよろしいでしょうか。

（T）はい、どうぞ。

（司会）地下の密室で瞑想を行なっている間は断水断食をし続けるということなんですが、断水断食には、一体どういう意味があるんですか。

◉断水断食――高い世界へ到達するため

（MM）これについては、わたくしがお答えします。サマディに入ると、呼吸停止、そして心臓停止、そしてすべての代謝活動が停止する。つまり肉体的には、"死"と同じ状況が訪れるわけです。ですからその状態で、食物および水分が必要ないのは明らかです。

ではサマディに入るプロセスにおいてはどうでしょうか。食物や水を取ることによって肉体を活動させることにより、低い次元のエネルギーが動きます。これによって高い世界に到達することが困難になるのです。もともと神々は食物あるいは水を取らずに生きているのですから……。

（A）少し付け加えるならば、低い神々は水に似たもの、甘露を飲み、それより高い神々は甘露よりももっと気体的なものを食する、と考えた方がいいと思います。

そして、それよりももう少し高い、最終的な神々は一切何も取らない、というふうに考えてください。

◉修行による代謝の低下

（司会）今回のこの実験の結果は、経典に記された「修行によって煩悩が滅ると呼吸が減少する」といった内容が客観的な証明になっているのではないかと思うのですが……。

（A）そうだね、そのとおり。もともとヨーガには三つの段階があります。その第一段階は精神集中の段階、第二段階は精神集中が連続している段階、そして第三段階はサマ

図4　正師と一般人の酸素消費量の比較
正師の酸素消費量は、一般人の68.85％

	初期酸素濃度	最終酸素濃度	酸素消費量
正　師	18.06％	13.22％	4.84％
一般人	18.06％	11.03％	7.03％

図5　酸素濃度と症状

酸素濃度（％）	症　　状
16	頭痛、不安、呼吸・脈拍増加
14	視力障害、意識混濁、吐き気
12	筋けいれん、呼吸困難
10	顔面蒼白、意識不明
8	昏睡、8分で死亡
6	呼吸停止、即死

図6　二酸化炭素濃度と症状

二酸化炭素濃度（％）	症　　状
3	危険な影響はない
4	頭痛、めまい、除脈、血圧上昇
6	過呼吸、皮膚血管拡張、おう吐
7～8	精神活動がやや侵される、呼吸困難
10％以上	中枢神経機能が低下し無意識となり呼吸循環中枢がマヒし、死に至る

ディの段階という、ヨーガ的なとらえ方をするならば三つの段階があるわけですが、この少なくとも第二番目の段階、この段階では代謝が大変落ちるわけだよね。それが結果として証明されたと言うことができるでしょう。

(司会) ありがとうございました。修行によって、人は人を超えることができる、ということがわかったような気がします。

それでは、最後に麻原尊師の方から何かコメントをいただけますか。

◉「証明」による新しい正しい生き方の提示

(A) 前回の内容にしろ今回の内容にしろ、大変実験としては危険な要素を含んでいます。

しかし例えば、政治機構が神権政治、そして豪族の集合的な政治、それから覇権政治、そして民主政治、共産主義的な政治といったような形のプロセスをたどるのと同じように、宗教も、例えば仏教、あるいはキリスト教、あるいはイスラム教等々の流れの中において、それを証明する、あるいは超える宗教が必要であるとわたしは考えています。

そしてそのためには、まさに証明しかない。証明をすることによって、皆さんに今のこの現実的な生き方ではなく、新しい正しい生き方が提示することができるならば、それは、この番組の目的を果たしていることとなるでしょう。

4. 聖者の脳波

[説法] 瞑想によって、より良い人生を

皆さんこんばんは。麻原彰晃です。

わたしたちは、精神的な生命体であることには間違いがありません。そして、その精神的な生命体の本質、これは「意識」と呼ばれるものです。

もともと西洋哲学の限界は、この意識を最終地点としたところにあります。しかし、インド・ヨーロッパ語族における最古の宗教である「真理」は、この意識を超越した、つまり意識の発生の源である真我を最終地点としています。テーラヴァーダ仏教においては、この真我を大完全煩悩破壊、サンスクリット語ではニルヴァーナと表現しているのです。

ところで、これらの奥深い、わたしたちを構成している要素に対して、わたしたちが瞑想によってしっかりとアプローチするならば、わたしたちの運命というものは大きな変化を得ることができます。

もちろん、そのアプローチがマイナス的要素であるとするならば――例えばわたしたちの欲望を増大させるような情報をどんどん取り入れたり、あるいはわたしたちの貪りを増大させるような考え方・思想をどんどん入れた場合――わたしたちはそれによって悪化の人生を歩くこととなります。しかし、もしわたしたちが自己にとって利益となるような情報を入れ、そして意識や、あるいは――これは大脳とも大変関係が深い――イメージにおいて、クリアにするような方向で瞑想を進めていくとするならば、わたしたちは大変幸福な、しかも発展的な人生を約束されるのです。

そして、その教えを説き明かしているもの――それがイエス・キリストの教えであり、またサキャ神賢の教えなのです。

そして今、この二十世紀の最後の十年に登場したオウム真理教も、その流れに属していることは間違いありません。さあ皆さんも、より良い、そして発展的な人生を、瞑想によって、そして脳をピュリファイすることによって、歩いてみてはいかがでしょうか。

[対談]

(司会) 今回はどのような実験を行なったのでしょうか。

(MM) 脳波を測定することによって、瞑想状態、そしていては修行ステージを検証しようと試みました。

脳波というのは、精神医学の分野では非常に有効な研究手段なんですね。これは簡単に言うと、脳に発生する微弱な電位差を検出して、脳の活動状態、ひいては精神の状態まで検出しようという試みです。

(T) 次に、脳波がどのような意味を持っているかをご説明いたします。

まず、周波数が三〇から五〇ヘルツの波をγ(ガンマ)波といいます。電位は一〇から三〇マイクロボルトで、これは興奮しているときの脳波です。

次に周期が二〇から三〇ヘルツ、電位が二〇マイクロボルトほどの波をβ(ベータ)波といいます。これは通常の覚醒時の脳波です。

周波数が八から一三ヘルツ、電位が五〇マイクロボルト程度の波をα(アルファ)波といいます。これはリラックス、あるいはまどろみのときの波形です。

周波数が四から七ヘルツ、電位が五〇から一〇〇マイクロボルトの波はθ(シータ)波といわれます。これは中程度の睡眠において現われます。

最後に周波数が〇・五から三ヘルツ、電位が一〇〇から一五〇マイクロボルト、この大きな波がδ(デルタ)波です。これは、深い睡眠において現われます。

大体脳波は以上のように分類されますが、ガンマ波、ベー

タ波は覚醒時の脳波、そしてシータ波、デルタ波は睡眠時の脳波と言えます。そしてアルファ波は、リラックスしているとき、あるいは夢を見ているときなどに現われます。

(司会) ありがとうございました。

ところで尊師、脳波の測定で瞑想あるいはサマディのどのような側面がわかるとお考えになっていらっしゃいますか。

(A) まず、瞑想の段階を検討すると、深い瞑想に入れば、アストラル、あるいはコーザルへと入っていくわけですが、そのアストラルの状態をわたしはシータ波、あるいはデルタ波の状態であると考えています。

というのは、瞑想状態がある段階に入ると、まずアルファ波の状態のようなリラックスの状態、これは仏教では「軽安」といわれているわけですが、その状態に入り、そして三昧に入っていくわけです。で、三昧の前段階においては、当然シータ波的な脳波の状態、そして、その段階が過ぎてきた段階でデルタ波の状態になると。

その段階で完全に呼吸が微弱となり、そしてそのデルタ波を超えた段階が、「死」とも最終的な第四サマディといわれる状態と一致すると考えるべきじゃないでしょうか。

(司会) ありがとうございました。それでは次に実際に、オウム真理教の修行者の脳波測定の例を見てみることにしましょう。

実験を担当されたのはS師とそれからTさんということですが、詳しいお話を聞かせていただけますか？

(T) はい、今回は聖者MK最上尊師に被験者になっていただけました。

ヨーガでは解脱を七つの段階に分類していますが、聖者MK最上尊師は、そのうちの四つ目までの段階を成就されているという非常に高いステージの修行者です。

そして、このような修行者では、どういった脳波が現われるのか、これを様々な条件のもとで測定いたしました。

条件といいますのは、

[A]三分間目を閉じて安静状態を保ったときの脳波

[B]三分間音による刺激を与えていたときの脳波

[C]五分間マントラ、すなわち、聖なるヴァイブレーションと深遠な意味を持つひとまとまりの言葉を心の中で唱えていただいたときの脳波、このマントラは

[C1]帰依マントラと呼ばれるマントラ

[C2]大乗の発願と呼ばれるマントラ

[C3]苦の詞章と呼ばれるマントラ

の三種類を用いました。

そして、

[D]五分間マントラを聞いたときの脳波

最後に、

[E]究竟の瞑想、つまり自己の心の構成要素を知るために、心を寂静に保って行なう瞑想をしたときの脳波

です。以上です。

(司会) なるほど、ところで、実験の結果はいかがだったのですか？

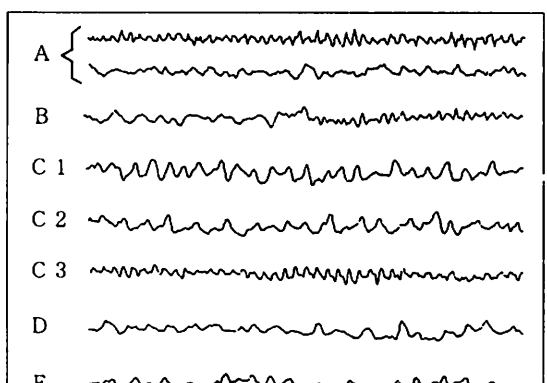
(S) それはわたしの方から申し上げましょう。

まず安静状態での脳波[A]からです。測定直後からアルファ波三〇秒後からはシータ波が現われました。

次に音による刺激を与えた脳波[B]です。この場合は、シータ波からアルファ波が現われました。

マントラを唱えた際の脳波[C]については、[C1][C2]についてはシータ波優位で、[C3]だけはアルファ波優位の中にシータ波が混っていました。また、脳波[D][E]ともにシータ波優位でした。

(司会) はあ。もしこれが普通の人だったらどうなんでしょうか。

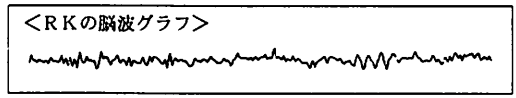


聖者ＭＫ最上尊師の実験時の脳波

(S) 成就していない修行者に対して同じ実験を試みたところ、全体的にベータ波、アルファ波優位でした。

(司会) ふむ、そうなんですか。これらの実験結果は、結局どういうことを意味しているのでしょうか。聖者MK最上尊師は、普通の人よりも深い意識状態に入りやすいということなんでしょうか。

(T) そうですね、聖者MK最上尊師の脳波は全体としてシータ波が優位だったわけですが、普通、シータ波というのはまず現われないんですね。で、シータ波というのは、睡



成就していない修行者の脳波

眠時に出る脳波なのですけれども、この実験の際、聖者ＭＫ最上善逝は眠っていなかったことを確認しています。ですからこのとき、通常の睡眠とは違った一種の深い意識状態にあったと考えられます。

（Ａ）もともとマハームドラーの達成と呼ばれるものは、意識状態のある状態、つまり普通の状態でいて、眠りの状態ということがいわれているわけだから、そういう意味においては、彼女がマハームドラーを達成していることの一つの証明になっているだろうね。

（ＭＭ）ところで、実験の各段階における脳波の違いはどのように説明がつくのでしょうか。まず［Ａ］。これは、三分間目を閉じて、安静状態を保ったときの脳波です。

（Ａ）まず、アルファ波からシータ波に移行していっているわけだけども、これは明らかに瞑想に熟達した人と言うことができるよね。つまり、アルファ波から三〇秒間でシータ波に入る、ということは、即深い意識状態に入れるということを表わしていると言えると思います。

（ＭＭ）これは、非常に早いということですね。

（Ａ）非常に早いですね。普通の人はやはりシータ波は何時間やっても出てこないでしょう。やはり成就している、達成しているということじゃないでしょうか。

（ＭＭ）では［Ｂ］です。三分間音による刺激。この場合はヴァジラ・ベルを用いましたが、音による刺激を与えていたときの脳波。

（Ａ）これは、その音そのものが、ＭＫ最上善逝にとっては苦痛である、ということの現われだね。つまり、深い意識状態から、それより一段階低い、リラックスの状態に移行していってると、つまりこれは、仏教で言うところの外的刺激が人間を堕落させるということの証明である、と言うことができます。

（ＭＭ）次は五分間マントラを心の中で唱えた場合です。まず、［Ｃ１］は帰依マントラを心の中で唱えた場合です。

（Ａ）この帰依マントラというのは、グル・シヴァ大神、すべての真理勝者方、あるいは戒律に対する帰依マントラですから、修行者にとっては最も自分自身をリラックスさせる、解放するためのマントラであると言うことができます。したがってシータ波優位になることは当然だと言えるでしょう。

（ＭＭ）次に［Ｃ２］、大乗の発願を唱えたときの波形です。

（Ａ）この大乗の発願についても、最も魂にとっての理想的な形のマントラ。つまり自分自身の存在が、すべての魂を利するために存在してるんだ、というマントラですから、これも同じように、最も心をリラックスさせ、そして、煩悩の禁断という現象が起きますから、同じようにシータ波優位であることはうなずけます。

（ＭＭ）次に［Ｃ３］、苦の詞章を唱えたときの脳波です。

（Ａ）ＭＫ最上善逝の場合、多くの信徒さんと深い縁がありますから、彼女が苦の詞章を唱えたとき、自分自身の意識状態だけではなく、多くの人のカルマの流れが彼女の心に投影されるはずです。したがって、シータ波とアルファ波が両方生じたことはうなずけます。

（ＭＭ）次に［Ｄ］。これは尊師の唱えられる、タントラ・ヴァジラヤーナの帰依マントラ（＊注１）を聞いたときの脳波です。

（Ａ）彼女にとって、イニシエーション、つまりグルのマントラを聞くということは、最も心身がリラックスし、心の解放状態に至るわけですから、これも同じようにシータ波優位であることは当然のことだと言えると思います。

したがって、周りの現象とそれから彼女の瞑想状態との一致、これは脳そのものの働きが外的情報の受容・判断・処理といった機能があるわけだから、当然外的情報の質によって、つまり心をリラックスさせるとかあるいは緊張させるとかいう質によって、脳の働きに変化が起き、そこから発生する脳波がこのような形で現われることは当然であると言うことができるでしょう。

（ＭＭ）最後に［Ｅ］。究竟の瞑想を行なったときの脳波です。

（Ａ）究竟の瞑想とは、最も深い意識状態に本来は到達しなければならないわけですから、このような結果が出て当然ということができます。ただ、わたしの印象では、この究竟の瞑想は非常に短かったんじゃないかと思うわけだけど、どうだ？

（Ｓ）長さとしては約一分間です。

（Ａ）でしょ。この場合はまあ究竟の入り口、だからもう少し長く瞑想させれば、デルタ波が出たんじゃないかと思います。

（Ｓ）はい。そうですね。デルタ波もやや見られたと思います。

（Ａ）そうでしょ。だから、もともと究竟というのは、最も深い意識状態になりますからね。

（ＭＭ）実際、実験が終了してから聖者ＭＫ最上善逝にその

＊注１　タントラ・ヴァジラヤーナの帰依マントラ：当時の修行法（マントラ）の名称で危険性はない。「タントラ・ヴァジラヤーナ」については別巻の注釈参照のこと。

ときの体験を聞いてみました。まずマントラを心の中で唱える実験を行なっている間は、意識が肉体にもあり、そして、さらに別の身体にもあるという、意識が分化した状態だったそうです。また尊師のマントラを聞いているときには、自分自身の光が強くなったように感じたそうです。

(司会) ありがとうございました。最後に番組の締めくくりとして、尊師、何かコメントをいただけますか？

(A) 今、オウム真理教の実験というものは、いかに人間を科学するか、そしてその科学の背景に、今までの世界の最高の教えの集積というものを当て、そしてそれによって二十一世紀の新しい時代に対する新しいアプローチを試みようとしているわけですが、このロシアにおいては、今まで多くの同じような科学的実験がなされたと聞いています。

したがってもし、この番組を見ていらっしゃる方の中で、そのような実験に携わっていらっしゃった方がいたならば、ぜひともオウム真理教に協力をしていただきたいと思います。

5. 無的ステージと脳波との関係

【説法】絶対自由へ――「死」をも超越して

皆さんこんばんは。麻原彰晃です。

皆さんが日々の生活に瞑想を取り入れるとするならば、このストレス多き時代において、皆さんはより活動的な人生を送ることができます。

それはなぜでしょうか。それは、瞑想そのものがわたしたちのホルモンのバランスを整え、例えば副腎皮質ホルモンのようなストレスと関係のある部分を強化し、それによってストレスに耐え得る肉体、そして精神をつくり上げることができるからです。

ところで、オウム真理教においては、いろいろなステージの成就というものが存在しています。それは、例えばラージャ・ヨーガの成就、クンダリニー・ヨーガの成就、マハームドラーの成就といったものがそれに当たります。

そして、高い意識次元に達することを脳波的に説明するとするならば、より高い意識状態に至れば至るほど、シータ波優位の脳波となり、そしてそれよりも一段落ちる成就、例えばクンダリニー・ヨーガの成就などの場合、アルファ波優位の脳波の状態となり、そして普通の人の場合、一般的にはベータ波優位の脳波の状態となるということが実験によって明らかとなっています。つまり成就というものは、呼吸の停止や、あるいは心臓の停止だけではなく、脳波においても大きな影響があるんだということが証明されつつあるのです。

そしてこれらのことは、わたしたちがわたしたちの生、つまりこの生存や、死、つまり死期等をコントロールすることのできる可能性を示唆していると言うことができるでしょう。それはなぜかというと、もともと人間の死を規定する場合、呼吸の停止、心臓の停止、そして脳波の停止といった三つの条件が整った場合、それは医学的に見たら完全に死ということになるからです。

そして、わたしの説き明かす「絶対自由」とは、自己の生、自己の死をも自在にすることを求めています。したがって皆さんが真理の実践を行ない、そして瞑想修行に熟達するならば、皆さんも必ずや脳波のコントロール、呼吸のコントロール、そして最終的には心臓のコントロールを行なうことにより、自在に死を選び、そして死後の世界をコントロールできるはずです。

この課題は皆さんにとって大変難しいかもしれない。しかし、与える恩恵は、この世の中の何よりも価値のあることだということを、わたしは確信します。

【対談】

(司会) 以前この番組でオウム真理教の修行者のステージを軽く説明申し上げたのですが、これは実は修行者の修行の進み具合の目安のようなものですね。それで、今回はまず、その詳しい内容について知れたいと思うのですが、聖者MM供養値魂の方から説明願えますか。

(MM) はい、わかりました。オウム真理教の出家修行者は大きく分けて成就している者と成就していない者の二つに分けることができます。この成就の段階には七つの段階があります。

まず一番目はラージャ・ヨーガ。これは意志のヨーガと呼ばれ、シンボルカラーは黄色で表わします。次にクンダリニー・ヨーガ、これはエネルギーのヨーガと呼ばれ、オレンジ色のシンボルカラーを有しております。三番目はジュニアーナ・ヨーガあるいはマハームドラーと呼ばれる段階です。ワインレッドのシンボルカラーを有しております。

さてこれ以上のステージについては、…麻原尊師の方から説明をお願いいたします。

(A) このマハームドラーの達成は、仏教の言葉を借りるならば、阿羅漢、つまり供養に値する魂になった、ということを意味しています。そしてこれからいよいよ大乗のステージへと移行するわけです。大乗のステージとは、自分自身が到達した地点、つまり阿羅漢の状態にすべての魂を導くための修行を実践する者と言うことができるでしょう。そしてこれによって、大いなる智慧と大いなる功徳を有す

ると。つまり、現象を動かす力が大きくなると。この達成が大乗のヨーガの達成と言うことができます。

次にこれらの多くの功徳によって、その魂は形状界の上位、つまり全く欲望のない形状の世界へと移行するようになります。これをアストラル・ヨーガ、あるいは報身のヨーガと呼んでいます。そしてこの成就ののち、最終地点である超越童子天を超え、そして非形状界へと移行するわけです。ここには光、データしか存在しないと。で、この状態をコーザル・ヨーガの状態と言うことができます。そして、このコーザル・ヨーガの状態の最終的な、すべてのデータを完全に止滅し、絶対的な自由・幸福・歓喜の状態に至った状態、これを最終解脱と言っているのです。

(司会)ありがとうございました。ところで、今回の実験では、どのステージの方に被験者になっていただいたのでしょうか。

(S)はい、まず成就前の出家修行者の方二名、ラージャ・ヨーガの成就者三名、クンダリニー・ヨーガの成就者五名、そしてマハームドラーの成就者一名、そして、大乗のヨーガの成就者一名の方に被験者になっていただきました。また、今回の実験では、前回の実験と全く同様の条件で瞑想に入っていただいています。

(T)まとめると表のようになります。ここで、横軸は修行のステージ、そして、縦軸は脳波の種類を表わしています。

(S)この表を見ると、ステージが高いほど深い意識状態になっているようですね。

(MM)そうですね。ベータ波が出ているのは、成就していない人だけですし、マハームドラーの成就者以上では、すべてシータ波が優位になっていますね。

(S)それから一言付け加えさせていただくと、シータ波は通常睡眠中に出る脳波ですが、被験者たちは眠っていなかったことを確認していますので、今の実験結果に対するコメントは正しいと判断してよいと思います。

(司会)尊師はどう思われますか。

(A)この結果は、ステージを科学的に、つまり脳波によって説明したことになる、と言うことができると思う。つまりこれは、人類に対しての大きな一つのプレゼントができたんではないだろうかね。

(司会)ありがとうございました。ほかに尊師にご質問がある方はいらっしゃいますか。

(T)尊師、脳波と睡眠の関係なんですけれども、ステージが高くなると、思念の連続、あるいは意識が連続すると聞いているのですが、これとステージの高い人の脳波がシータ波優位という点は関係があるのでしょうか。

(A)まず、心の働きが大変静かになるがゆえに、眠りの状態、外的に見ると眠りの状態で通常の活動ができると。ということは、睡眠が当然減少すると。つまり、睡眠を取らなくてもいい状態が出てくると。で、最終的には、睡眠が全く取らなくてもいい状態で活動できるようになると。で、これは、キリスト教や仏教で言っている「不死」と同義語だとみていいんじゃないだろうか。

(T)なるほど。それからそれに関連して、どうしてその眠りが必要なのかと、そういった点に関しても何か……。

(A)やはり、生命の維持活動において、例えばガンマ波だとかあるいはベータ波だとかいうような、ダイナミックな心の働きを脳波が表わすとするならば、これは実験する価値があると思うわけだけど、……つまり、ダイナミックな波は、それだけその粗雑な物質を破壊する力が強いんではないだろうか。だからそれは人間の生命維持活動においてうまく休息とそれから活動とのバランスがとられている、ということが言えると思います。

例えば例として挙げるならば、現代、日本ではよく起きる「過労死」などはまさにこのベータ波、ガンマ波優位の人が休息を取らず、その結果として死を迎えなきゃならない、というような状況が起きているんではないだろうか。

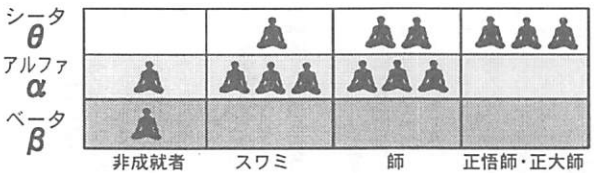
(T)わかりました、どうも。

(S)尊師、意識の連続のメリットを教えていただきたいんですが。

(A)つまり、わたしたちがこの肉体を有しているときに意識が連続しているということは、死後の世界においても意識が連続する前段階を経験していると言うことができるわけだよね。特にこれがデルタ波優位になり、最終的に脳波が停止した状態でも、意識が連続しているとするならば、それはどうだろうか。つまり、脳死という点から考えたら、完全に死を超越した状態を経験したということにならないだろうか。

(S)そう思います。

(A)だから、そういう意味においてこの意識の連続という



「３分間の安静」、「５分間マントラを唱える」、「究竟の瞑想」等で実験。総合すると、ステージの高い被験者ほどシータ波、アルファ波優位の状態が現われた。

ものはわたしたちに大きな利益を与える、と考えているわけだよ。

(S)はい、わかりました。どうもありがとうございました。

(MM)尊師、よろしいでしょうか。基本的な質問なのですが、周波数が減少するということは、その脳内における電気的な極性の変化、この回数が減少するということなんですね。このことと意識が深くなるということとは、どういう関係があるのでしょうか。

(A)まず、第一番目に考えなきゃならないことは、刺激に対して反応する脳の、その反応の回数が少なくなると。つまり外的刺激に反応しなくなってくる、ということが言えると思うんだね。例えばそれは、わたしたちが起きているときと眠っているときを見たらわかるとおり、眠っているときの方が、刺激に対する感受性は低いと。で、確かに外的情報がわたしたちに利益を与えるものであるならば、感受性が低いことはマイナスになるわけだけど、必要のない刺激に対して反応するのは、まさにエネルギーのロスであると言えると思うんだよ。で、そこから考えると、シータ波優位になるということは、それだけ外的刺激の中で、自分に利益のあるものは取り入れてて、利益のないものは落としている、ということが言えるんじゃないだろうか。

(MM)わかりました。

(A)つまり煩悩が少ないと。

(MM)ということはその心の静止、完全な心の平安に近付いているということですか。

(A)そうだね。そういうことだと思います。

(司会)ありがとうございました。そろそろ時間も迫ってまいりましたので、番組の締めくくりとして、尊師の方から何かコメントをいただけるでしょうか。

(A)今実験しているのは、脳波、つまりヨーガ的な言葉を使うならばアストラルとステージの関係についてアプローチしているわけだけども、これが次に、心臓、つまりコーザルと情報との関係について、わたしたちが研究することができるようになったならば、もっともっとロシアの方(かた)を含めて、世界中の方々に利益を与えることができるんではないかと思います。したがって、いずれかそのアプローチを弟子たちにはやっていただきたいと考えています。

6. 霊的ステージと心の強さとの関係

[説法]人間の最終目標――一切の刺激からの解放

こんばんは、麻原彰晃です。

人間の最終的目標は何かというと、それは一切の刺激から解放されること、と言うことができるでしょう。いにしえの仏典にも、それを取り除く方法が延々と何千ページにもわたり書かれています。これは、わたしたちが、本質的には情報のない世界で生存する限り、不死を得ることができるということを根拠として展開している、インド・ヨーロッパ語族の根源的な教えである仏教の独特のスタンスを表わしているものであると言うことができます。

ところで、この外的情報と自己の本質との関係について、これから少し皆さんにお話をしたいと思います。

わたしたちは識別というものを土台とし、経験がそれに絡み合い、そしてイメージを形成し、そのイメージの働きによって感覚器官が働くというプロセスをたどります。つまり、外的にある情報があったとして、その情報がもしイメージに作用しなければどうなるかというと、全くイメージが経験の構成に影響を与えることもなく、それによって識別に影響を与えることもないということが言えるのです。

例えばベルを例に取りましょう。大きなベルが鳴ると。そうすると感覚器官、特に耳と、それから触覚は働き、それによってイメージが形成されます。このような大きなベルは、例えば火事の印であるとか、あるいは例えばだれか強盗が侵入したとか、いろいろとそのような危険なイメージがそこで形成されます。そして、それによって、経験の構成が働く、といった仕組みになるのです。つまり、例えば火事では焼け死ぬから逃げなきゃならないとか、あるいは、例えば強盗が入ってきた場合、自分自体の身体を傷つけられるとかいったような経験の構成の働きが、働き出すわけです。そして、それによって識別は〝恐怖〟を形成します。

では、例えば修行によってこの感覚とイメージ・経験の構成・識別といったような一つ一つの要素が浄化された場合、どのようになるでしょうか。例えば、ベルはベルの音であるとだけ認識される。それによってイメージが働かない。よって例えば、過去の苦しい思い出が生起しない。それによって識別は、恐怖等の心の働きが成立しない、ということになります。

単純に、今回皆さんにお話ししていますが、しかし実際は、この一つ一つのプロセスを浄化することは、大変難しいと言うことができます。なぜならば、わたしたちがその識別や、経験の構成や、あるいはイメージや、あるいは感覚そのものに対して、日々とらわれることを喜びとし、そしてその裏側にある苦しみというものを理解することができないからです。

仏典に面白い引用があります。それは、朝昼晩一日三回、一回に百回ずつ槍で刺されると。そしてそれを百年間続けると。その苦しみによって、もし「苦」というものを理解し、悟り、解脱することができるならば、それは素晴らしいわけであるが、それだけの苦しみを得たとしても、な

かなか悟り得ないんだと。これはまさに、わたしたちが感覚に対して強くとらわれてることを意味しています。つまり、この人間の生を受ける前の生において、多くの感覚の喜びを経験しているがゆえに、苦しみが今、経験し続けていたとしても、その経験に対してそれを否定し、抵抗することができない状態をつくり上げていると言うことができるのです。

しかし、それを取り除く方法があります。それは真理の実践です。

真理の実践とは何かというと、この感覚器官の働きや、あるいはイメージや経験の構成・識別等に対して、淡々とまず現象を見つめる訓練から入っていきます。そして、その訓練に対しては、もちろん背景となる教義をしっかりと学び、それによって感覚器官の本質がどうであるか、――例えば感覚器官の働きは、アセチルコリンやアドレナリンの化学物質が神経シナプスの仲介役を果たし、それによって感覚器官が成立するわけですが、それが精神的働きや心の働きによって、分泌が盛んになったりあるいは阻害されたりといったような働きを形成します。これによって、感覚器官の働きが制御されたり、あるいは、興奮した状態を形成するのです。つまり、この働きには明らかに精神的作用心の働きというものが影響を与えているわけです。

これらのことから考えても、心と、それから感覚器官の働きというものは大変深い関係があり、そして心の働きが浄化され、情報に対して正確な判断ができるようになると、わたしたちの感覚器官は、完全な制御された状態になるのです。

したがって皆さんが、外的な情報によるショック、あるいは外的情報から来る心の苦しみを取り除きたいと考えるならば、それは真理の実践を行なうことが最高だと言うことはできるでしょう。

【対談】

◎修行ステージとショックに対する強さ

(司会)ところで今回は、ステージの高さとそれからショックに対する強さについての実験ということなんですが、今回の実験の動機というものは、一体どういうところにあるんでしょうか。

(S)はい。わたしたちは日々修行を行なっていますが、その修行によって肉体や心が強靭になってきます。今回は特に、「心」に関して、その強さを実験によって証明しようと試みました。

(MM)その肉体や心が修行によって強くなるという例は、オウム真理教の修行者の中にたくさん見られます。例えば、あるラージャ・ヨーガの成就者は、一五〇〇ボルトの電流が体に流れたとき、少し焦げただけで、心臓は平気であったと。それから、あるクンダリニー・ヨーガの成就者は、水中に約十五分間潜って呼吸を停止させることができたと。このような例は枚挙にいとまがありません。

(司会)なるほど。

(S)今回は心の強さ、その中でもショックに対する心の強さというものを実験によって証明しようと試みたわけです。

◎尊師の体験

――二〇〇Vの電気に感電？　トリカブトを飲む？

(司会)そうですか。ところで、尊師ご自身も、似たような体験をお持ちだと思うのですが、お聞かせ願えますか。

(A)そうですね、そのような体験というのはたくさんありますが、一つの例としては、MM供養値魂の方から説明していただけたらありがたいけども、頭に針を刺してまして、それで、あれは……。

(MM)そうですね。もともとは治療のために針を刺したんですけれども、そこで、操作者が操作を誤りまして、大電流を流してしまった。つまり、頭に電流が直撃したことがありました。

(A)あれは、ボルトでいくなら何ボルト何アンペアぐらいなんだろうねえ。

(MM)大体、一〇〇ボルトぐらいです。

(A)そうだね。

(MM)最も感電死をしやすい電圧ですね。それより高いと電極が吹っ飛ぶことによって(A：笑)、時間が短くなって助かる例があり、それより低いとあまりショックはありません。それで、二〇〇ボルトの近辺というのは、かなり感電死が多いんです。

(A)そのほかに、これはマハームドラーの修行でもあるわけだけども、外的な情報、特に、感情をかき乱されるような外的刺激をわたしは多く受けているわけだけど、そういう外的刺激に対しての心の働きというのは、完全に止まってしまっているという状態です。

(MM)それから尊師の修行時代のエピソードとして、例えばトリカブトのような致死性の毒物をどんどんと飲んで、体の変化・心の変化を確かめたことがあると聞いたことがあります。それで致死量の何倍もの量を服用し、平然とされていたという例がありますね。

(A)そのほかに、癌になったときに、体の周りに約七〇度から七五度くらいのお湯をゴム製のチューブを通して回したわけだけども、全くやけどをすることがなかったと。そのほかに、体にアルコールが完全に付いてぼうぼうと長い時間燃えて、それでもやけどしなかったとか。そういう例

があります。

(司会) ありがとうございました。では、そろそろ具体的な実験内容について説明していただけますか。

◉ショックに対する強さ
――心拍数の変化と発汗による皮膚抵抗の変化で計測

(S) はい。実験は次のようなものでした。まず、被験者に横になった状態で三分間安静にしてもらいます。その後、大きなサイレンの音を一回鳴らして被験者にショックを与えます。

その際、二つの事項について測定しました。

まず第一は、心拍数の変化です。そして第二は、発汗による皮膚抵抗の変化です。これらは心電計によって測定しました。

被験者については、全部で七段階あるヨーガのステージのうち、第二段階目のステージであるクンダリニー・ヨーガの成就者七名、第一段階目のステージであるラージャ・ヨーガの成就者六名、そして、非成就者九名でした。

(司会) この実験では、どういうことがわかるのですか。

(S) つまり、これは被験者のショックに対する反応を見ているわけです。ショックを受けると、動悸が増したり、汗をかいたりしますね。そして、心の動揺が大きいほど心拍数が速くなり、発汗したりすることは生理学的に見ても常識ですし、また、実際に多くの人が経験していることだと思います。ですから、心拍数の変化を測定したり、そして心拍数が平常に戻るまでの時間の長さを測定したりすることによって、各自のショックに対する強さということがわかるわけです。

(司会) なるほど、そういうことですか。

(A) 確かに、わたしも修行に入る前というのは大変上がり性だったわけだけども、それが修行の進行と同時に、つまりステージが上がると同時にどんどん上がらなくなり、そして今では何が起きてもというか、外的条件がどう変わっても、変化しなくなったのは事実だね。

(司会) なるほど。ところで、実験結果はどのようになったのですか。

◉ステージの高い成就者ほどショックに強い

(MM) それについてはわたしの方から申し上げます。この画面のグラフをご覧ください。この図はショックによる心拍数の変化をパーセンテージで示したものです。横軸は心拍数が「通常の状態ではなかった時間」の長さを示しています。縦軸は心拍数の変化のパーセンテージです。そしてこの●印はクンダリニー・ヨーガの成就者、■がラージャ・ヨーガの成就者、そして▲印は非成就者を表わしています。

この図で左の方にいくほど心拍数の変化した時間が短い、そして下の方にいくほど心拍数の変化のパーセンテージが低い、つまり、左下にいくほどショックに対して強いということが言えるわけです。(図7参照)

(司会) これを見るとステージの高い成就者ほど左下に集まっていますね。

(MM) そのとおりですね。つまり、この心拍数の変化からステージの高い成就者ほどショックに対して強いということが言えるわけです。

(司会) ところで、もう一つの実験、つまり、発汗による皮膚抵抗の変化についての実験の方についてはどのようになったのですか。

(T) はい、では、次の図をご覧ください。

心電計によって以下のようなデータが得られます。この図のように、ショックを与えるとデータに変化が表われます。(図8参照)

この変化、すなわち電圧の変化を表にしますと、次のようになります。(図9参照)

この電圧の変化は発汗による皮膚抵抗の変化によるものですが、被験者のショックに対する動揺の程度を見ていることに当たります。この表で縦軸は測定電圧の変化を示し、

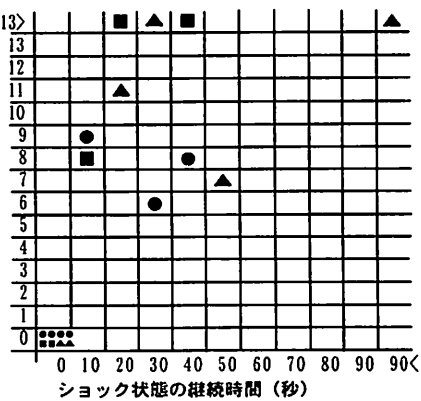


図7
心拍数変化
ステージの高い成就者ほど、ショックに対して強いことを示す左下に集まっている。

横軸は測定電圧が通常の状態でなかった時間の長さを示しています。

(S)図9を見ると、心電計で測定された電圧計の値は、心拍数の変化よりも敏感に被測定者の受けたショックの状態を表わしていると言えます。そして、この場合も心拍数のグラフと同様に、左下に位置するほどショックに対して強いと言えます。

(司会)こちらの方が先程の実験よりも、ステージの高い成就者の方がショックに強いという結果が顕著に表われていますね。

(S)そうですね。

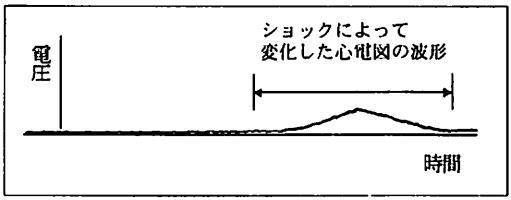


図８　心電図の電圧変化
電圧の変化がショックに対する動揺の程度を示す。

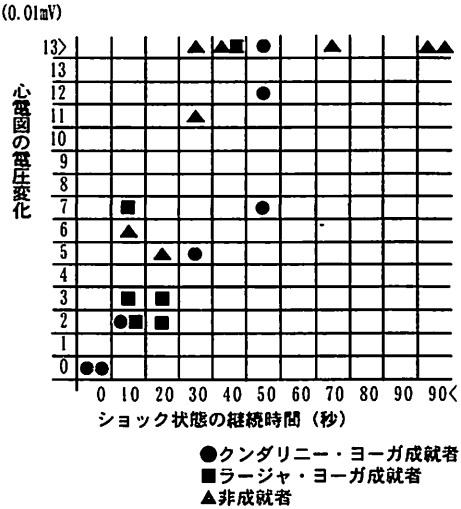


図９　発汗による皮膚抵抗の変化
ショックに対して強いことを示す左下に、成就者を示す●、■が集まっている。

(T)尊師、これは何か意味があるのでしょうか。

(A)まずポイントとしては、成就した場合、心臓の働きに異常が出る場合が多いと。というのは、心臓の筋肉はもともと不随意筋なわけだけども、これが随意筋的な働きに、成就者はなるということが一つは言えると思います。で、それによって心拍数が非常に取りづらかったのではないかということが一つあると。ところが発汗については、ある程度不随意的な生体反応ですから、発汗の方が結果を正確に表わしているというのが論理的だと思いますね。

(T)なるほど、わかりました。

◉死後ショック

(司会)これら二つの実験によって、高いステージの成就者ほどショックに対して強いということが証明されたわけですが、尊師はこの実験結果についてどのように思われていらっしゃいますか。

(A)これはまさにオウム真理教の目的としているところが、科学的に証明されたということを表わしていると思います。というのは、わたしたちのまず達成しなければならないのは、死後ショックをいかに克服するか、ということです。その場合、外的情報によって死後ショックが起きるわけだから、その外的ショックに対して強くなる修行を行なっているとするならば、その人は死後ショックを受けずに次の世界へと輪廻転生することができます。死後ショックを受けずに次の世界へ転生する場合、表層意識から潜在意識、潜在意識から次の表層意識へと移行するわけだから、その人が今生で培ってきたいろいろな修行法、あるいは心の経験といったものを、そのままダイレクトに来世へ持ち越すことができるのです。よってより上のステージへ行けば行くほど、心は強くなる。それによって情報に対しては強くなるということが言えるでしょう。

(司会)ありがとうございました。何か尊師に質問はありますか。

(S)はい。ラージャ・ヨーガは意志のヨーガ、クンダリニー・ヨーガはエネルギーのヨーガ、マハームドラーは心のヨーガといわれていますが、ステージが上がることにショックに対する強さが増していく、そのメカニズムはどのようなものなのですか？

(A)はい、わかりました。まず、ラージャ・ヨーガについては、これは他の武術などでもある程度培える強い意志の力によって、外的なショックに対して耐える力が付くと見ていいと思います。クンダリニー・ヨーガについては、

ショックを受けることによって一時的にエネルギーの変化があるわけですが、その変化したエネルギーが上方に流れることによって、つまり上昇することによって、ショックが起きない。つまり、圧力とそれからエネルギーの関係を考えていただいたらわかりますが、例えば、小さな器で一定のエネルギーの場合と、それから大きな器で同じ量のエネルギーの場合を考えた場合、当然後者の方が外的に圧力を加える力が弱い。これは何を意味しているのかというと、クンダリニー・ヨーガの成就者というのは体を巡っているエネルギー、風の通り道が非常に大きくてしかも広いということだね、S君。

(S)はい。

(A)その場合どうなるかというと、ある部分で例えば熱を加えたとしても、その加えられた熱によってそのエネルギーが膨張しても、そのエネルギーは上昇すると。それによってどうなるかというと、結局はストレスを受けないという状態が起きると。で、次にマハームドラーの達成、心のヨーガといわれているマハームドラーの達成はどうなるかというと、その情報そのものをシャットアウトできる状態にあるわけだから、最終的にはこれはエネルギーの変化すら起きなくなるわけだね。――というこの三つの違いがあります。

(S)はい、わかりました、ありがとうございました。

(司会)尊師、最後に何かコメントをいただけますか。

◉絶対的真理

(A)もともと真理と呼ばれるものには二つタイプがあります。その一つは「相対的な真理」。これは、例えば、人間界における真理と動物界における真理は違うといったようなものです。例を挙げるならば、動物界においては完全なる弱肉強食であると。この法則に従い、力の強いものが幸福を得ると。人間界においてはそうではなくて、現代においてはカネや地位や権力を得た者が表面的な幸福を得るという法則があると。そのためにはどうしたらいいのか――という理論および実践、これを「相対的真理」と言うことができるでしょう。

逆に「絶対的真理」というものがあります。これは動物であろうと人間であろうと、同じもの、例えば動物も死ぬわけだし、人間も死ぬと。で、その死に対してどのようなアプローチをすることが最も幸福になるのかという教えであると。今回の実験は、まさに、その絶対の真理の中枢を科学的に解明した画期的な部分であると思います。わたしに言わせると、もう少し対照となる実験を多くし、かつ被験者を多くすることによって、よりはっきりとした形で皆さんに示してあげたいな、という気持ちがあります。しかもその、クンダリニー・ヨーガの成就者が、例えば何カ月間か修行しない場合と、あるいはした場合の違いとか、あるいはラージャ・ヨーガの成就者が同じように修行しなかった場合とした場合の違いとか、あるいはまだ成就していない人が修行した場合としてない場合の違いとかいうことを含めて検討するならば、オウム真理教で説き明かしている修行の必要性、あるいは修行の意味合いというものが、よりはっきりと、もっと数学的に科学的に証明できるんじゃないかと思います。これについては、皆さん楽しみにしていただきたいと思います。

(7、8は説法・対談なしのため、略)

9. 質疑編　神への道を考える

[説法]内分泌とショックに対する強さ

こんばんは。麻原彰晃です。

今日は皆さんに、内分泌の働きと、そしてそれがどのように盛衰的な体験に生かされるかについてお話をしたいと思います。

皆さんもご存じのとおり、内分泌系の働きと、そしてショックの関係については、よくご存じのはずです。例えばホルモンの働きが正常に行なわれている場合、わたしたちは、特にこれは副腎と関係があるわけですが、大変なショック状態に陥ったとしても、そこから回復することができるというような話をよく聞きます。ところで、わたしたちが内なる世界の扉を開くためには何が必要なのかということを考えた場合、このショックに対していかに強くなるかということが一つのポイントとして挙げられると思います。

つまり、わたしたちの意識というものは内なる空間をものすごいスピードで通過します。そのときに、わたしたちの煩悩のけがれ等とのぶつかり合いが生じ、それにより、般的には気絶状態を経験するわけです。これは修行者もよく虚空三昧といった形でその状態を表現されます。つまり、内なるエネルギーが上昇する、それによって意識が上昇する。しかし、その意識は、内なるデータのけがれとぶつかり合い、そしてそこで大きなショックを受け、そこで気絶する。そこで当然呼吸が止まったり、あるいは、何も経験しない時間、これをかなり長い間経験する。ちょっとおかしな話ですが、つまり経験しない時間を長く経験するということは、その間は気絶しているということが言えるでしょう。

しかし、これらの働きに対して、もしわたしたちの内分

泌系、特に副腎の働き、あるいは膵臓の働き、あるいは胸腺の働き、あるいは甲状腺の働き、あるいは松果体の働き等のホルモンの分泌がコントロールされ、そして抑制されるものは抑制され、あるいは逆に活発化されるものは活発化されるならば、わたしたちはその風の働きを自由にコントロールすることができるようになり、そしてそのホルモンの働きの形成する世界を経験することができるようになるわけです。

例えば例を挙げるならば、膵臓の機能とそれから太陽神経叢との働きが普通の人の状態より活性化された場合、わたしたちは、俗にいうところの低級霊域というものを経験します。この「低級霊域」とは何かというと、要するにわたしたちが輪廻転生を繰り返すときの中間状態、つまり人間に生まれ変わる前の状態、あるいは人間が死に、次の世界へ至る中間の状態を経験することができるのです。しかし、もしこれらの働き——これはチァクラではマニプーラ・チァクラと呼ばれるわけですが——マニプーラ・チァクラの働きや、あるいはもう一つ、チャンドラ・チァクラの働き等の働きが活性化されていない場合、例えばムーラダーラから上昇した風エネルギーは、このマニプーラ・チァクラやあるいはチャンドラ・チァクラで大きな衝撃を受け、そして、そこで完全に気絶の状態へと至るわけです。

したがって皆さんは、これらの内分泌系のコントロール、あるいは神経系の集中している部分のコントロールを行なうことにより、皆さんの内側の世界をよく理解することができるようになります。

しかし、ここでお断りしておかなければならないことは、これらの内側の経験イコール幸福に導くものではないということです。つまり、これはあくまでもわたしたちの形成している、例えばイメージや、例えば大脳の働き等といったものがどのような形で表現されているかを知るにすぎないということを理解する必要があります。つまり、これらはあくまでも自分の内側を理解する材料であって、それ以上の何ものでもないということを理解すべきです。そしてそれらの内側の内容を変える実践、これこそが真理の実践なのです。

しかし、何はともあれ、まず知ることから。さあ皆さん、今日から皆さんの内分泌系の働きのコントロール、そして神経系のコントロール、これに集中しようではありませんか。

[対談]

◎呼吸が停止して細胞が壊死しないのはなぜ?

(司会) 今回の「真理探究」では、視聴者からの質問を取り上げながら、実験に対する考察をさらに深めていきたいと考えております。

この番組に対する質問、ご意見、ご感想などをたくさんいただいておりますが、今回はそれをいくつかご紹介していきましょう。

まず最初は、第二回目の実験に関する質問です。

Q 「この番組では、十一時間二十分にわたり、呼吸停止の実験データが挙げられていましたが、呼吸停止していて、どうして細胞などが壊死しないのでしょうか?」

このような質問が来ていますが、これについてはいかがですか。

(MM) はい。生物の体内の基本的なエネルギー生産のサイクルとして、クレブス回路があります。この回路での分解作用は、ミトコンドリア内で酸素を用いて行なわれるわけです。

ですから、この現代の生物学のパラダイムにのっとって考えるならば、ここで酸素がなければ、細胞は壊死してしまうということになります。これを巨視的に見れば、次のようになります。

図をご覧ください。この図はドリンカーの生存曲線と呼ばれるもので、アメリカのドリンカー博士が提示したものです。(図10参照)

呼吸が停止したときの時間の経過と、人口呼吸による蘇生率を示しています。この曲線を下から読めば蘇生率、上から読めば死亡率が表わされるわけです。この図でもわかるように、呼吸停止後五分間経過しただけで、一〇〇人中七五人は助からないことになります。そして十分間経過すると、ほぼ一〇〇パーセントの人が助からないことになり

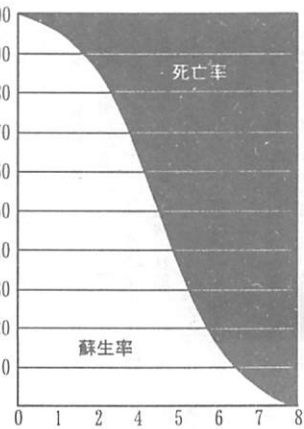


図10　ドリンカーの生存曲線

ます。そうなると、十一時間二十分にわたる呼吸停止が起こって平気であるということは、説明がつかないのです。

(A)確かに、一般の生物学的見方をすれば、今聖者MM供養値魂が言ったとおりだと思うのだが、しかし、例えばエネルギー生産がゼロになった場合、一体どうなるかという問題を考えたら、この問題についてはある程度の見解を出すことができるのではないかと思います。

そして、これは将来において科学的に検証しなければならない内容の一つだとわたしは考えているのだが、「プラーナ」と呼ばれる別のエネルギー形態が存在すると。このプラーナの存在は、わたしたちが呼吸停止あるいは心臓停止をなしていても、しっかりとその肉体を保全する働きがあるということが経験的にわかっているわけだね。だからその経験的な部分をあくまでも科学的に検証する場合、今の検査技術がもう少し微細になるならば、そこのところも明らかになるのではないかと考えています。

(T)尊師、そこで「プラーナ」という言葉がありましたが、これに関してもう少しわかりやすく説明していただけますか。

(A)はい、「プラーナ」というものは、心の働きによって生じる独特のエネルギーと言うことができます。

例えばある人の心が神々に近くなるならば、体験的にそのプラーナの上昇を経験することができます。あるいは一般の人もこのプラーナのある意味での弊害を経験しているわけです。例えばエイズウイルスの感染によって、プラーナの中の最も劣悪なエネルギーであるアパーナ気と呼ばれるものが下降することによって、エイズの病状がどんどん進行し、そして最終的には下痢、あるいは脱力感、あるいは意識障害、あるいは死といったようなものを経験するわけだね。よってもしそのプラーナを精神的にコントロールでき、しかもそれが科学的に測定できるならば、今の人類よりもう一つ高い次元での人類が形成されるのではないかと考えています。

そして、そのプラーナにこそサマディの秘密を解くカギが隠されている、というのがわたしの今の立場です。

(T)なるほど、わかりました。

(司会)ありがとうございました。

◉高い修行者の脳の働きは？

(司会)ほかにも、こんな質問があるので読み上げます。

Q　「睡眠が深くなり、脳の活動が不活発になるほど、シータ波、アルファ波と、脳波の周期が遅くなるそうですね。ところで、高いステージの修行者ほどシータ波がよく表われると番組で言っていたのですが、高い修行者の脳は、あまり働いていないのでしょうか？」

それについては、尊師はどのように思われますか？

(A)もともと、脳の働きというものは、外的情報に対するレスポンス、これが脳の働きの一つの特徴であると考えるわけだが、その中で不必要なものと必要なものを選択する力によって、その人は当然外的刺激の反応を受けやすくなったり受けづらくなったりするはずであると。例えば、一つのことを達成するだけの精神集中力を有する場合、当然外的刺激の反応を受けない方がいいわけであって、当然それは、例えばガンマ波や、あるいはベータ波ではどうしようもないと。

例えば例を挙げるならば、ガンマ波の場合外的情報に過敏に反応するがゆえに、大脳の働きは活発になっていると。しかしこれは、その人に何の利益も与えないということが言えると思う。ところがシータ波優位になると、自分自身の本質というものを理解しているがゆえに、外的情報の中で不必要なものを完全に取捨できるような意識状態が形成されている。これによって、外的情報が存在するのにそれに影響を受けない脳波の状態が形成されるということになるのではないかと。

もう一つ進めるならば、この脳波の状態が完全にクリアな状態、平坦な状態になった段階で、つまり外的刺激が存在するにかかわらず、心は完全に静止した状態、この状態を真理では「大完全煩悩破壊の状態」といっているものと思われる。そうなると、このシータ波のときに、思考していないのではなく、不必要な思考を完全に遮断しているんだ、と見るべきである。

どうだろうね、聖者MM供養値魂、これに対しては。

(MM)はい、やはりその脳の全体が協調的に働いて、ゆっくりとした大きな波が出ているのではないかと、このように思います。

◉証明となる実験データは？

(司会)それから、第三回目のサマディに関する番組について、次のような質問がありました。

その前にまず、第三回目の実験の概略から申し上げます。オウム真理教のクンダリニー・ヨーガの成就者を被験者として、「チャンバー」と呼ばれる密室で五日間瞑想を行ないました。そしてその際、正師の酸素消費量は、一般人の約六八％という値が出ました。これは、「修行によって煩悩が減ると呼吸が減少する」という経典の記載事項の一つの証明になったのでした。

――まあ、こういう実験だったわけですが、では質問を読み上げます。

Q　「煩悩が減少すると、酸素消費量も減少するということ

ですが、このことを証明する実験データはあるのですか?」

(T)はい。例えば次のような実験データがあります。オウム真理教の出家修行者が、二十四時間にわたる厳しい修行をしている際の酸素消費量と、そして修行から出た後の酸素消費量を比較したものがあります。これによると、明らかに修行中の方が、酸素消費量が少ないということがわかります。極厳修行中、修行者は煩悩を減らすように努めています。すなわち、現世で培った煩悩的なデータの代わりに、聖なるデータを取り入れ、現世的な煩悩を滅尽しようとするわけです。したがって、修行中は煩悩が少ない状態と言えるでしょう。(図11参照)

(A)今の例を補足するわけだけども、例えば、極厳修行中で一週間の断水断食、あるいは十二日間の断水断食が平気で行なわれるということは、やはりその極厳修行中の煩悩の量というのは少ないと見ていいのではないだろうかね。そして、その十二日間の断水断食が達成されるということは、別の言い方をすれば、その人の肉体の状態は安静時に近いと。そして安静時に近いということは、当然酸素の消費は少ないということが言えるのではないだろうか。

(T)そうですね。

◉「修行」「煩悩」「マントラ」とは?

(司会)ありがとうございました。それから、このような質問も来ています。ちょっと読み上げてみます。

Q「番組では聞き慣れない宗教語を多く使っているのですが、その説明をしてもらえないでしょうか? 例えばオウム真理教でいう『修行』とか『煩悩』とか『マントラ』とか、一体何のことですか?」

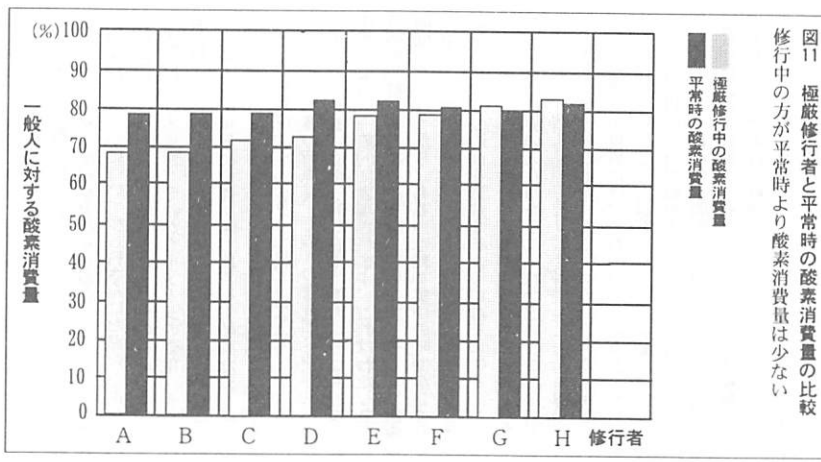


図11　極厳修行者と平常時の酸素消費量の比較
修行中の方が平常時より酸素消費量は少ない

これについてはいかがですか。まず最初に「修行」からお伺いしたいと思います。

(A)まず、「修行」というものは、人間の肉体的エネルギーの上昇、および精神的にいろいろな欲望からの解放、そして意識を神々に向かわせ、最終的には神々になるためのトレーニングと言うことができると思います。

(司会)はい、次は「煩悩」についてはいかがですか。

(A)「煩悩」というものは、わたしたちをこの世界に縛り付けている欲望のことであると言うことができると思います。

(司会)では最後に、「マントラ」については。

(A)「マントラ」とは、神々の秘密の言葉、つまり神々の発するヴァイブレーションを自分自身が発することによって神々と合一する、特殊なヴァイブレーションの音と言うことができると思います。

(司会)ありがとうございました。次回も、今までの実験を掘り下げて、別の視点から討論していきたいと考えています。

10. 死の科学的探究

[説法]死に際しての四パターン、ナーダ音について

こんばんは。

今回は皆さんに、生と死の流れについて少しお話をしたいと思います。

人間は必ず死ぬものである。この課題に対して、ノーと答える人は当然だれもいないはずです。しかし、この〝死ぬものである〟というとらえ方は、個々それぞれ違います。

特に、テーラヴァーダの修行を行なっている者や、あるいはタントラ・ヴァジラヤーナ（＊注2）の修行を行なっている者、そして普通の宗教的人生を歩いている人、それから宗教的実践を全く行なっていない人にとっては、全く違うものと言うことができるでしょう。

では、これらはどのように違うのでしょうか。まず第一にタントラ・ヴァジラヤーナの瞑想を実践している人の場合、当然死のプロセスを生前、つまり生きている間に経験しているわけですから、死というものは慣れ親しんだ瞑想の一つの体験にすぎないということが言えるでしょう。次にテーラヴァーダの場合、その前の生、つまり死ぬ前の生の、自分自身の培ってきた努力、この努力がどのような形で解放され、より幸福な世界へと転生するのかという意味での、大変な興味とそれから喜び、これが死として表現されるわけですから、これもまた大いなる楽しみと言うことができるでしょう。

では、一般の宗教を実践してる場合はどうでしょうか。それはその人が、もし精神的体験やあるいは霊的体験がない場合、当然自分自身の依存する神や、あるいは牧師、あるいは師といったような人たちのことを思い出し、そして半分恐怖しながら、そして何となく死んでいくパターンをとるはずです。

また、唯物的思考に完全に侵されている人の場合、死というものは肉体の停止イコールすべてが終わるという、ある意味で大胆な、しかも単純な発想によって完全なる死後消滅、そして次の生への移行、つまりこのときは別の意識、潜在意識が登場するわけですが、そのような状態になりますから、これもまた違った形の死と言うことができるはずです。

ところで、一般的にタントラ・ヴァジラヤーナやあるいはテーラヴァーダの瞑想を実践する場合、どのような形で意識が移行するのかについて少し皆さんにお話をしましょう。この移行のプロセスは、明らかに肉体的特徴の変化、そして感覚における異常、それからイメージの変化、そして経験の構成、識別といった順番に解放されます。特にこの中でイメージの世界に意識が移り出すと、特殊な音、あるいは音楽が聞こえてきます。これをわたしは「アストラル音楽」、あるいは「ナーダ音」と言っています。

このナーダ音の特徴は、その人の精神的な傾向を、一つのリズムや、あるいは単一的な旋律、例えば三つや五つの旋律等によって一般的に表現されます。これはわたしたちの性格が単純であることを物語っています。そして、思索の時間が長くなったり、あるいは精神集中の時間が長くなった場合、それに伴いこのアストラル音楽の旋律も長くなり、最終的には一つの曲を形成するようになるのです。

ところで、もうこの一つの曲が形成されたとき、わたしたちは次の世界の入り口を手に入れたということが言えます。つまり、例えば例を挙げるならば、ナーガの世界や、あるいはガンダッパの世界、あるいはインドラの世界といったような神々の世界には、それぞれのリズムと、そして旋律が存在しており、その世界を既に生前に経験してこそ、初めてその世界に次の生転生することができるからです。

もちろん、これらの中間的な経験のほかに、より深い意識状態における経験、それはコーザルにおける経験、例えば光やデータにおける経験といったようなものを確定させることにより、より高い世界への移行も可能となります。これらの一つ一つを確定させることこそが修行の目的であり、またその結果を得ずして死ぬことは、まさに恐怖そのものであるとわたしは考えるのです。

あなたは、これから、先程述べた唯物的な死を選びますか。それとも不安定な、宗教的な死を選びますか。それとも確定的なテーラヴァーダやタントラ・ヴァジラヤーナの死を選びますか。それはあなたが、これからどれくらい一生懸命、実際に精神集中の修行に励み、そして善や徳、寂静の実践を行なうかで決まるのです。しっかり頑張ってください。

＊注2　［説法］死に際しての四パターン、ナーダ音について」に出てくる「タントラ・ヴァジラヤーナ」については、別巻の注釈参照のこと。

【対談】

(司会)では、まず初めに、今まで行なった実験についてもう一回解説していただけますか。

(S)はい。この番組で扱ってきた主な実験の内容は、サマディと呼ばれる究極の瞑想状態の科学的検証、そしてショックに対する心の強さの修行ステージによる違いでした。

《サマディの科学的検証》

◉サマディ

(司会)まず、サマディの実験から振り返ってみましょう。

いにしえの仏典には、究極の瞑想状態であるサマディに入ると、呼吸が停止すると記載されています。

このときの実験は、この仏典の記載事項を科学的に実証しようというものでした。では、実験についての解説をお願いします。

(T)はい。このサマディの実験では、被験者に密室の中で瞑想してもらいました。そして、その際の密室内部の酸素濃度の変化を測定しました。

この実験の大きな特徴としては、密室に空気の漏れがないことを証明するために、密室自体を大きな水槽の中に沈めて、その気密性を客観的に証明している点にあります。

これがそのときの酸素消費量のグラフです。この実験では、なんと十一時間二十分の呼吸停止が見られました。（図1-1参照）

（司会）やっぱり、何回見てもこのグラフには驚くべきものがありますね。

（T）そうですね。

（司会）このグラフについて、医学的な見地から見るとどのようなことが言えるのですか。

（S）参考となるものとして、ドリンカーの生存曲線というものがあります。

これは呼吸停止が続いた時間と蘇生率をグラフにしたものですが、このグラフによれば十分間呼吸が止まった場合、死亡率がほぼ一〇〇パーセント近くになります。

（司会）十分どころか、この実験では十一時間二十分呼吸が止まっていたんでしたよね……。

（S）はい。そうですね。

◉サマディ中の意識――光の中に存在する意識

（司会）常識では考えられないことですね。ところで尊師、このとき、修行者の肉体や意識はどういう状態なのですか。

（A）このときの肉体および意識は、まず意識から説明すると、完全なる覚醒状態、つまり光の中に意識が存在する状態を経験しています。そして肉体は機能的には完全なる停止が起きていると見ることができるでしょう。

（司会）意識は鮮明ということですが、このとき聖者MK最上善逝はサマディ中、具体的にどのような経験をされていたのでしょうか。

（S）それについては先日もご紹介しましたが、体験談があります。（本巻565頁参照）

◉死とサマディ

（司会）なるほど……ということは、サマディに入っている修行者の肉体は死と同じ状態、つまり呼吸停止その他すべての生理機能の停止状態にあるといいますが、内的に様々な体験をしているわけですよね。

（A）ただ、死とは一つ違いがあるということが言えます。それは何かというと、人間の死よりより深い意識状態に意識が固定されるのです。つまり、コーザルに意識が移行しない限り死んでしまうということが、これはヨーガの経典や仏典でもうたわれているわけですが、これはわたしの経験からもそうだけども、死を超えた最も深い意識の層に意識が固定されているということが言えると思います。

つまり、一般の人間の死というものは、それよりも浅い、例えば、表層意識から潜在意識に移行して、そして低位のアストラル世界に移行し、それから次の生を迎えるわけだが、このサマディの状態のときは確実にもう一つ深い意識状態、つまり、コーザルに意識が固定されている状態であると言うことができると思います。

（司会）今のようなお話を伺って、肉体以外の何らかの意識体、言わば、魂とでも言えるようなものの存在も、わたしとしては感じたのですが。

（A）魂の本質と合一するというか、そういう状態だね。

（司会）ああ……。

（A）なぜここで、死と区別したかというと、一般的に肉体の単純な死の場合には、そこで当然肉体は滅びるわけだけども、滅びない一つの理由は、もう一つ深いコーザルと意識が合一しているがゆえに生じるんだと考えています。

ここは大変重要なところだけども、よく「彼岸」、あるいは「対岸に渡る」という言葉を使うわけだが、このアストラルがちょうど海の役割を果たしていて、そのアストラルを超えてコーザルへ渡ること、これを「対岸に渡る」あるいは「彼岸に行く」という意味である、と仏典では説かれています。

したがって、サマディに入るということはこの対岸に渡った者と言うことができるでしょう。

（司会）そうしますとこの、対岸から見るということで、生および死のプロセスが非常によく理解できるということになるわけですね。

（A）はい、そうです。つまりそこへ至って初めて、生と死のプロセスが完全に理解できる、ということになります。

◉死を超越した死の体験

（司会）それからですね、尊師、質問があるんですが、このときの聖者MK最上善逝の体験というのは、魂の経験といいますか、言い換えれば死後の世界、と同じなのかどうかということについてお伺いしたいんですが。

（A）死後の世界は一般的には、こちら側から経験し――こちら側というのはこの肉体側から経験し、そして死、そして再生を繰り返すわけだけども、MK最上善逝の場合、そうではなく、いったんこの肉体から先程述べたアストラルを通過し、コーザルへ至り、コーザルに至った点からこちら側の岸を見ているということが言えると思います。したがって、死を超越した死の経験と言うことはできるでしょう。

《脳波について》

◉脳波と意識の連続の関係

（司会）わかりました。それでは実験について見ていくこと

にしましょう。今度は脳波の実験でしたね。

(S)はい。このときは修行ステージが高い者と低い者の脳波を測定し比較しました。結果としては、高いステージの成就者ほど周波数の低い、ゆっくりとした波形で、しかし高い電圧の波が測定されました。具体的にいうと、成就していない者や低いステージの成就者はアルファ波・ベータ波といった浅い意識状態のときの波が優位だったのに対し、高いステージの成就者はシータ波といった深い意識状態のときの波が優位でした。

(司会)確か、修行が進んでくると、意識の連続という状態になり、それとシータ波などのゆっくりした脳波というのは関係があったと思いましたが、まず「意識の連続性」というものがどういうものなのか、それから意識の連続と脳波の関係について何かご説明願えますか?

(A)外的情報に左右されない精神集中した状態、これが意識の連続と言うことができると思います。そうなると、外的情報に左右されない脳波の状態が形成されているシータ波や、あるいはデルタ波というものは、すでに意識の連続の素地ができ上がっていると。つまり、まだ若干の反応があるということは、その外的な情報の中で——この「外的情報」というのは二つの意味があって、一つは耳や目や、あるいは嗅覚や味覚といった感覚器官から入ってくる情報が一つと。それから過去の記憶等の意識から生じる情報があるわけですが、この両方から完全に解放されるならば、本質的に、自分自身の本質が行なっている精神集中の作業を続けることができると。この状態が意識の連続であると。

◎意識の連続のメリット

(司会)この意識の連続には、どういうメリットがあるのでしょうか?

(A)この意識の連続というものは、精神集中の時間と、それから意識の深さとの関係があります。「意識の深さ」とは何かというと、要するに、わたしたちの表層意識から潜在意識、潜在意識から超潜在意識へと入っていくプロセスにおいて、どうしても精神集中の長さが必要であると。これはこの脳波の実験と一致してるな、とわたしは考えているわけですが、それはどういうことかというと、表層の意識から眠りの意識に入っていくと。そしてより深い眠りの意識に入っていくと同時に、脳波は平坦になると。

ただそこで、外的情報に反応する場合、強い電圧が生じる。ということは、何を意味するかというと、より深い意識状態へと移行します。当然、より深い意識状態へ移行するときには、それだけ意識の連続、つまり精神集中が長くなります。そして、最終的には完全に、この脳の働きが停止した状態、それでいて精神が集中している状態に至るわけです。そしてこの状態では、完全に意識はコーザルに入り、そして不死となるのです。つまりここで言う「不死」とは何かというと、外的情報に一切左右されず、精神集中をし続けている状態、つまり覚醒し続けている状態を表わすわけです。

(司会)ありがとうございました。

◎精神と脳の関係

(T)尊師、先程脳が停止して精神が集中しているということはわかったのですが、精神というのは脳が作っているものではないのですか?

(A)一般的には生理学では、脳が作ってるといわれていますが、ヨーガや仏教の理論には、もう一つ心臓にコーザルの意識というものが存在すると説かれています。したがって、脳の働きは、それを具体的に表現している器官にすぎない、というのがヨーガ理論です。

だから、これについては、心電図等のより微細な分析によって将来において証明されるのではないかと考えています。

《修行ステージとショックに対する強さ》

◎修行による不動心を検証

(司会)では、次の実験、修行ステージとショックに対する強さについて見ていきましょう。では助者S、お願いします。

(S)はい。修行すると心が安定し、様々な外的刺激に対して影響されにくくなるということは、修行をしている者にとっては体験的にわかることなのですが、このことを実際に科学的に実証しようと試みました。

具体的には被験者にサイレンを鳴らすことによってショックを与え、心拍数および発汗による皮膚電気抵抗の変化を調べました。

その結果、心拍数、皮膚電気抵抗の変化のいずれについても、高いステージの修行者ほど、ショックを受けにくくなっていることが実験により検証されました。

◎オウム真理教の目的

(司会)尊師は確かこの回の番組の中で「オウム真理教の目的としているところが科学的に証明された」と言われていましたが、これについてはどういうことなのですか。

(A)オウム真理教の目的としていることは、外的刺激、これは先程も述べたとおり感覚器官から来るものと、意識から来る、この二つの影響を受けない状態をつくりあげること、それこそ救済であると考えています。というのは、それらの刺激によってわたしたちは死後ショックを受け、そ

●クンダリニー・ヨーガ成就者　■がラージャ・ヨーガ成就者　▲印は非成就者

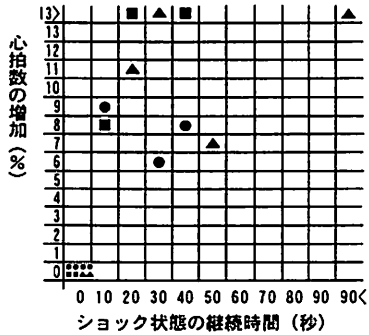


図12　心拍数変化

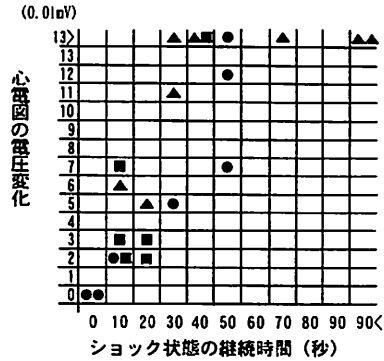


図13　発汗による皮膚電気抵抗の変化

こで気絶し、そして、せっかく生前に学んだいろいろな教えを、そこで完全に放棄しなければならない状態が形成されます。しかし、もしわたしたちがそれらの外的ショックに対して動することなく、しっかりとエネルギーの流れと、そして意識のコントロールができるならば、わたしたちは自在に自分自身のカルマの中で最高のカルマを現象化し、高い世界へと生まれ変わることができるのです。そのような意味においてオウム真理教の目的が一つ達成されたと説明したわけです。

◉死後ショック

(司会)その、死後ショックというものについて、もう少し説明していただけますか。

(A)わたしたちが亡くなるときに、必ず地元素・水元素・火元素・風元素の崩壊が起きます。それらの崩壊に伴い、わたしたちのエネルギーは徐々に心臓に集中します。そして、心臓に集中したエネルギーの流れは、わたしたちが生前に培ってきたカルマの構成に従って次の生を決定するためのエネルギーの流れへと移行するわけです。ところが、次の生を構成するそのカルマの流れがあまりにも強く、しかもそのカルマが大きな障害となる場合、エネルギーとそのカルマとのぶつかり合いによって大きなショックを受けます。それによって死後ショックが形成されるわけです。

(司会)死後ショックを受けないことによって、どういうメリットがあるのでしょうか。

(A)簡単に言うと、生前学んできた、例えば死から生への教え等があるわけだけど、それらのものをすべて活用して、次の輪廻転生ができるということが言えるだろうね。ところが、いったんショックを受けると、そのショックの強さによっては完全にそれらを忘却した状態になる、ということが言えます。

(司会)今回は、今までの実験を、死というテーマに沿って考えてきたわけですが、尊師、最後に何かコメントをいただけますか。

◉カルマ――次の生を決定する力

(A)今回の番組で新しく使った言葉「カルマ」について説明することによって、この番組を終了したいと思います。

カルマとは、わたしたちが日々行なっている言葉の力、あるいは行動、あるいは心の働き等が、総合的に「死」というものを境に、次の生を決定する要因となるものであると、ここでは定義しましょう。というのは、もともとカルマには生前現象化する、つまり生きている間に新しい経験をさせるための力となるものと、それから生きている間は力とならず、死を境に次の生を決定する力となるものの二つが存在します。そして、今回使ったのはその後者の方であると理解してください。

(1、12は説法・対談なしのため、略)

13. チャクラの科学的検証　PART II

【説法】光のスポーク――チャクラ

ロシアの皆さん、こんばんは。麻原彰晃です。

わたしたちは、通常、「わたし」と呼ばれる表層意識と、そして、本当はわたしたちを動かしている潜在意識の二つの要素によって、この人間の世界で活動を行なっています。

例えば、わたしたちが友人と会い、そして語り、楽しむ。この意識は、「表層意識」と呼ばれるもので、わたしたちが

「自分自身」と問い掛けられたとき、「これがまさにわたしである」という意識のことを指します。しかし例えば、数多くの知人の中から、特にこの人が好きであるとか、あるいは特にこの人が嫌いであるというような考え方は、その表面的な意識ではなく、より深い意識に根差されているのです。

では、この潜在意識を形成しているもの、これは一体何でしょうか。これはわたしたちの過去、あるいは過去世というものを土台として、経験が決定した際に、わたしたちが経験する心の働き、これこそが潜在意識を形成しているのです。

例えば、例を挙げるならば、髪の毛の長い女性に絶えず優しくしてもらっていると、髪の毛の長い女性イコール優しい女性であるというような考え方が固定化し、そしてそれは潜在意識へと移行します。この潜在意識へ移行した意識はわたしたちの行動パターンを、髪の毛の短い人より髪の毛の長い人の方向へと好意的な感情を形成するという形を取ります。したがって、もし、この感情の形成が正しければ、わたしたちは幸福になることができますし、逆に、もしそれが過ちであれば、不幸へといざなわれるのです。

ところで、この潜在意識に大きな影響を与えているもの、これがチァクラであると言うことができます。もともと「チァクラ」とは「スポーク」という意味です。これは、中心のエネルギー・センターから、外側に向かっている光の筋の様子を、いにしえからの偉大な聖者たちが透視し、そしてそれによって「チァクラ」という名前を名付けました。

もちろん、その霊眼の段階によって、そのチァクラの見え方はかなり違ってきます。それはちょうどわたしたちが対象に対して認識する場合、その人のもともと持っている能力のポテンシャルによって、対象を認識することと一致しています。

例えば機械の専門家で、そして車の各部品についてよく熟知している人が車を見た場合、その車の外枠だけではなく、内側のエンジンの状態や、あるいはギアの状態等々、その車の性質についてよく理解することができるでしょうし、逆に、もし車に対して、あるいは機械に対して全くの素人、しかも知識を持っていない状態であるとするならば、車は単なる外側の形状や、あるいは目に見える部分だけの仕様、つまり乗る側の立場に立った見解しか身に付けることはできないはずです。

そして、聖者にも多くの段階のステージが存在します。その段階段階、コーザルへ到達し、そしてコーザルから最終的なニルヴァーナへと到達した魂は、自分自身の身体を別の眼、つまり第三の眼で観察した場合、ムーラダーラ・チァクラ、スヴァディスターナ・チァクラ、マニプーラ・チァクラ、アナハタ・チァクラ、ヴィシュッダ・チァクラ、アージュニァー・チァクラ、そしてサハスラーラ・チァクラから光のスポークが出ていることを知るのです。これが、チァクラの由縁です。

もちろん、「光」イコール、例えば、現代の最先端である光科学を見てもわかるとおり、「情報」であると言うことができます。そしてこれらの情報は、外的世界へのバイブ役を果たし、あるいは外的世界からの情報のバイブ役を果たすわけです。したがって皆さんがこのチァクラについて精通し、そのチァクラのメリットと、そしてディフェクトについて徹底的に理解するならば、皆さんはこの現実の生活における行動に対してのメリットやディフェクトだけではなく、より深い意味での真実を理解し、そして有益な方向へと自分自身をいざなうことができるでしょう。それらの真実を知る道、それこそが真理なのです。

さあ皆さんも、しっかりと真理の実践を行ない、そして、自分自身をより幸福へと導いてください。

【対談】

◎各チァクラの特徴

(S)「チァクラ」というのは、わたしたちの身体に存在しているといわれる霊的なセンターです。主なものは七種類あります。普通の人の場合、眠った状態で働いていません。しかし、修行によってこのチァクラが開発されると、様々な能力や神秘的な力が身に付くといわれています。

(司会)具体的には、どのような力が身に付くのでしょうか。

(A)まず、ムーラダーラ・チァクラが開発されると、非常に健康になります。で、ここで言う健康とは、機能的な状態を回復させる働きが増大するということが言えます。でまあ、この科学的な意味合いとしては、温度上昇、つまり体温の上昇によって、肉体内における抗原抗体反応を促進することが一つと、それから第二番目には、それより以上の体温上昇によって、例えば病だとか、いろいろなウイルス性疾患におけるウイルス等を生存させなくする働きがあると言うことができるでしょう。

二番目のスヴァディスターナ・チァクラは、これは一般的にいわれると、性的なチァクラであるということが言えます。この性的なチァクラは当然対象となる異性に対する優しい言葉遣いでもわかるとおり、非常に詩的な、つまり情緒的な部分を活性化し、それによって非常に異性にもてるようになると。で、それだけではなくて、例えば男性ホルモン、あるいは女性ホルモンの働きを見られてもわかるとおり、例えばテストステロンはわたしたちを男性的にしますし、そして筋力を非常に増大すると。これからもわかるとおり、わたしたちが非常に男性的あるいは女性的になると。それだけではなくて、このチァクラが開発されますと、禁欲つまり性的な抑制が非常にやりやすくなると言えます。

三番目のマニプーラ・チャクラが開発されますと、わたしたちの俗にいうところの記憶力、あるいは推理力といった、学問に関する部分が非常に活性化されます。これは要するに太陽神経叢の働きが活発化することによって、食べた食物等の消化および吸収が促進し、それによって肉体全体の栄養状態が改善され、そして大脳の働きが良くなると考えたら最もわかりやすいと思います。

そして第四番目のチャクラである、アナハタ・チャクラが開発されますと、非常に誉れ・名誉といったものが、手に入るようになると言うことができます。これは多くの人たちの心を動かすことのできるチャクラでもあります。まあ、この働きについては、一般的に胸線の働きであるといわれていますが、わたしの私的見解から言うならば、そうではなくて、心臓に蔵している真我の働きが、より強く周りに対して影響を与えることができる結果として生じるものだろうと考えています。

次にヴィシュッダ・チャクラが開発されますと、まず天の声を聞くことができると。これは神々と実際に会話し、未来のこと、あるいは過去のことについて真実をいろいろと理解ができると。そしてそれだけではなくて、宇宙の法則というものを理解できると。これはヨーガの経典では、「三つのヴェーダについて完全に精通できる」と説かれています。そしてそのほかに、このチャクラが開発されますと、アストラル世界の音楽を聞くことができるようになり、名作曲家への道が約束されると言うことができるでしょう。

そして六番目のチャクラである、アージュニャー・チャクラが開発されますと、「第三の眼」を有することができるようになります。この「第三の眼」とは、対象を透視する力が身に付きます。これは段階的な神通という点から考えると、最後から二番目に属するわけですから、もう既にこのチャクラが開発されると、神々の要素が強くなった人間であると言うことができるでしょう。

ここで一つ気を付けておかなければならないことは、ここで開発される天眼、つまり「第三の眼」というものは、その人の心のステージによって段階があるんだということを身に付ける必要があります。まず粗雑な意識のある人は、粗雑なものを透視するようになると。そして微細な意識の人は、微細なもの、例えばその人の心の働き等を眼で見ることができるようになるだろう。そしてより微細な意識の人は、その対象となっている人の本質、つまり、まあ輪廻転生等も含めてそうですが、それを視覚的にとらえることができるようになります。

そして最後は、これは一般的にチャクラとは呼ばれませんが、「サハスラーラ」と呼ばれる七つ目のチャクラがあります。この七つ目のチャクラは、わたしたちをこの肉体から解放するためのセンターであると理解していただいたらよろしいでしょう。

◉チャクラとその医学的位置

(V) 先程、「チャクラは目に見えない」という話がありましたが、それについて一言付け加えさせていただきます。

確かに、肉体を解剖してもチャクラを確認することはできません。しかし、チャクラが存在するといわれている場所には、神経叢や、微量でも人体に大きな影響のある「ホルモン」を分泌する内分泌腺が存在しています。

例えば、おなかのマニプーラ・チャクラの部分には太陽神経叢が存在しています。また、喉のヴィシュッダ・チャクラには甲状腺ホルモンを分泌する甲状腺が存在しています。性器のスヴァディスターナ・チャクラには男性の場合には精巣、女性には卵巣が存在していて、性ホルモンを分泌しています。このように神経叢やホルモンを分泌する内分泌腺の位置がチャクラと一致しているというのは非常に興味深いことだと思います。

(A) 先程も述べたとおり、特にこの神経叢の働き、あるいはまあホルモンの働きというものは非常に重要であると。

ヒトの内分泌腺の位置と構造

内分泌腺		ホルモン名
副腎	髄質	アドレナリン ノルアドレナリン
	皮質	糖質コルチコイド 鉱質コルチコイド
精巣		テストステロン
卵巣	濾胞	エストロゲン エストラジオール
	黄体	プロゲストロン
胎盤		胎盤ホルモン
胃粘膜		ガストリン
十二指腸粘膜		エンテロガストロン セクレチン

内分泌腺		ホルモン名
脳下垂体	前葉	成長ホルモン 甲状腺刺激ホルモン 副腎皮質刺激ホルモン 生殖線刺激ホルモン 乳腺刺激ホルモン
	中葉	メラニン細胞刺激ホルモン
	後葉	オキシトシン バソプレシン
甲状腺		チロキシン
副甲状腺		パラトルモン
膵臓 (ランゲルハンス島)		グリカゴン インシュリン

で、例えば現代科学が進んで何を行なったかというと、このいかに神経叢を活発に働かせるか、あるいはホルモンの分泌を促進させるか、あるいはその分泌されているホルモンを飲むことによって体を変えるかということがポイントとなっているよね。

例えば例を挙げるならば、百メートル走において、もしこのテストステロン、つまり男性ホルモンや、あるいは成長ホルモン等を注射したりあるいは飲むことによって、その筋肉は増大し、スピードを緒められる。で、これからもわかるとおり「ホルモン」というものは大変わたしたちにとって、わたしたちを人間から人間以上のものへと変えてくれる働きがあることは間違いない。そしてそれを内的瞑想によって活性化すること、これが、クンダリニー・ヨーガの瞑想であるということは言えると思います。

(司会) ありがとうございました。

◉温度変化からチャクラを解明する！

(司会) それではそろそろ、チャクラの実験について説明をお願いします。

(T) はい。今回は、チャクラの存在を温度変化によってとらえようと試みました。

(司会) 温度ですか？

(T) はい。「白金測温抵抗体」を眉間、そして眉間の中央から三㎝離した部分に張ります。この眉間というのは、アージュニアー・チャクラが存在するといわれているのです。そして、通常の状態と、この部分に精神を集中した状態、この二つの状態の温度変化を測定しました。

(S) ちょっと一言付け加えさせてください。修行がある程度進んでいる者は、精神集中によって霊的エネルギーを動かすことができます。チャクラは霊的エネルギーの中心ですから、精神を集中し、エネルギーを集中することによって、何らかの変化が見られると思われるわけです。もちろんこれは、チャクラが開発されている場合です。そして、今回はこれを、温度変化という形でとらえようと試みました。

(司会) 今回の実験で、眉間のアージュニアー・チャクラを使ったのには、特別に何か意味があるのでしょうか。

(V) つまり、眉間の部分には筋肉が少ないので、そのため、測定の際、筋肉の発熱の影響を少なくすることができるということがあるわけです。そのため今回は眉間のアージュニアー・チャクラを使いました。

(A) つまり今のV師の見解は、要するに筋肉による発熱が生じる可能性があることを防ぐために、アージュニアー・チャクラを実験として使ったということだね。

(V) はい、そうです。

(T) ちょっといいですか。

実験装置について付け加えますと、まず温度計は〇・一度の精度を持っています。そして、被験者には、温度計が安定してから精神集中をしてもらいました。

(司会) それは、実験を正確にするためにですね。

(T) そうです。

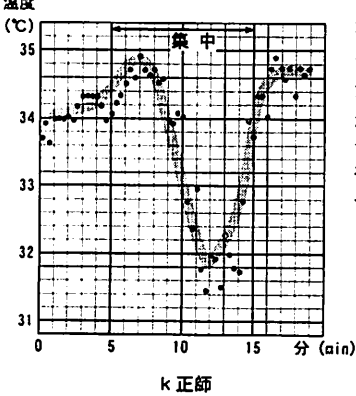
◉チャクラの部位で温度低下

(司会) それでは、実験結果をよろしくお願いします。

(S) まず、クンダリニー・ヨーガの成就者から見ていきましょう。

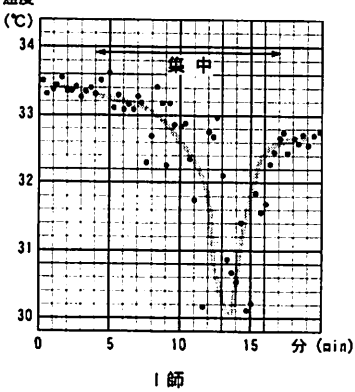
これはk正師の温度変化のグラフです。まず、最初の五分間は特に集中はしていません。そして次の十分間は眉間のアージュニアー・チャクラに精神集中しています。そして、最後の五分間は、再び集中しないという条件で、チャクラの温度を測定しました。

精神の集中によって、アージュニアー・チャクラの部位に顕著な温度の低下が見られます。



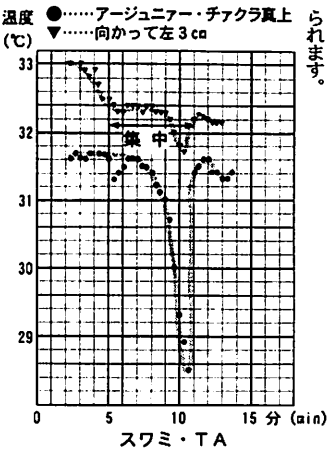
k正師

同じくクンダリニー・ヨーガの成就者であるI師の場合です。集中により三度低下しました。

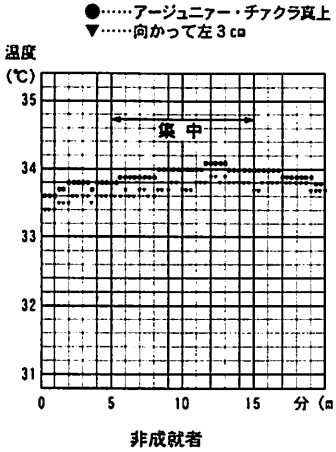


I師

次にラージャ・ヨーガの成就者であるスワミ・ＴＡさんの場合です。グラフをご覧ください。精神の集中によって眉間の真上と特に左三㎝の部分に顕著な温度変化の差が見られます。



次に非成就者の場合です。グラフをご覧ください。若干眉間の方が温度が高いですが、温度の変化に著しい差は見られません。



以上が典型的な四つのサンプルです。

最後に、被験者の内訳を申し上げますと、

クンダリニー・ヨーガの成就者十名、

ラージャ・ヨーガの成就者七名、

非成就者六名、でした。

全体的な結論を申し上げますと、クンダリニー・ヨーガの成就者の場合、ｋ正師の場合に見られるように、温度の変化が見られました。そして一部の者を除くと、ステージの高い者ほど眉間に集中した場合、温度変化が見られました。

(司会)この結論については、どのように考えたらよろしいでしょうか、尊師。

◉精神集中時の温度変化の意味

(Ａ)真理の実践にはいくつかの方法があるわけだが、まあｋ正師の例にあるようなパターンは、もともとテーラヴァーダの実践、つまり上座部的な修行を行なっている場合に起きる典型的な例だと思います。これは、もともと煩悩を滅尽することに主眼を置いた修行を行なっているわけですから、当然精神集中そのものがその部分の温度低下をなすと。温度低下をなすことによって煩悩を弱めるという、あるいは煩悩を止めてしまうというような働きがこのデータとしてうかがわれると見ていいでしょう。

しかし、逆にタントラヤーナ、あるいはヴァジラヤーナ(＊注3)の瞑想を行なう場合、この肉体そのものを徐々に地元素から水元素、水元素から火元素という形の、要するに分解、肉体を完全に分解するプロセスの瞑想をとります。これは中国のタオイズムなんかもそのパターンに属すると。

この場合にはどんどんどんどん温度を上昇させていって肉体を完全に分解することに主眼が置かれますから、この場合は精神集中した場合、眉間に逆に熱が発生すると見ていいと思います。

だから例えば、煩悩を受けてその煩悩に対して全く影響を受けない心の状態の修行を行なっている成就者は温度が低下し、逆に受けた煩悩を焼き尽くす修行を行なう場合には温度が上昇すると見ていいでしょう。

14. チャクラの科学的検証　ＰＡＲＴⅢ

[説法]意識の上昇と六神通

ロシアの皆さん、こんばんは。麻原彰晃です。

わたしたちが人間を超え、神に至ろうとするとき、当然特別な訓練を必要とします。そして、その特別な訓練を「修行」と呼んでいます。この修行において肉体的にどのような変化が生じるかというと、まず体内に熱が発生します。

もちろんわたしたちは、日々の生活を行なっているとき、平均体温、大体三六度から三七度ぐらいの熱を絶えず発生し続けているわけですが、この、神々に至るための特別な修行に入ると、その熱がより一層上昇し、そして場合によっては四三度、四五度といった、考えられないような高熱を発するようになるわけです。

この熱の発生は何を意味しているかというと、わたしたちのナーディー、つまり、わたしたちの意識が行き来する道筋をこの熱のエネルギーによって浄化するわけです。そして、その熱のエネルギーの上昇は、次に意識を上方へと至らせます。

通常わたしたちの意識は、ムーラダーラ・チャクラに存

＊注3　タントラヤーナ、ヴァジラヤーナ：別巻の注釈参照のこと。

在するといわれています。このムーラダーラ・チャクラの特徴というものは、邪悪な心、つまり他の生命体に対して害を与えるという心の働きの本質のチャクラであるところの、このムーラダーラ・チャクラにわたしたちの意識は存在しているわけですが、この熱の上昇とともに、その意識は徐々に上方へと向かいます。そしてこの上方へと向かう意識のフロア、つまり各階のストップ役を果たすもの、それがチャクラなのです。

各階のストップ役とはどういうことかというと、例えばこの意識がちょうどエレベーターのように上昇するわけですが、どこにでも自由に停止することができるというわけではないのです。つまり、必ずフロアが存在し、そしてそのフロアに意識は一時的に固定されます。もちろん、修行を途中で放棄した場合、その一時的なはずのフロアが、その意識の固定先であるところのフロアの状態に一生身を置くことになることもあり得るのです。

ところが、わたしたちがその意識の引っ掛かり、つまりフロアに対して頓着せず、修行をどんどん続けていくと、最終的にはサハスラーラと呼ばれる、この頭頂にあるエネルギーの門からエネルギーが撤退します。それと同時に、わたしたちの意識も撤退します。そして、それによって、わたしたちは人間以上の存在へと至ることができるのです。

したがって、一般的にチャクラ・ヨーガの学派の人たちは「チャクラを開発することイコール素晴らしいことだ」と言いますが、それはあくまでも途中の段階であり、最終的な段階ではないのだということを認識すべきです。

では、このチャクラの機能というものは一体どのようなものでしょうか。それはちょうどわたしたちが目で見、耳で聞き、鼻で嗅ぐといったような五感を使うのと同じような、ごく当たり前の能力としてこのチャクラが開発されると、いろいろな神秘的な力を得ることができるようになるのです。

その代表的なものは、「六つの神通力」と呼ばれるものがあります。これは、神々の声を聞く力、他人の心を視覚的に見、あるいは感じ取る力、自分の前生だけではなく、他人の前生をも知る力。

ここで一つお断りしておかなければならないことは、前生を全く信じない人にとっては、この宿命通というものは全く無価値なものに思われるかもしれません。しかし、わたしたちを構成しているすべての要素は、わたしたちがコツコツコツと積み上げてきた言葉、心の働き、そして行動の三つの要素の集積にすぎないのだということを理解するならば、当然過去世の存在というものは、あって当たり前であると考えるようになるはずです。そしてそれと同時に、この理由ゆえに個体差があっても当然であると考えるようになるはずです。

そして次にわたしたちは、今積んでいる身の行ない・心の働き・言葉の働きによって来世どのような世界へ至るのかという神通力を身に付けるようになります。そして、すべての原因とすべての結果を知る力を得ます。そして最後に、ディーピングと呼ばれる、この肉体を軽くしたり、重たくしたりする力を得るようになるのです。そしてこれらの力はすべて、チャクラにその秘密が隠されてると考えてよろしいでしょう。

さあ皆さんは、この今日のわたしの話を信じて、人間からもう一歩脱皮し、そして神々に近付く道を歩きますか？それとも、「わたしは人間のままでいいのだ」と言って、普通の生活を行ない、死というものを境に全く闇の世界へと落ちますか？それは、皆さんが叡智を持って現象を見るかどうかによって決まりますね。

［対談］

◉温度変化による実験結果

(司会)まず、前回の実験のまとめから入りたいと思います。

(T)温度の変化によってチャクラの存在を検証しようとしました。

白金測温抵抗体と呼ばれるセンサーを被験者の眉間の中央、そして中央から三㎝離した部分に張り付けました。眉間というのは、アージュニァー・チャクラが存在しているといわれている部分です。そして被験者に、通常の状態と、この部分に精神集中してもらった状態、以上二つの状態について温度の測定を行ないました。

具体的には、まず、

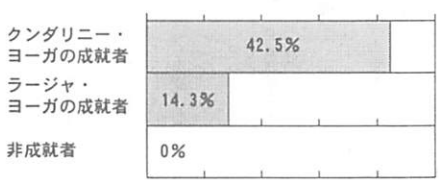
1、最初の五分間は集中しない。

2、次の十分間は眉間に精神を集中する。そして、

3、最後の五分間は、集中をしない、という条件でチャクラの温度を測定しました。

(S)まず全体的な結論を申し上げますと、グラフに表われているように、眉間に精神集中したとき、ステージの高い者ほど大きく温度変化が表われています。

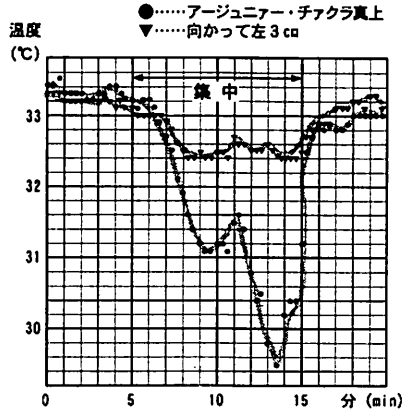
これが温度が低下した例



精神集中によって3度以上低下した人の割合

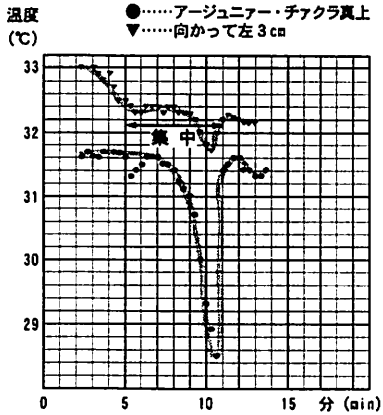
です。また、アージュニァー・チァクラが存在しているといわれている位置と別の位置で、温度変化を比較したのですが、まずはグラフをご覧ください。

これは、クンダリニー・ヨーガの成就者（ＶＡ師）の場合です。この場合、眉間の中央は三・五度下がっているのに対し、左三cmのところでは、〇・五度しか下がっていません。



ＶＡ師

これは、ラージャ・ヨーガの成就者（スワミ・ＴＡ）の場合です。この場合も、眉間の中央は三度下がっているにもかかわらず、左三cmのところはほとんど温度変化が見られません。

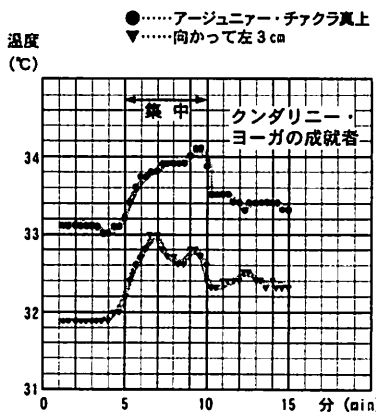


スワミ・ＴＡ

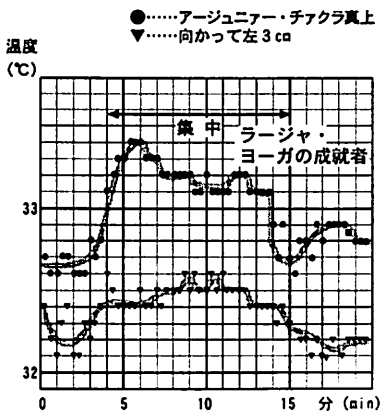
このように、眉間の中央が、眉間の周辺部より温度変化が大きいという結果が得られました。

ただ、その一方で、温度上昇を示した例も見られましたので、ご紹介しておきましょう。データとしては、被験者二十三人のうち六人が温度上昇を示しました。

これは、クンダリニー・ヨーガの成就者のグラフですが、ご覧のように、中央のアージュニァー・チァクラが存在するといわれている箇所では、一〇度の温度上昇が見られました。



これは、ラージャ・ヨーガの成就者のグラフですが、ここでも〇・七度の温度上昇が見られます。



◉温度低下型と温度上昇型

(司会)なるほど。ところで尊師、先週の番組で尊師は、「その人の温度上昇、あるいは温度低下は、その人が行なっている修行法、あるいは瞑想に関している」というお話でしたよね。例えば、具体的には温度低下型の人はテーラヴァーダ型の修行を実践されていると、それから温度上昇型の人はタントラ(＊注4)の修行をされているということでしたよね。その「テーラヴァーダ」それから「タントラ」といったような言葉の意味も含めて、もう少しわかりやすく説明していただけますか。

(A)まず「テーラヴァーダ」とは「上座部」と訳されます。この上座部とは何かというと、要するに、原則的な徳あるいは善の体系を実践し、そしてそれを根本として、煩悩を滅尽することによって歩いている実践者である、と言うことができます。

一番わかりやすい例から言うならば、ある人が恋をしたとしましょう。当然恋をすればその人の心は燃えます。これは当然、体温の上昇にもつながるわけです。そしてその、燃える要素を完全に止めてしまう修行を行なう体系がテーラヴァーダであると言うことができます。つまり、熱を発生させないと。それは心においても熱を発生させないし、肉体においても熱を発生させないと。それによって煩悩を生起させない修行、これがテーラヴァーダの修行です。

次に例えば同じように恋をしたと。その恋をできるだけ強く恋をすると。それによって強い熱が発生します。その発生した熱を特殊な呼吸法やあるいは特殊な瞑想法によって上昇させることにします。するとその上昇した熱によって、上部の肉体をまあ取り囲んでいる七万二千本の霊的な管があるわけですが、その上部を浄化すると。浄化することによって意識の移動が速やかとなり、そして最終的にはその管の一番上もその熱によって浄化してしまうと。——もちろん、この熱の発生と管との関係においては、当然、圧力の働き等々の働きがありますが、ここではそこまでは言及しないことにしましょう。そしてその方法を、「タントラヤーナ」と言います。「タントラ」とは、秘密のマントラ修行、つまり秘密の神々の言葉を唱えることによって、それを達成する修行であると言うことができるでしょう。

◉自律訓練による温度上昇との違い

(司会)ところで、自律訓練をすることで自己の体温を変化させることができる人がいるんですけれども、今回の実験は、そのようなものと関わりが少しはあるんでしょうか。

(V)それは全くないでしょう。自律訓練法というのはヨーガの一部でしかすぎません。自律訓練法で、確かに、体温の変化をさせたという例はあります。この場合、血流が増えることによって体温が上昇し、血流が減ることによって体温は下降します。

ここで結論を言ってしまえば、チャクラの温度上昇と自律訓練法の温度上昇に関して決定的な違いは、チャクラが開発されて温度変化が生じた場合、様々な神秘的な体験が生じるということです。

(A)それについて、わたしも少し付け加えさせていただきたいと思います。わたしの弟子の中で自律訓練ができる人がいました。で、その人は、修行に入り、なかなか神秘的な体験をしなかったと。そして特別な修行を二年間達成して、初めて神秘的な体験をするようになりました。で、そのときの精神集中というものは、潜在意識に入るような精神集中、つまり自律訓練の精神集中は潜在意識に入る精神集中であると。ところが、成就者の精神集中は、潜在意識に入った状態での集中である、という違いがあるんではないかとわたしは思います。

◉チャクラに対する精神集中と神秘体験

(司会)なるほど。ところで実験の最中に、何かチャクラに精神集中することで、特別な神秘的な体験をしたとかいったような例はあったんでしょうか？

(T)はい。眉間の温度が低下している際に、光を見たという体験が何例かありました。それから、同じように温度が変化しているときに、空中浮揚の前段階であるダルドリー・シッディが起こりかかった例もありました。

(司会)なるほど、そうですか。

ところで尊師、この体験にはどのような意味があるのでしょうか。

(A)まず、このアージュニャー・チャクラの部分には「第三の眼」が存在しています。この第三の眼というのは、この世の中だけではなく異次元の空間、あるいは高い次元の空間を見る力が宿っているといわれています。

それからもう一つは、このポイントを支配しているエネルギー、これはウダーナ気と呼ばれるわけですが、このウダーナ気はわたしたちの身体を軽くする働きがあります。したがって精神集中によって光を見たり、あるいは体が軽くなる前兆が起きるということは、当然だと思われます。

ところで、これらの神秘的な体験というのは、あくまでも序の口というか、入り口にすぎないと。例えばわたしたちが小さいときにまず二本の箸を持ち、まあロシアの方はフォークとナイフかもしれないが、それを自在に使うようになるためには、しっかりとそのフォークの先、あるいは

＊注4　「◉温度低下型と温度上昇型」に出てくる「タントラ」「タントラヤーナ」については、別巻の注釈参照のこと。

箸先を見ながらコントロールする訓練を何度も何度も行ないます。

これと同じように、初めはアージュニァー・チァクラに集中したり、あるいはヴィシュッダ・チァクラに集中したり、あるいはアナハタ・チァクラに集中したり、いろいろ、チァクラに集中しながらそのチァクラの働きをコントロールしたり、あるいはそのチァクラの経験をわたしたちはします。しかし、それがどんどん発達してくると、ちょうど無意識にナイフやフォークを使ったり、あるいは箸を使ったりするのと同じように、わたしたちはこれらのチァクラの働きを自在に使いこなすことができるようになります。

例えば、マハームドラーの成就をなした者というのは、大体相手の心を自在に読み取ります。これは、マハームドラーの本質が心のヨーガである、つまりアナハタ・チァクラと大変深い関係のあるヨーガであることからきています。

例えば、わたしにもたくさんの例がありますが、インドのヒマラヤの一部にわたしの前生のグルがいたわけですが、そのグルが亡くなるときに、わたしは日本でそのグルが亡くなることを、グルとの対話、そして神々との対話によって知りました。当然これは、そのとき使われたのはヴィシュッダ・チァクラが使われたわけです。

あるいは、ヒマラヤにいるときに、日本の状況を見ることができたわけですが、これは第三の眼、アージュニァー・チァクラによって見ることができたわけです。

そしてこれらの現象は、わたしの弟子たちにおいては瞬間瞬間ではありますが、たくさんの実体験があります。そしてその実体験にとらわれず、修行を続けることによってより一層大きなダイナミックな体験をするようになるのです。そして最終的には、それらすべての経験をし尽くしたのち、プラーナはサハスラーラ・チァクラから撤退するのです。

◉他の要素による証明

(司会)なるほど。ところで、今回の実験で人体に存在する霊的センター、「チァクラ」の存在が、おぼろげながら証明されたような形になってきましたけれども、ところでS師、オウム真理教ではそのほかにも様々な実験をやっているというふうに聞いてるんですけれども。

(S)はい、温度のほかにも、チァクラの別の要素に着目して、実験を進めています。

(司会)といいますと。

(S)例えば、チァクラの部分の発する電場を測定することによって、その存在を検証しようと考えています。

(司会)それは興味深いですね。その実験についてお伺いしたいところなんですけれども、時間が来たようです。それでは、番組の締めくくりとして、尊師の方から何か一言コメントをいただけるでしょうか。

◉オウム真理教の存在意義

(A)精神的な世界、これは確かに存在すると多くの聖者方が今まで言ってこられました。しかし、その精神的な世界の存在は、ある意味での偏った科学かぶれをした人たちにとって、否定されてきたというのが実態です。したがって逆に、彼らの使用している武器である科学、これをもって反証する以外に、つまり、その世界は存在するんだと証明する以外に、この地球人類の、正しくない方向へ進んでいる科学文明を修正することは不可能なように思われます。そしてその一助として、わたし、それからわたしの弟子たちが役に立つならば、それはオウム真理教の存在が大きな意味を持つこととなるでしょう。

さあ皆さん、あなた方もわたしと一緒に、この未知の世界を探究しようではありませんか。

15. チァクラの科学的検証　PART Ⅳ

「説法」電場とチァクラ、磁場と文明

ロシアの皆さん、こんばんは。麻原彰晃です。

今回は、前回のチァクラについての考え方をもう一歩進め、電場とチァクラとの関係について検討してみましょう。

もともと、わたしたちがこの人間として生を受け、そして、いろいろなカルマの働きによって、原因・条件・結果というものを繰り返し繰り返し経験しているわけですが、わたしたちがチァクラを開発することにより、その原因・条件・結果の中の、原因が同じだとしても条件とそして結果とが当然変わることになります。

ある雑誌社の人の前で、チァクラの働きについて実験をしたことがあります。この実験は、そのチァクラから発生する電場の働きがどのようなものであるかということを、オシロスコープによって観察するものでした。当然、結果は通常の人の電場の状態と、そしてわたしの電場の状態とでは大きな違いが生じました。この違いは、要するに複雑な、そして微細な多くの波が検出されたということです。

ここで一つ皆さんにお断りしておかなければならないことは、この電場というものは、その発生した電場と反対側の極の電場を引き付けるという働きがあるということです。これはよく、超能力を有する者に物質を集める能力が存在するようになるわけですが、これらの働き、あるいは物質だけではなく、他の人たちの違った要素の心の人を引き付ける働きが、ここら辺に原因として隠されているのではな

いかとわたしは考えています。

しかし、これらについてはまだまだ研究をする必要は存在します。しかし、これは単なる電場に対する影響だけではなく、当然磁場に対しても大きな影響を与えることとなります。

わたしの研究では、「文明の発達するエリアは、必ず非双極子磁場（＊＊1）がプラスへと傾く」――これは、今から数百年前からの非双極子磁場の働きを世界の文明と合わせ検討した結果、このような現象がわかりました。しかし、過去の現象がいくら的中したとしても、未来の現象が的中するかどうかはわかりません。本当にその理論が正しければ、次の偉大な文明が成立するエリアは日本であるということになります。というのは、この非双極子磁場のピークは、これから約四十数年後にその中心が日本へと移るからです。……まあともかく、これらの電場や磁場、これらの実際の内容がもっとよりわかるようになることにより、逆にわたしたちの生命活動の本質、あるいは精神活動の本質というものがより一層わかるのではないかとわたしは考えているのです。そして、それらを追究すること、これこそが二十一世紀のわたしたちに課せられた使命ではないでしょうか。

＊＊1　非双極子磁場

地磁気の分布は、地球の北極に磁石のS極、南極にN極を置いたときの磁場の分布で近似できる。この磁場を「双極子磁場」という。しかし、実際の地球上の各地点における地磁気は、様々な要因により、双極子磁場と異なる値を持つ。この実際の地磁気と双極子磁場のズレ、すなわち、地磁気から双極子磁場を引いた場を、地球の両極に置かれたN極、S極の双極子に基因しない磁場の成分という意味で「非双極子磁場」という。

【対談】

◎チャクラの開発によって得ることのできる素晴らしい能力

（司会）今回も引き続き物理的実験によりチャクラの存在を検証していこうと思います。その前に、このチャクラについてもう一度説明していただけるでしょうか。

（A）前回と同じ説明をここで繰り返すとするならば、これを連続で見ている人にとって失礼にあたりますので、別の角度からチャクラについて説明をしたいと思います。もちろん一部は重複します。

まずわたしたちの尾てい骨に宿るムーラダーラ・チャクラ。このムーラダーラ・チャクラはわたしたちの体温を上昇させる源です。そしてこれによって超健康体が得られます。

次に性器よりやや上方にあるスヴァディスターナ・チャクラ。このスヴァディスターナ・チャクラが開発されますと、もともと性的快楽に使われていたエネルギーが体全体に回り、そしてそれによってわたしたちの生命活動が活発になることにより、短眼およびものすごいバイタリティーを有するようになります。

そして第三番目のこのマニプーラ・チャクラが開発されますと、わたしたちは「バルド」と呼ばれるこの人間と別の次元の空間へ別の身体によって移動し、そこでいろいろな経験を行なうことができるようになります。

第四番目のこのアナハタ・チャクラが開発されますと、その別の身体がより高い次元へと移行し、そしてそこでわたしたちは自在に欲望を満足させることができるようになります。

そして第五番目のこのヴィシュッダ・チャクラが開発されますと、わたしたちのこの身体や、あるいは環境を構成しているカルマのコントロールができるようになり、それにより自在に自分自身の状態を変化させることができるようになります。当然このときには瞑想中でなければなりません。

そして、このアージュニァー・チャクラが開発されますと、いかなる光の空間へも移動できるようになります。

そして最終的にこのサハスラーラ・チャクラが開発されますと、わたしたちはこの肉体から離脱し、解脱することができるようになるのです。

もちろんこのほかに、今までも説明したとおりの六つの神通力やあるいは他のチャクラの要素というものが具わることは間違いありません。

（司会）ありがとうございました。

◎電気的変化による検証

（司会）それではさっそく今回の実験に話題を移したいと思いますが、今回はどのような実験を行なったのでしょうか。

（S）前回は、アージュニァー・チャクラの存在するといわれる部分に精神集中し、その温度変化を測定することでその存在をとらえようと試みました。その結果、チャクラの存在が科学的に証明されたわけですが、今回は、それよりもある意味で微細な変化、つまり、電気的変化をとらえることで、その存在を検証しようと考えています。

（V）それについてちょっと補足いたしましょう。修行の進んでいる修行者は、チャクラに集中することで、そのチャクラの部位がしびれる感覚を覚えることがあります。この感覚は、当然神経を介したものですから、そこで何らかの電気的な現象が起こっていると考えられます。ですから、チャクラの存在を電気的な変化によってとらえるという試みは、面白いし、また納得のいく実験方法だと思います。

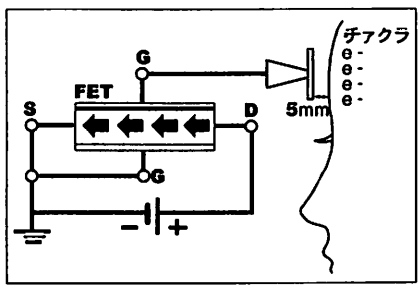
(A)皆さんもご存じのとおり、わたしたちの体に存在している神経系、そしてこれと大きな関係があるホルモンの系統、この二つはわたしたちの瞑想が完成するために不可欠な要素であると思われます。というのは、ある弟子が修行を始めたのちどのような経過をたどるかを観察した場合、必ず煩悩が弱まり、肉体のエネルギーが上昇を始めると、先程V師が言ったとおり体がしびれます。で、この体のしびれは必ず下部からしびれ、最終的には頭全体がしびれるようになります。そしてそこで固定が起き、次に別の身体が抜け出すわけです。ところでこの〝しびれる〟という現象の最後の段階で、このサハスラーラ・チャクラの部位から「甘露」と呼ばれる液体が体の中に滴り落ちるようになります。この甘露は、現代の生理学でエンドルフィン(＊＊2)と呼ばれているものがあるわけですが、おそらくこの物質と同じものではないかと思われます。これにより、わたしたちの体は静まり、そして完全に固定されるのです。このエンドルフィンはいつ出るかというと、わたしたちの死のときに再製され、そしてそれによってわたしたちは安楽な死ができるという学説がありますが、まさにその死を体験することを目的とするヨーガの瞑想修行にとって、このプロセスは不可欠となることでしょう。

(司会)ありがとうございました。それでは、実際の実験について説明していただけるでしょうか。

＊＊2エンドルフィン
モルヒネ類似の作用を持つペプタイドで、体内で合成される。脳から発見されたが、現在では全身に分布していることが判明している。α、β、γ、δの4種類があり、その作用は鎮痛、情動、体温、ホルモンの分泌など多岐にわたる。中でもβエンドルフィンの鎮痛作用は、特に強力である。

(S)はい。電気的なものといった場合、電気的な変化と、そして、磁気的な変化の二つが考えられます。今回は、電気的なものに着目して実験を行ないました。

測定装置としては、FET、つまり、電界効果トランジスタという素子があるのですが、これを用いてアージュニアー・チャクラに電気的な変化が生じるか、ということを調べました。この測定装置の原理については、次の図をご覧ください。



今回使用したFETは、ドレインDとソースS間に電圧をかけただけでは電流は流れません。ところが、チャクラに生じた電荷により電場が生じ、プローブの金属版に電荷が誘起されると、ゲートGに電圧が加わり、電荷に応じた電流が流れるようになります。その電流値を測定することにより、生じた電場、電荷の量がわかります。

(T)つまり、この装置では、電荷の変化がわかるわけですね。

(S)測定方法は、まず、アージュニアー・チャクラの位置の真上五cmのところに、電場を感知するセンサーをセットします。そして、三分間リラックスの状態、次に五分間アージュニアー・チャクラの位置に集中した状態、そして最後の三分間はリラックスした状態で、被験者のアージュニアー・チャクラの部分の電場を測定しました。

(司会)ちょっと気になるんですが、前回の実験でチャクラに集中することにより、眉間に温度変化が生じたのが明らかになったわけですよね。

(S)はい。

(司会)今回の実験で、この温度変化がセンサーの精度に影響を与えているというようなことはないんでしょうか？

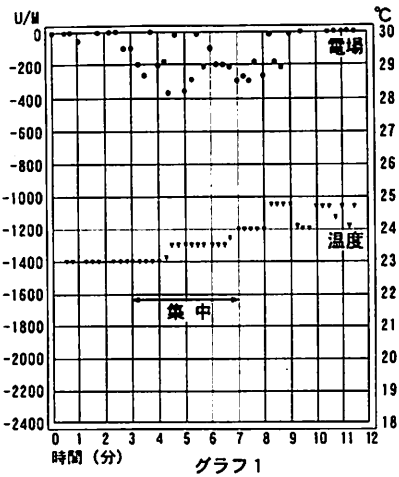
(S)センサーが温度変化によって誤った反応をするということですね。それについては大丈夫です。というのは、今回は、電場と同時にセンサーの部分の温度変化も同時に測定します。ということは、そのとらえられた変化が温度変化によるものかどうか、これはセンサーの部分の温度変化を見ることによって、判別できます。

(司会)なるほど、じゃあ、万全の姿勢で実験に臨まれたわけですね。ところで、結果の方はどうだったんでしょうか。

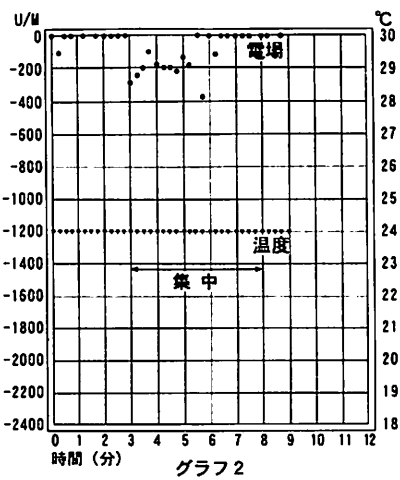
(S)ではグラフをご覧ください。

グラフ1はクンダリニー・ヨーガの成就者を被験者にしたものです。ここで縦の法線方向の電場の向きを正としています。ご覧のように、アージュニアー・チャクラに集中しているときに、負の電荷を起因とすると考えられる電場が生じています。測定中、センサーの温度は一様に上昇している一方で、電場は集中しているときのみ生じているので、この電場の変化が温度変化によるものでないことがわかります。

グラフ2はラージャ・ヨーガの成就者を被験者としたものです。やはり集中しているときに電場が生じています。このとき、センサーの温度変化はありません。このように、集中によってアージュニアー・チャクラの部分に負の電荷が生じたことがわかります。



グラフ1



グラフ2

（V）なるほど。精神状態と電気的な状態は、密接なつながりがあるんですね。

（S）そうですね。

（A）ヨーガの修行によっては物質元素を変えることができるようになる。まあこれは、錬金術的な働きなわけだけども、その前段階の証明としては、今回の実験は大変有意義ではないかと思います。最終的には例えば、水銀を金に変えるとか、そういう神秘的な力が存在するといわれています。これらはもう少し修行が進んでくると、単なる電荷を変えるだけではなく、実際の例えば電子を飛ばしたり、あるいは中性子・陽子の個数を変化させることによって、このような現象が起きるんだと言うことができるでしょう。そして、もしそこまでわたしたちが証明できるとするならば、唯心的物理学というものの確定につながるのではないかと思っています。

◉測定技術の限界点

（司会）ところで、前回の温度変化の実験、そして今回の電場の実験でですね、チァクラの存在が検証されたのではないかと思いますけれども、磁気的なものでも、チァクラの存在を検証できるんではないかと思うんですが、その辺についていかがなんでしょうか。

（S）磁気についての実験も、やっていこうと考えています。

（V）それは面白そうですね。

ところで、こんな話があるんですよ。実は、これは科学的な実験を行なって検証したわけではないんですが、わたしのアージュニァー・チァクラから出ている光を、二人のクンダリニー・ヨーガの成就者が透視したんです。そのときに、見え方が一致していたと言うんですね。

（A）異次元の世界についての証明は、確かに機械的な証明も必要だけども、まあ今V師の言ったとおり、多くの人たちがそのような能力を開発し、そして実際に視覚的に見ることによって、それを検証する方法もあるんではないかと思います。というのは、例えば、測定技術というものは、その測定機の微細さ以上の微細なものを測定することはできないという欠点があるからです。これについてはT君、どう思うか。

（T）そうですね。やはり、現代の測定機では、ある程度以上に微細なものは計測できないと思われますね。

（V）要するにチァクラの世界は、神秘的な現象の一面を測定しているにすぎないということですね。

（A）しかし、その測定限界内で、いろいろな角度で検査をすること、あるいは科学的に検証することは、不可欠だと思います。したがって先程、S師が言ったとおり、次は磁場による実験を行なうというのは、これはまた素晴らしいことじゃないだろうか。

（司会）それは楽しみですね。

◉精神文明を発達させる実験

（A）そしてこのように今、自分たちの行なっている実験は何を目的としているのか、そしてその目的以上の結果が出なくとも、目的の結果が出れば十分であると考え実験すること、これは、これからの精神文明を発達させる上においては、大変重要なことだと思います。

16. チァクラの科学的検証　PARTV

［説法］文明をつくり出す二つの要素

こんばんは、麻原彰晃です。

人間が文明をつくり出すとき、そのつくり出し方には二つの要素があると考えることができます。その一つの要素は、まさに現代文明の、つまり「バベルの塔」方式、そしてもう一つは、神々からの啓示を受けてでき上がる文明の二つです。

この前者は、いろいろな経験を土台とし、その経験に対して解析的な検討を加え、そして一つ一つを昇華していく。そしてその昇華した段階で、また次の新たな課題へと挑戦する。これは、共産主義体制の根本的な理念である「弁証法的唯物論」の考え方と全く同じであると言うことができます。

逆に、天からの啓示を受けて、発達する文明があります。これはわたしたちの身体に内在している七つのチャクラ、つまりムーラダーラ・チャクラ、スヴァディスターナ・チャクラ、マニプーラ・チャクラ、アナハタ・チャクラ、ヴィシュッダ・チャクラ、アージュニャー・チャクラ、サハスラーラ・チャクラという七つのチャクラがあるわけですが、この七つのチャクラの下から順に、意識は、高い意識の経験と同時に、鋭い集中力と、そしてその世界でのいろいろなヴィジョン、つまり経験をなすことができます。そしてそれを土台として、それを具体的な現実の、例えば数学的な技法等を使い、発達する文明、これがまさに天からの啓示の文明と言うことができるでしょう。

そして、現代文明の中でも、例えばアインシュタインの相対性理論等については、この後者の文明に属することができます。しかし、わたしたちはわたしたちの文明が最高であり、限りないものであるというふうに考えます。この誤った見解、つまり錯見解によって、「バベルの塔」方式の文明は必ず崩壊するのです。ではなぜ、必ず「バベルの塔」方式の文明が崩壊するのかというと、当然下から積み上げていく場合、それに伴った意識、つまりそれを使いこなせるだけの精神的な素養がない限り、当然高度な影響を与え、それによって受けることになるからです。

つまり、例を挙げましょう。わたしたちが自転車で、ある物体に対してぶつかった場合と、それから自動車で、ある物体に対してぶつかった場合を検討しましょう。これは当然、スピードが出ていれば、自動車の方がより高いスピードが出るわけですから、強い破壊と同時に強いショックを経験することになります。

これがまさにカルマの理法なのです。つまり、わたしたちがなしたすべての行為というものの因、条件、そして結果と。この関係は、小さな現象にしろ、大きな現象にしろ、変わることはありません。変わることがないということは、わたしたちが小さな現象を、例えば小さな悪い現象を動かすとき、この小さな悪い現象はわたしたちに小さな悪い果報を与えます。しかし逆に、大きな悪い現象を動かすとき、大きな悪い果報をわたしたちは受けなければならないのです。

そして、この「バベルの塔」方式の科学文明の発達は、精神的な進化を伴っていませんから、当然原因が増大すればするほど、大きくなればなるほど、その果報である結果というものを大きく受けなければならないのです。

そして、いにしえの科学文明は、この後者に属しました。いにしえの科学文明は、まず霊的な進化、神々とのコンタクト、高い世界をヴィジョンで見ること、これからスタートします。そしてその、見たものをいかに具体化するかということに科学技術者と呼ばれる人は集中し、そしてそれによって文明を築き上げたのです。

しかし、その人類、つまり今の人類と違う人類は、徐々に徐々に堕落へと移行します。ではなぜ、堕落へと移行するのか。それは、あまりにも科学文明が与えてくれる「安楽」というものは、わたしたちが想像している以上に大きな喜びをわたしたちに与えてくれたからです。そして、その大きな喜びなるがゆえに、わたしたちは怠惰となり、そして精神的な向上を目指そうとしなくなりました。それによって、古代文明と呼ばれる、例えばアトランティス文明や、あるいはムー文明と呼ばれるもの、あるいはムー文明から移行したエジプト文明、これらはすべて滅んでしまったのです。

わたしたちは、ただ一つ生き残る道、ただ一つより幸福になる道を得る選択肢があります。それは何か。それはわたしたちがわたしたちの霊的な進化を遂げること、わたしたちの心の成熟を遂げることによってのみ、わたしたちは今の文明に打ち勝ち、より幸福な人間の人生というものを送ることができるのです。そしてあなた方がこのことに気付き、今日から、あくまでも現実的な生活は外的な喜びであって、それはちょうど道具のようなものであると認識し、それから脱却したとき、このロシアも素晴らしい、世界で最高の文明を有する国になるのではないでしょうか。

[対談]

◉欲界の最高地点――アージュニャー・チャクラ

(司会) 前回は、チャクラの存在を証明するための一つの手段として、アージュニャー・チャクラの部位を電気的に調べてみたわけなんですけれども、このアージュニャー・チャクラについて、前回とはまた別の角度から説明していただけるでしょうか。

(A) このアージュニャー・チャクラというのは、ムーラダーラ・チャクラからアージュニャー・チャクラ、サハスラー

ラ・チャクラに至る中心的なセンターがあるわけだが、そのセンターの前面の部分の終点、これがアージュニァー・チァクラです。で、このアージュニァー・チァクラが通るということは、一般にこの欲界の最高の地点へ到達するといわれています。

(司会) ありがとうございました。

◉ステージと電場の強さの関係

(司会)それでは前回の実験について、もう一度説明していただけるでしょうか。

(S) 実験方法についてご説明しましょう。

　実験装置としてはFET、電界効果トランジスタをセンサーとした、電場を測定する装置を作成しました。この装置のセンサーを被験者の眉間の上五㎜のところにセットし、初めの三分間はリラックスした状態、次の五分間は眉間に集中した状態、そして、最後の三分間は、再びリラックスした状態で電場の変化を測定しました。

(司会)それで、結果はどうだったんですか。

(T) クンダリニー・ヨーガの成就者とラージャ・ヨーガの成就者について言うならば、アージュニァー・チァクラが存在するといわれている眉間の部分に、電場が測定されました。

　そしてこの電場は負の電荷によるものであると考えられたわけです。これが前回の実験結果でした。

(司会) 質問があるのですが、よろしいでしょうか。

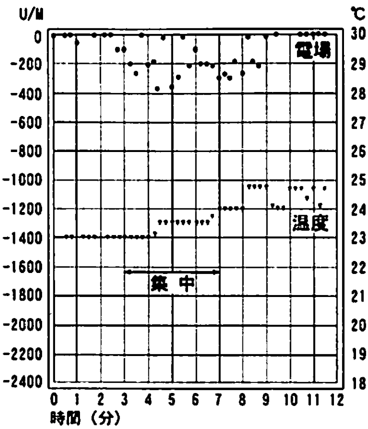
(MM) はい、どうぞ。

(司会)前回の番組では、成就者の場合は、電場が発生したのはわかったんですけれども、この現象は成就者のみに見られる現象なのでしょうか。一般の人の場合は、どうなんでしょうか。

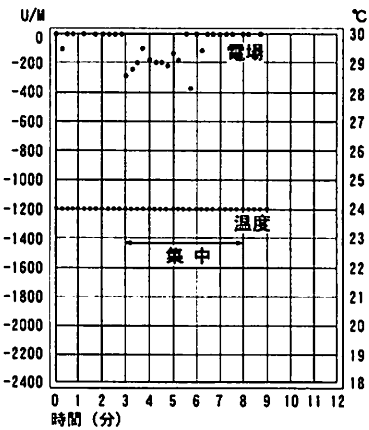
(MM) はい。それについては下の図をご覧ください。

　この図は、ステージと測定された電場の強さの関係を示したものです。確かに、非成就者についても電場は発生しているケースはありますが、この人たちすべてに共通して見られる特徴としては、彼らは全員、オウム真理教で数年間の修行歴があるということが挙げられます。

(T)オウム真理教で指導されているような正しい修行をある程度行なえば、アージュニァー・チァクラは開く、ある



クンダリニー・ヨーガの成就者



ラージャ・ヨーガの成就者

ステージと電場の強さ

🧘が被験者１人

ステージ ＼ 電場(V/m)	0	0～100	100～200	200～300	300～400	400～500	500～600	600～700	700～800
クンダリニー・ヨーガの成就者			🧘🧘		🧘				🧘🧘
ラージャ・ヨーガの成就者			🧘		🧘				
非成就者	🧘	🧘🧘🧘	🧘						

いは活性化します。ですからこれは、アージュニアー・チャクラが開いた修行者に特有の現象であると考えられます。

(司会)なるほど。

(A)これは、クンダリニー・ヨーガのプロセスを熟知するとよく理解できることだが、エネルギーが上昇し、そして次の段階では電気的なしびれというものがこの後ろから前にかけて生じます。そして、その生じたしびれの最終地点がアージュニアー・チャクラであると。で、この電気的しびれは明らかに電場を発生させることができるくらいの電気的なしびれをそれぞれの成就者が感じます。ですから、電場が発生したとしても何ら不思議はないでしょう。

◎〝チャクラが開く〟とは？

(MM)一つ質問があるんですが、「チャクラが開く」とよくいわれますけれども、その〝開く〟というのはどういう現象と考えればよろしいのでしょうか。

(A)これは透視をすればはっきりわかりますが、そこの部分に空洞ができます。で、空洞ができるとはどういうことかというと、内側の肉体的な空洞と外側の世界がつながるというふうに考えていいのではないだろうか。つまり、先程も述べたエネルギーのムーラダーラからの上昇によってアージュニアー・チャクラからの道筋がどんどんどんどん浄化されると。で、エネルギーの量がどんどん増大し、最終的にはアージュニアー・チャクラを突き破ると、そういう現象が起きるんだね。で、突き破ったら、透視をするとそこの部分がちょうど空洞のように見えると。しかしその空洞は、明らかにその空洞からしか行けない世界へとつながっている、ということだね。

(MM)つまりチャクラが開くことによって、内部のエネルギーを外界に作用させることができるということでしょうか。

(A)そうだね、そのとおりです。

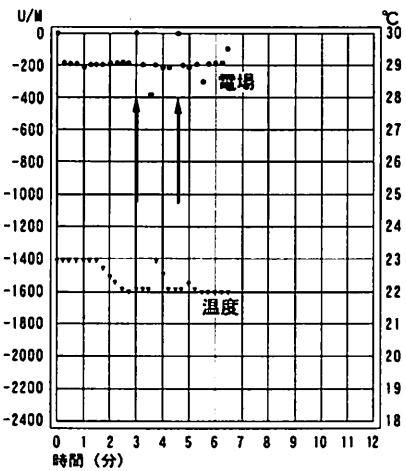
◎電場と電荷

(司会)それでは、次の話題に移りたいと思いますけれども、実験で発生した電場というのは、確かに電荷によるものと言えるのでしょうか。

(MM)そのことについて確かめるために、次のような実験を行ないました。その実験というのは、測定中に電場が観測されているときに、チャクラの部位をアースするというものです。このときもし電荷が存在しているならば、アースによって電荷が逃げ、電場が消えることとなります。

(司会)それで、その実験結果はどうなったのですか。

(S)結果については次の図をご覧ください。



この図の矢印のところでアースしたのですが、このとき電場は消えています。したがって、実際に電荷がチャクラの部位に存在すると言えます。

(司会)そうですか。面白いですね。ところでその電荷は一体どこから来たのでしょうか。被験者が眉間にしわを寄せたりすることなどによって、筋肉繊維間の摩擦を引き起こし、それによって静電気的な電荷を発生させたというような可能性はないのでしょうか。

(S)はい。被験者には単にその部分に集中してもらっているだけなので、その可能性はありません。しかし、この電荷がどこからのものなのかは、残念ながら実験では解明されていません。しかし、眉間に発生した電場の強さと被験者たちの霊的ステージの間には、正の相関関係があったという事実を考えると、この電場の発生は、まだ物理学的に解明されていない霊的エネルギーを解明する上で、何らかのヒントとなる現象ではないでしょうか。

◎エネルギーの段階と発生する電場の関係

(A)わたしたちのエネルギーの段階というものは、一般的にヨーガでは五大エレメントの段階として表現される。このエネルギーの段階は、地元素・水元素・火元素・風元素・空元素という段階でエネルギーは昇華されると。で、この「地元素」というのは固体成分であると。で、「水元素」はその固体成分の運動範囲が広がった、まあ要するに液体的な状態とそれから水蒸気的な状態を考えればよろしい。そしてその次に現われるのが「火元素」である。この火元素は明らかにプラズマ現象として表現することができる。で、この火元素の段階において頭のしびれが生じるから、間違いなく肉体内の成分を昇華した形での電荷の発生であると見るのが妥当ではないかと考える。これについては修行者

を、まあ修行に入り、それからどのような形で進化するかということについて、この「真理探究」によってもっともっと深く研究すれば、必ずはっきりする現象だと思います。

（MM）ここで、そのステージと測定される電場の強さに相関があるということですが、それは要するに集中する強さとも関係があるのでしょうか。

（A）意識が昇華して、つまり意識が高い意識状態になって初めて、元素も高い元素をコントロールできるわけだよね。そうなると当然、精神集中とそれから発生する電荷の関係というものはおのずと正の関係が生じると言えるんじゃないだろうか。

（MM）はい。

◉元素について

（T）尊師、その場合の「元素」という言葉なんですけれども、これは普通我々が使っている言葉とは違う意味で使われていると思うんですが。これはどういったものなのでしょうか。

（A）いや、これについてはわたし自体も自分自身の霊的体験によってしか表現できないけども、やっぱり原因となってるものは、肉体を構成している肉体および食べ物だと思います。そしてそれが消化されて普通は排泄されるわけだが、その排泄されるはずの物が徐々に徐々に排泄機能が静止に向かい、そして徐々に生命エネルギーとのミックスによって、固体的な要素が、まあ液体・気体的な要素に変わり、そしてプラズマ化していくという感じなんだね。

（T）ということは、いわゆる「元素」よりは微細なものだということでしょうか。

（A）スタートとして使われる元素は、全く同じものだと思います。

（T）なるほど。

（A）したがって、今のT君のその質問に対して付け加えさせてもらいたいが、要するにヨーガでいう「元素」というのは、「要素」と言った方がいいのかもしれない。ただ一般的にインド・ヨーガ、あるいはインド仏教等では「元素」という言葉を使っているから、ここでも一応は「元素」という言葉を使っているわけだけどもね。

（MM）これは周期率表での原子番号一、二、三、……という、「元素」とは混同しないようにしないといけませんね。

（A）そうだね。

（T）わかりました。

◉遠隔作用について

（MM）そして今回の実験は、初から非接触での測定ですよね。ですから精神集中によって、遠隔的な作用を人間が及ぼすことができるという証明にもなったと思います。

それについてはどうでしょうか。

（A）このアージュニァー・チァクラというのは特別なチァクラで、現世のすべての願望をかなえるチァクラであるわけだね。だから例えば電荷を発生できるということは、遠隔、つまり遠いエリアに対しても、少なくともその部分における電気的変化を起こすことができる可能性がある、ということが今回の実験で言えるのではないだろうか。

（MM）そう思います。

（司会）ありがとうございました。大変興味深いお話が続いておりますけれども、そろそろお時間のようです。それでは、番組の締めくくりとして、尊師の方から何かコメントをいただけますか。

◉人類が崇高なものへと移行するために

（A）チァクラの中で特にこのアージュニァー・チァクラは、わたしたちがこの現実の生活を生きる上において、最も有益なチァクラであると言うことができます。これは今回の番組でもおわかりのとおり、わたしたちがいろいろな自由な生き方をするとき、このアージュニァー・チァクラの働きなしにはそれをかなえることはできません。したがって皆さんが瞑想修行に励み、そしてそれによってより多くの人に利益を与えるような意識を持たれ、そしてこのアージュニァー・チァクラが使われたら、この人類は大変崇高なものへと移行するのではないでしょうか。

17. チァクラの科学的検証　PART VI

[説法] 魂の進化とチァクラの関係

ロシアの皆さん、こんばんは。麻原彰晃です。

人間には、大きく分けて二つのタイプが存在します。それは、「経験を生かすタイプ」と、それから「経験を全く生かさないタイプ」の二つです。この「経験を生かすタイプ」は、自分自身が経験したこと、これに基づき、一つ一つの命題を解決する方向へと思索を繰り返します。

ところで、わたしたちには身体に七つのチァクラが存在しています。このチァクラは、もうこの番組を何度も見られた方はご存じのとおり、ムーラダーラ・チァクラ、スヴァディシターナ・チァクラ、マニプーラ・チァクラ、アナハタ・チァクラ、ヴィシュッダ・チァクラ、アージュニァー・チァクラ、そしてサハスラーラ・チァクラの七つです。この七つのチァクラは、「センター」と呼ばれますが、実際には「世界」であるという認識の方が正しいように思われます。そして、その世界を構成しているもの、それは何かと

いうと「意識」なのです。つまり、わたしたちが意識を向上させると、より上位のチャクラへと移行し、その上位のチャクラの世界を経験できるという仕組みになっているのです。したがって「霊的進化」イコール「意識の進化」と呼ぶことができます。

このステップを踏み出す人は、先程も述べた、経験をまず自分自身の命題であると考え、それをしっかりと解くと。それによって、一つ一つ下の世界から経験を終了させる。そして、終了した世界へは振り向きもせず、より高い世界を志向すると。このヨーガをインド・ヨーガでは「ジュニアーナ・ヨーガ」、つまり「思索のヨーガ」と呼んでいます。そして仏教も、この思索に重きを置き、熟考と吟味というプロセスをたどり、内なる世界の下の部分から徐々に徐々に捨断し、そしてステップ・アップをするわけです。

この方法によって、普通の人では考えられない、わたしたちは多くの体験をします。その体験の最終段階は「六つの神通力」と呼ばれるものですが、その前に例えば大変同性にも異性にももてるようになるだとか、例えば非常に学力がアップするだとか、例えば非常に音楽的なセンスが出てくるだとか、例えば非常に直感的な力が増すだとかいったような要素が増大してくるのです。

そしてこの理論の背景にあるものは何かというと、もともと人間と神とは本質的に差はないという考え方です。つまり、「神」とは人間の進化した形態であるとする考え方です。そして、実際に、今から二千五百年以上前に登場した偉大な聖者であるサキャ神賢は、多くの神々と対話し、そして「神々の王」と同時に「人間の王」として、この世界に君臨しました。これらからもわかるとおり、わたしたちが日々少しずつ、努力を積み重ねていくことにより、わたしたちは、今のわたしたち以上の要素を蓄積し、それによって神と何ら変わらない地点へ到達することができるのです。

よく考えてみましょう。キリスト教でも「父なる神」という言葉を使います。果たして、異次元の生命体に対して「父」という言葉を使うことができるのでしょうか。当然その世界へ入ることができるとするならば、それは父なる神と、そして自分自身とが、もう既に同じカテゴリーに属する生命体であると言うことができるのではないのでしょうか。つまり、キリスト教においても、「人間と神との差」というものを特別に規定しているわけではないのです。そして、その進化系の延長上に、父なる神への移行が存在します。

もともと仏教では、この父なる神の位置付けをブラフマン、つまり創造主と規定しています。そしてこの創造主へ至る道は、先程述べた、ムーラダーラからスタートし、そしてサハスラーラ・チャクラを貫いてこの肉体から意識が抜け出したとき、創造主の世界へ入ることができる、といっているのです。そして、その意識が個、つまり自己のためではなく、多くの魂のために、その世界への導きを行なうことにより、最終的には父なる神、つまりブラフマンを超し、そして最終的にはすべてを超越した存在、つまり神を超越した存在、真理勝者へと至ることができると説きます。

人は枠組みを破り、そして神を超越する存在があるのだと確信を持ち、そこへ向かって心が動き出したとき、既にあなたは、今のあなたではないのではないでしょうか。

【対談】

◉他のチャクラについての実験

(司会)今回もチャクラに関係した物理的実験、ということなんですが、この実験のポイント、あるいは狙いはどのようなところにあるのでしょうか。

(S)そうですね、今までの実験では、チャクラの存在、という点にポイントを絞って実験を進めてきたわけです。その結果が、前回までにご紹介した、例えば温度の変化であるとか、あるいは電気的な変化であったわけです。

(司会)なるほど。ところで、今までは、主として眉間にあるアージュニアー・チャクラを使った実験でしたね。

(MM)はい、初めに紹介した温度の変化、チャクラにおける温度の変化の実験におきましては、筋肉の影響等、その他の影響が入りやすいものですから、アージュニアー・チャクラ、つまり筋肉が少なく、観察しやすいチャクラを用いました。

(司会)ところで、今回の実験のポイントはどのようなところにあったのでしょうか。

(MM)前回にはアージュニアー・チャクラを用いた電場の測定の実験を行ないました。このような電気的な実験においては、実験結果に他の要因が入ることが少ないと考えられます。そう考えて今回は、アージュニアー・チャクラのみではなく、マニプーラ・チャクラ、そしてアナハタ・チャクラについても実験を行なったわけです。

(司会)それで、今回はほかのチャクラについても実験をしたわけですね。

(S)ええ、そうです。

それでは、実験装置および実験方法について簡単に説明しましょう。それでは、T君。

(T)はい。

実験装置としてはFET、つまり電界効果トランジスタをセンサーとして用いました。そして、これによって電場を測定する装置を作りました。この装置のセンサーを被験

者のチャクラの上五㎝のところにセットし、まず三分間はリラックス状態、次の五分間はチャクラに精神を集中した状態、そして、最後の三分間は再びリラックス状態、といった状態で電場の変化を測定しました。

◉アナハタ・チャクラの実験

(MM)それではまず、胸の中央にあるアナハタ・チャクラの実験結果から説明しましょう。被験者は、クンダリニー・ヨーガの成就者であるS師です。ではグラフを見ていただきましょう。

(S)図1は、アナハタ・チャクラに集中をしていないときの電場の変化です。

図2は、アナハタ・チャクラに集中したときの電場の変化です。

このように、明らかに集中によって、電気的な変化が生じていることがわかります。

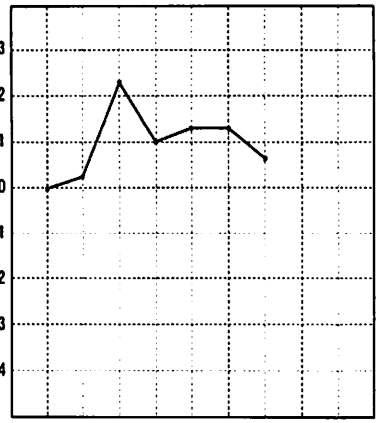


図1　集中していないとき

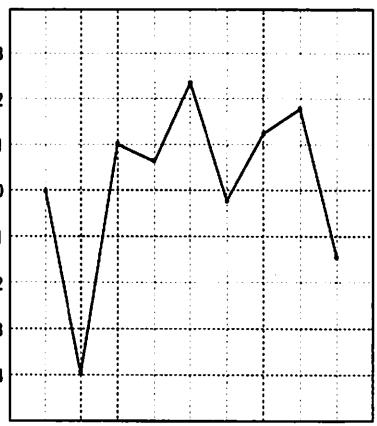


図2　集中しているとき

(司会)確かに、そうですね。

(A)このマニプーラ・チャクラとアナハタ・チャクラの特徴というものは、例えばマニプーラ・チャクラの場合、非常に消化力が強くなる。これは太陽神経叢が活発に働くことにより、普段は食べなくてもいいが、例えば食べたいときにはどれだけでも食べられるというような機能を生じさせることができると。で、このアナハタ・チャクラは特に真理の実践者にとって大きな意味合いのあるチャクラである。これはクンダリニー・ヨーガを超越し、そしてマハームドラーを達成し、そののち大乗の修行に入ると、このアナハタ・チャクラの中央の点、これが徐々に徐々に大きくなり、ドームのような形でどんどん大きくなっていくと。そして体の側面いっぱいに広がるぐらいの大きさの器へと広がっていきます。したがって大乗の成就者のアナハタ・チャクラの測定を今回行なわなかったことは、ちょっと問題があるんではないだろうかね。

(T)わかりました。それは次の機会にまた、ぜひ実験したいと思います。

(A)これは霊的にはっきりと感じられるから、電場の問題等にも影響があることは間違いないと思います。

◉チャクラの大きさと電場の面積

(MM)その場合のチャクラの大きさというのは電場が測定される部位の面積と関係付けられるわけでしょうか。

(A)わたしは面積と関係があると思います。そしてこのチャクラが開発されると、他人の心を自由にコントロールできるようになるんだね。つまり、ダイナミックな大きな波形が出、しかもその範囲が広くなるということではないだろうか。

(MM)そうしますと、範囲が大きくなり強度が強くなると。

(A)そうだね。

(MM)しかも物理学における作用というのはすべて相互作用で表わされるんですね。ですから、作用を外に及ぼすことができるということは、その外界の変化を自ら感じることができるということになると思うんですが。

(A)そうだね、微細な意識状態が生じる、ということだね。で、それをもって他心通とするということだと思います。

(MM)よくわかりました。

◉他心通

(司会)そうですか。ところで、今回の被験者の中には、今のお話にあったような神秘的な体験をした方というのはいらっしゃるんでしょうか。

(MM)はい。それについては、被験者に体験をインタビュー

しておりますので、それを聞いてみましょう。

　被験者は、クンダリニー・ヨーガの成就者である、k正師です。

（k）もともと観察力が鋭い方で、周りの人の心の状態など、例えば、表情とか仕草とかそういう細かい変化から読み取ることが得意だったんですね。ところが、修行を始めてから付いた他心通というのはもうそういうレベルじゃないんですよ。そういう細かい観察から理解するんじゃなくて、例えば相手に集中した瞬間、心の状態がヴァイブレーションとして伝わってきたり、あるいは相手の感情がそのまま自分に移ってきたり、調子がいいときなど、相手が心の中でイメージしているものがヴィジョンとして見えたりするんですよ。

　これは昨年の二月のことですけど、集中的に修行させていただく機会があったんですね。そのときの経験ですが、このときはすごくエネルギー的にもいい状態で、心も安定していて、本当にいい状態で瞑想修行ができていたんですよ。ところが、あるとき急に心がソワソワしだして、そのうち目の前にケーキのヴィジョンがちらつくようになったんですね。ただ、僕自身は昔から甘いものはダメな方でしたから、そのときは、これはおかしい、どうしてこんなものが気になるんだろう、本当にこれは自分の煩悩かなって悩んだわけです。

　そのとき隣で修行していた人が、ちょうど、深い潜在意識が出てきて煩悩に苦しめられている感じで、隣で修行していて僕も心配していたというか、けっこう気になっていたんですね。で、もしかしてこの人のデータじゃないかって思って、「大丈夫ですか」って、相談に乗る感じで話を聞いてみたんです。そしたら、「いやあもうケーキが頭から離れないで修行にならないんだよ」って話し出して、その瞬間、ああやっぱりそうかって納得していましたね。

　まあ、相手のイメージがヴィジョンとして見えるようなケースは、やはりエネルギー状態とか心の状態とかがいいときにしかあまり体験できませんが、例えばヴァイブレーションで感じたり、感情が移ってきたりなんていう体験は、クンダリニー・ヨーガを成就させていただいてからはもう日常茶飯事というか、一つ一つエピソードを挙げていったらきりがありませんね。それこそ一冊の本になるんじゃないでしょうかね。

＊　＊　＊

（A）彼の体験どおり、このチャクラが活性化されると、他人の心を読み取ることができるようになります。そして、その読み取る力というものは、先程も述べたとおり、そのチャクラの大きさおよび強さによって、他人の心を読み取る深さ、および他人の心の領域というものの広がりも出てくるわけです。

◉マニプーラ・チャクラの実験

（S）では、次にマニプーラ・チャクラについての実験結果をご説明しましょう。図をご覧ください。（被験者は、クンダリニー・ヨーガの成就者である）

　図3は、マニプーラ・チャクラに精神を集中していないときの結果です。

　図4は、マニプーラ・チャクラに集中したときの結果です。

　ご覧のように、このチャクラに関しても、明らかに集中によって電気的な変化が生じていることがわかりますね。

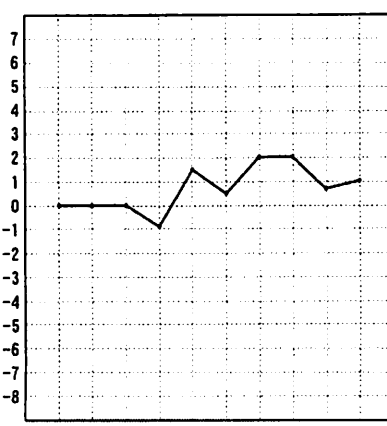


図3　集中しているとき

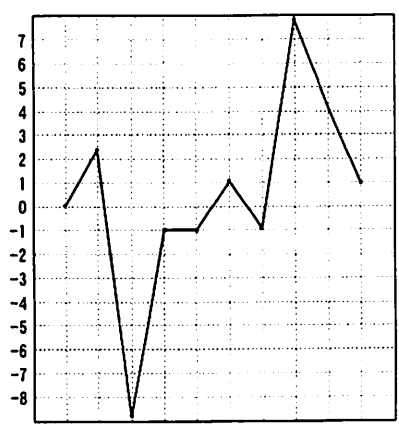


図4　集中していないとき

（司会）なるほど。

（A）このマニプーラ・チャクラは先程も述べたとおり太陽神経叢と深い関係があります。そしてこの太陽神経叢が活発に働くことにより消化力が強まり、そして食べたものの分解および吸収が促進されると。そしてそれにより火元素が増大するわけです。この火元素の増大は、十六回でも述べたとおり、わたしたちの肉体エネルギーの電荷を高めます。

◉プラズマ化現象

（T）ところで、尊師、その「火元素」というのは一体どういうものなんでしょうか。

（A）「火元素」というのは、現代物理学でいうところのプラズマ化現象だと思います。

（MM）確かに火そのものもプラズマ状態ですよね。つまり、原子が中性ではなく電離して、全体としては中性を保った状態。そして光を放っている。

（T）なるほど。

（MM）しかも、そのプラズマというのは、電流を非常によく通すというところも共通していますね。

（司会）それにしても、このように生体から電気的なものを、しかも意識的に発することができる、というのは驚きですね。

（MM）そうですね。

◉マニプーラ・チャクラによる恩恵

（MM）もしよろしければ、尊師にマニプーラ・チャクラを開発することによって得られる恩恵といいますか、消化力が強くなる以外にも教えていただけたら幸いなのですが。

（A）このマニプーラ・チャクラが開発されると、まず病的な胃腸障害等の病気が完全に治るということが第一。次に消化および吸収が盛んになることによって、短眠になると。つまり、肉体のエネルギー状態が改善されることによって、大脳にエネルギーが行き、それによって非常に睡眠が短くなります。そして記憶力・推理力・判断力等が増大すると。それから、修行がもう少し進んでくると、このチャクラは化身のチャクラ、つまり高次元の身体を有するチャクラなわけだけど、ここから変化身というものが出て、それによってバルドを経験できると。で、「バルド」とは何かというと、異次元のつなぎ目の世界を経験できる等々の多くの修行者としてのメリットがあります。

（MM）ありがとうございました。

この実験でもわかるように、わたしたちオウム真理教ではチァクラがどの程度開発されているかを客観的に測定できる方法を手に入れたということが言えると思います。

（18、19は説法・対談なしのため、略）

20. サマディの科学的検証　PART Ⅳ
低酸素状態での瞑想 I

「説法」神々への進化――酸素消費量と寿命

こんばんは。麻原彰晃です。

わたしたちは、神になる要素を有しています。

――いきなりこのようなことを言ったとしても、あなた方は信じることができないかもしれない。しかし、例えばキリスト教の教えの中でも、「天界へ生まれ変わり、父なる神のもとで神の子として生存する」とうたわれています。仏典においては、もっとリアルな天界の内容、あるいは神々の内容が説かれています。これらの内容を総合して検討すると、次のように分類することができるでしょう。

まず第一は、わたしたちの持っている、もともと地獄やあるいは低級霊域や動物へ生まれ変わる、下位へ結び付けられたエネルギーの流れ、これを遮断すること。

そして第二段階では、人間の中でも劣った種の状態を経験すること。この「劣った種」とは、体力がない、気力がない、あるいは知力が劣っている等々を挙げることができます。

そして、その劣った人間から、徐々に高等な人間へと進化する。この「高等な人間への進化」とは何を意味するかというと、例えば非常に知性が高い、例えば非常に直感力が鋭い、例えば非常に体力がある等を挙げることができます。これらの優秀な人間、この優秀な人間の状態から、わたしたちは徐々に神の要素を呈するようになるのです。

もともと人間と神の違いの第一のポイントは、寿命が長いこと。この寿命が長いことについては、例えば多くのインドの聖者方が、自分たちの寿命を自由に決定し、そして死にたいときにこの肉体を捨てるという現象、あるいは百歳、百五十歳と長きにわたり瞑想修行を行なっているヨーガの修行者がヒマラヤの周辺にはたくさんいること等を考えても、人間が神へ至る一つのポイントとして寿命を挙げることができます。

この寿命と肉体の関係とは何であるかについて検討しなければなりません。もともとわたしたちの細胞は、何回まで再生を繰り返していいという規定が存在しているとヨーガの経典にはうたわれています。つまりもし、この細胞の代謝というものが落ちるならば、そのときにわたしたちは、わたしたちが考えている以上の長い人生、つまり長寿を得ることができるのです。

では、この長寿を得るため、つまり細胞の分裂回数を抑える作業としては、どのような方法があるのでしょうか。これはまさに酸素の消費、これをいかに少なくするかということがポイントとして挙げることができます。つまり、わたしたちの呼吸が少しずつ少しずつ長くなる、そして体内の酸素と二酸化炭素のガス交換が徐々に徐々にゆっくり行なわれるようになると、わたしたちの代謝は落ちます。そして、最終的には呼吸を完全に止めた状態で生活できるようになるのです。

この記載については、例えば、イエスの長きにわたる断食の記述や、あるいはサキャ神賢が弟子の前に現われて一回たりとも呼吸をしたことを弟子たちが見てないという「大完全煩悩破壊経」の内容等を検討するならば、よく理解することができるでしょう。

そして、この酸素と二酸化炭素のガス交換が行なわれなくなると、通常の状態、つまり普通に話し、普通に見、普通に喋ぎ、普通に聞くといったような作業を通常どおり行なっていたとしても、その新陳代謝は、普通の人と比較すると、普通の人の安静時、あるいは安静時以下の状態へと移行します。もちろんこのときは、食事をあまり取らなくても体は普通に動くようになり、そして、その状態においては、まさに心の状態は安らいだ状態を経験するのです。そしてこの状態を真理においては「寂静」といっています。

この寂静の状態がどのような形で現出し、そして、一体それは酸素の濃度とどのように関係があるのかについて次に検討をしなければなりません。

もともと仏典においては、水中をサキャ神賢が自由に歩いたとか、あるいは弟子たちが水の中で全く呼吸を止めてしまった、そして何時間も出てこなかったとか、あるいはヨーガの修行者方が何時間、何日という間水中でサマディに入ったという記載を見てもわかるとおり、ほとんど呼吸しなくとも、生存することができることは間違いありません。そして最終的には、酸素消費ゼロの状態であったとしても生存は可能であると考えることができます。現に、インドの聖者の中では水中で三十日間以上その状態を保持したという記載もあるくらいですから。

ところで、「この状態を科学的に検証できないか」という実験を、わたしと、そしてわたしの弟子たちは試みています。それが、俗にいうところのエアータイト・サマディのチャンバーです。そして今の段階においては、少なくとも人間は、平地換算にして酸素濃度九・七パーセント前後までは通常の思考――まあ呼吸についてはチェーンストークス式呼吸（＊＊3）のような状態が起きますが――を行なうことができることが証明されています。これについては、二人の成就者がその状態を経験していると。

しかし、これらの件について、一般の科学者はこのような反論をするかもしれません。それは「もともと、高地民族においては毛細血管の増大、および血中ヘモグロビンの増加によって、酸素の薄い状態でも訓練によって長く生存することができる、あるいは平気で低酸素の状態でも生活できる」という記述と実験が存在するからです。しかし、これらについては、二つの反論があります。それは、それらのいろいろな文献を検討した結果、そうなるためには、もともと生まれつきそういう高地に存在していたという条件が必須のように思われるからです。

＊＊3　チェーンストークス式呼吸
一連の激しい呼吸と無呼吸とを繰り返す病的な周期性の呼吸。高山病、死期の迫ったときなどに見られる。

ではなぜ修行者は、このような高地に存在していなかったとしてもそれが可能となるのでしょうか。それは先程も述べたとおり、まず心における煩悩を弱めることにより、体内の酸素と二酸化炭素のガス交換が少なくなるという現象を挙げることができるでしょう。そして最終的にサマディ、つまり一切煩悩を捨断した状態に至ると、肉体の状態は完全に停止し、この肉体から別の世界、つまり先程述べた、神々の世界へと移行することが可能になるのです。

さあ、ロシアの皆さん、あなたには未知の可能性が存在しているのです。あなたがもし神へ移行したい、神の要素を形成したいと考えるなら、今、この瞬間から修行するしかないんだということを認識していただきたいものです。

[対談]

◎修行者の超人的な力

（司会）今回の「真理探究」では、オウム真理教の成就者が持つ、超人的な力というところから入っていこうと思います。

オウム真理教の修行によって成就された方の中には、超人的な力を身に付けていらっしゃる方がたくさんいますが、例えばどのような例があるんでしょうか。

（S）そうですね。体に一五〇〇ボルトの電圧がかかってもあまり影響を受けなかった人もいますね。

（V）ほかにも聖者MK最上善逝のように十一時間二十分の長きにわたって呼吸が停止した例もありましたね。

（A）超人的な例としては、遠隔透耳を行なう人や、あるいは遠隔透視を行なう人や、あるいは他人の心が即わかってしまう例、あるいは水中クンバカにおいて約十五分間水中で呼吸を停止した例、等々たくさんあると思います。

(司会)最近、そのような例があったということを伺っているのですが。

◉低酸素状態での瞑想

(S)はい。最近では通常の人間では耐えられないような低酸素濃度の状況で、瞑想を続けたという例がありました。

(司会)それについて詳しく説明していただけますか。

(S)はい。「真理探究」の第三回目でもご紹介申し上げましたが、オウム真理教にはクンダリニー・ヨーガの成就者が存在します。そして、クンダリニー・ヨーガの成就認定の条件の一つとして、五日間、密閉された、地中に埋められたチャンバーの中で、断水断食という過酷な条件の下で瞑想を続けるということがあります。そしてそこでは、呼吸による酸素消費量が測定されています。しかし、今回紹介申し上げる高いステージの修行者は、不利な条件でチャンバーに入ったために、チャンバー内の酸素濃度がかなり低い値になったにもかかわらず、瞑想を続けることができたのです。その不利な条件というのは、チャンバー内の温度が低かったために、体温を維持するのに多量の酸素を消費しなければならなかったこと、などです。しかし、今回ご紹介申し上げる高いステージの修行者は、低酸素濃度の状況においても瞑想を続けることができたのです。

それでは、聖者VA到達光正師の体験談をご紹介します。

(VA)五日目は酸素濃度も一〇%台になっていまして、最終的には一〇%から九・七七まで落ちたわけですが、状態としては苦しい状態ではあったのですが、それほど苦しい状態ではないと。そして呼吸も、ヴァヤヴィヤ・クンバカ・プラーナーヤーマという呼吸法がオウムにはあるわけなんですが、それより若干緩めの呼吸になっていました。それが約一日続いたのではないかと思いますが、それでも呼吸としては非常に苦しいという状態ではなくて、そういう呼吸をしていれば、瞑想もできる状態でした。

(司会)今体験談を話してくださった聖者VA到達光正師は極限修行中において、九日間の断水断食を成し遂げた強力な意志力の持ち主であるということをここで加えておきます。ところで、チャンバー内はどのような工夫がしてあり、測定が行なわれているのですか。

◉チャンバー——その緻密な構造

(T)はい。測定においてはチャンバー、つまり被験者の入る密室の気密性がポイントになります。つまり空気の出入りがないということです。この点に関して我々は、ステンレス板の溶接によってこの問題を解決しました。また、気密性に関しては、内部を加圧あるいは減圧して、長時間放置してもその圧力が変化しないということによってチェックしています。そして、酸素濃度計の分解能は〇・〇一%です。「分解能」というのは、酸素濃度の変化を識別できる精度のことです。

温度変化による測定誤差をなくすために、温調器によってチャンバー内は一定の温度に保たれています。

そして酸素濃度計がコンピューターにつながれて、データ処理がされています。

(司会)なるほど。緻密な構造になっていますね。

ところで先程の話に戻ります。先程のチャンバー内において普通の人間では耐えられないような、低酸素濃度で無事でいられた例があったようですが、実際どれぐらいの濃度まで大丈夫だったのですか。

(S)はい。この表はクンダリニー・ヨーガの成就者の、五日間のチャンバー内の酸素濃度の変化です。このように最終酸素濃度は九・七七%になっています。

(司会)酸素濃度とその酸素濃度における肉体的な症状については、その二つの間に何か関係があると思うのですが、それについてはいかがですか。

(V)はい。それでは、表をご覧ください。

これによると、九・七七%前後の酸素濃度では、意識不明に陥ったり、あるいは下手をすると死亡してしまうことがわかります。さらに密閉したチャンバー内では、酸素が消費されるとともに、呼吸にともなって二酸化炭素が増えますので、さらに条件は厳しいと言えます。(本巻568頁図5・6参照)

(A)ところでV師、この酸素濃度は標高六〇〇〇メーターに値するんだよね。

(V)はい、そのとおりです。

(A)これは説法でも述べているが、もともとインドの聖者は六〇〇〇メーター、七〇〇〇メーターの地帯にも存在するといわれています。そしてその、聖者がその地域で生存できる可能性というものを今回の実験は示したのではないだろうか。どうだS到達光師。

(S)はい。わたしもそう思います。

チャンバー内の酸素濃度の変化

開始直後	17.94
1日目	16.54
2日目	15.05
3日目	13.52
4日目	11.90
5日目	9.77

聖者VA到達光正師

◉なぜ低酸素で生存できるのか？
――精神と肉体によるアプローチ

(A)では、なぜこのように低酸素の状態で生存できるかということについて検討しなければならない。それは、もともとわたしたちが酸素を消費する理由としては、いろいろなストレス、あるいは煩悩による過呼吸を挙げることができると思います。例えば意識が緊張するならば、その分、当然酸素は消費されると。しかし、もし内側に人間よりも静かな心の状態を形成することができるならば、そのとき当然呼吸は静かになるわけです。

これが精神的なアプローチ。もう一つは肉体的なアプローチがあります。これは今のインドのハタ・ヨーガやあるいはラージャ・ヨーガ等で行なわれている方法である。つまり呼吸の回数を徐々に徐々に少なくし、そして出息と入息を長くしていくと。これによって体内の酸素の取り入れを静かに、しかし少なくしていくと。そしてそれに対して心を慣れさせると。つまり、酸素の入りが少ないがゆえに、心の働きが鈍り、そして煩悩を弱めるという方法であると。そして経典には「意」、つまり心の働きによってもわたしたちの心をコントロールできるし、あるいは呼吸の働きによってもコントロールできるといわれています。もちろんオウム真理教の修行は、この両方の修行を組み入れているわけです。

(T)そうですか。ところで、真面目にオウム真理教の修行に取り組み、クンダリニー・ヨーガの成就を果たした聖者VA到達光正師は、実際は低酸素の状況にあっても普通に瞑想したわけですよね。ですからこれはまさに驚異だと思いますが。どうでしょうか。

(A)そうだね。もともと修行者が修行を行なう一つの目的というものは、低酸素の状態、あるいは酸素が完全に遮断された状態で、意識が鮮明な状態をつくり上げるということがポイントとして挙げられます。それはなぜかというと、まさにそれこそが死であるというふうに考えられてきたからです。そしてこの低酸素の状態でも、彼がはっきりとした意識によって瞑想ができているということは、まさに完全な証明とは言えないけども、それに近い証明になったのではないかと考えられます。

(司会)ありがとうございました。締めくくりとして尊師の方から何かコメントをいただけますか。

◉人間から神へ

(A)人間が人間を超える。そして神になる。その状態が現出するとするならば、必ずそれは、この生存期間中、つまり修行期間中にいろいろな特別な変化が生じるはずです。そして今回の、この低酸素の状態で生存できるということは一つの特徴であると言うことができるでしょう。そしてこのようないろいろな特徴の積み上げによって、わたしたちは人間から神への道を歩いていくわけです。

さあ、あなた方も、しっかりと神の道を目指そうではありませんか。

21. サマディの科学的検証　PARTV
低酸素状態での瞑想Ⅱ

[説法] 過去世・現世・未来世を超えて

ロシアの皆さん、こんばんは。麻原彰晃です。

皆さんは「過去世」というものを信じていますか。もちろん「過去世」、あるいは「未来世」について信じることは、大変困難かもしれませんね。しかし、もともと、例えば共産主義の根本理念をなしている弁証法にしろ、過去・現在・未来、つまり時の流れというものを無視して考えることができないのと同じように、わたしたちも生まれた瞬間の個体差を検討すると、過去世の存在なしにその理由については答えることができないのです。

しかし、「物質的ものの考え方こそ最高である」と考える人たちにとって、この過去世の考え方というものは、現代、そして現在の自己の状態を固定することになるわけですから、あまり考えたくない命題ということになるでしょう。しかし「その人がそれを肯定しようと、否定しようとも過去世は存在し、また未来世は存在するんだ」というのが真理の教えであることにほかなりません。

では、それについて、だれが説いているのか。

例えばイエス・キリストの例を挙げましょう。彼は「神のみもとから来た」と自分を表現しています。もし彼が「神のみもとから来た」魂であるとするならば、彼の前生は神の世界であったと言うことができるでしょう。そして彼は人間として生まれ、若いときから宗教的生活に没頭し、そして三十数歳の寿命を閉じるわけです。そして彼は死ぬ前に、「わたしは神のみもとへ帰る」と言っています。ということは、イエス・キリストの教えはまさに過去、そして現在の人間の生、そして未来世、つまり天界の生という流れの一つの証明ではないでしょうか。もし、イエス・キリストの教えを信じないとするならば、話は別ですが。

ここでわたしの言う「イエス・キリストの教え」とは、ヨハネやパウロの教えではありません。あくまでも、イエス・キリストそのものが説いた教えの内容だけに限定されると考えていただきたいものです。

では、それはなぜでしょうか。それは、ヨハネにしろ、パウロにしろ、過去世を知らず、そして未来世を知らないか

らです。いくら偉大な聖者キリストの教えをじかに聞いたとしても、彼らの中に、実際に過去世、そして現世、そして来世という三つのカテゴリーの内容について知る力がなかったとするならば、彼らは普通の人より少し霊的に進化した魂にすぎず、当然霊的に進化した魂にすぎないということは、彼らの教えの中に多くの過ちを含んでいると考えるべきだからです。

ではなぜ、多くの過ちを含んでいると言うことができるのでしょうか。もし、キリストの弟子たちが、心が完全に浄化されているとするならば、過去世は見えて当たり前、あるいは未来世は見えて当たり前だからなのです。つまりこれらの神秘的な力を阻害するものは何であるか、それは心のけがれにほかならないのです。つまり、心のけがれがあるからこそ、過去世を知ることができず、あるいは未来世を知ることができないのです。

では、今生わたしたちがいろいろな宗教に巡り合い、そしていろいろな実践を行なうのはなぜでしょうか。それは、先程述べた「過去世の経験の構成によって決定される」と言って過言ではないでしょう。例えば、ものの考え方において、過去世・現世・来世があるという教えを前生から受けた場合、今生は当然、その教えにぶつかったとき、独特のインスピレーションを生じさせます。そしてこれこそ、わたしの求めていた教えであると理解するようになるのです。

そしてもう一歩進んで、例えばそこで、「その過去世・現世・来世という三つのカテゴリーは物質的世界にすぎず、この物質的世界は、わたしたちが特別な瞑想を行ない、離脱することにより、完全に解放され得る世界である」――つまり、解脱の思想がその人の中に存在するならば、当然その人は次の段階で、解脱を含む修行へと導かれることになります。

そして、その人が例えば自己の解脱、それを超えた上で、多くの人たちにその教えを説かなければならないという思いが心の底からわいてくるとするならば、その人は過去世において既に個の解脱の経験があり、そして多くの衆生を済度した経験があるにほかなりません。

では、このような考え方を述べると、次にこのような反論をなさるかもしれない。「では、一回目はどうだったんだ」と。

そのとおり。経験も、それはちょうどコップの中に入れる水と同じように、少しずつ少しずつ蓄えられ、そして新しい進化を遂げることができるのです。それはちょうどエネルギーがある段階に達すると、核融合を起こすのと同じ理論に似ています。

では、その経験はどのような形で科学的に検証できるのか。

それはわたしたちの肉体の中に存在する管、つまりエネルギーの流れの管、そしてエネルギー、そして意識の三つによってそれを証明することができるのです。そして今オウム真理教が真理と称し、証明しようとしているのはまさにこの、管、エネルギー、つまり風ですね、そして心滴――意識ですね、この三つの関係について研究していると言うことができるでしょう。そしてこの三つの関係が完全に解明されたならば、すべての魂が必ず苦しみから解放され、そして神々に至ることは間違いないと思われます。

さあ、ロシアの皆さん、あなたもあなたの持っている素晴らしい知識とそして経験、これをぜひともこの精神的進化のために、わたしと一緒に使おうではありませんか。

[対談]

◉酸素濃度とその人体への影響――経典との一致

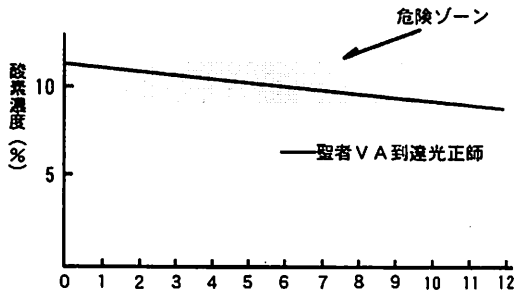
(司会)それでは、今回は、まず前回の内容を少し振り返るところから始めたいと思います。

(V)前回の説明にもあったように、あるクンダリニー・ヨーガの成就者は、最終酸素濃度に関して九・七七%を記録しました。

(S)はい。ここでクンダリニー・ヨーガの成就者の五日間のチャンバー内の酸素濃度の変化と、一般人に対する酸素消費量の変化の表があるのでご覧ください。(図1参照)

ここで申し上げておかなければならないことは、聖者VA到達光正師の場合は、チャンバー内の温度が二四度といい

図1　クンダリニー・ヨーガ成就者のチャンバー内の酸素濃度の変化



サマディ終了前12時間のチャンバー内の酸素濃度変化

う低い温度で、たいへん不利な条件で瞑想を続けたことです。

つまり温度が低いために、体温を維持するために、多くの酸素を消費しなければならないということです。

(司会) これを見ると、二酸化炭素濃度が高くなると酸素消費量が増えるようですね。

(S) そうですね。

(V) それではチャンバーの中の酸素濃度と、そのときの被験者の症状との関係を表わした表をご覧ください。(本巻368頁図5参照)

これによると九・七七%前後の酸素濃度では意識不明に陥ったり、あるいはひょっとすると死んでしまうという可能性もあることを示しています。さらに密閉されたチャンバーでは、酸素が消費されて減るとともに二酸化炭素が増えますから、条件はさらに厳しいと言えます。

(A) ところで、このデータというものは非常に重要なデータであると言うことができるでしょう。それはなぜかというと、例えばヨーガの経典である『ハタ・ヨーガ・プラディーピカー』や、あるいは『シヴァ・サンヒター』等にはこれと非常に似た記述(＊＊4)が載っています。

まず一番初めに発汗が起きると。もちろんこの発汗が起きるときには心拍数の増大が起きます。そして次に視力障害が起きると。そしてその次にけいれんが起きると。そしてけいれんが起きた後に気絶すると。つまりこれはクンバカ、呼吸を長く止めるとどのような現象が起きるかということを表わした経典内容です。

ところで、もともと修行の目的というものは、死を克服する、つまり生と死の区切りを完全になくしてしまうということがポイントの一つとして挙げられます。そして完全に死を克服した場合、その者はこの世にいながら未来世、および過去世について多くの知識を得ることができるのです。そしてそのプロセスとしては先程も経典に載っている内容を説明しましたが、その経典の内容と、今回のこの医学的なデータとの間には相関関係があることが理解できます。

もちろんわたしがこの話をした理由はなぜかというと、ヨーガのプロセス、あるいは瞑想のプロセスは明らかに死へ至る道の予行演習を行なっているんだということを皆さんにお伝えしたかったからです。そしてこの気絶がない状態で、しっかりとした意識の状態で、先程述べた発汗、つまり心拍数の増大、そしてけいれん、そして呼吸停止といったプロセスを経験してこそ、初めてわたしたちは死を超えたことになるのです。

＊＊4　酸素濃度の医学的データとヨーガ経典

『ハタ・ヨーガ・プラディーピカー』には、次のような記述がある。

「初級の調気においては発汗し、中級の調気においては戦慄が生じ、上級の調気においては不動の状態に達する。それゆえに気の抑制を修行しなければならない。」

『ハタ・ヨーガ・プラディーピカー』
第2章　調気法(プラーナーヤーマ)　佐保田鶴治

◎安全の二重保証――物理的装置と尊師の超越神力

(司会) ところでこのチャンバーの安全性についてはどうなのですか。

(T) はい、それについては大丈夫です。といいますのは、内部の酸素濃度は一分ごとに逐一アウトプットされます。しかも、内部状況は、インターホンによってチェックできます。そして、万が一の場合に備えて、内部には酸素ボンベが置かれています。

(S) また物理的な装置だけでなく、尊師の超越神力によっても危険を回避しています。例えば、ある修行者がチャンバーに入っていたときに、酸素を多く消費し、チャンバー内の酸素濃度はたいへん低くなり、危険な状態になっていました。そして、まさに、その修行者が気絶し掛けているときに、尊師からの連絡により、その修行者をチャンバーから出したことがありました。

また、次のようなこともありました。わたしがチャンバー内の酸素濃度をモニターしていましたが、そのとき、酸素濃度は以前のデータから判断するとたいへん低くなり、危険な状態にありました。そして、そのことを尊師にご報告申し上げようかと迷っていたときに、尊師から電話がかかってきたということがありました。このような例はこれまでいくらでもありました。

(司会) 現実の物理的装置と、それから尊師の超人的なインスピレーション。この二つがあるということを考えると、安全性の面では問題はないと言っていいですね。

(S) そうですね。

◎成就の証明――低酸素での鮮明な意識状態

(T) ところで尊師、質問があるのですが。

(A) はい。

(T) この「真理探究」の最初の方で、サマディや酸素消費に関して話があったと思いますが、そのときには、高いステージの者ほど煩悩が少なく、そして酸素消費量が少ないということでしたが、今回の場合、どのように考えればいいのですか。

(A) この成就者は、特別な例だと考えられます。そのまず第一の理由は、極厳修行の期間が非常に短かったということ。

それから第二の理由は、ここは非常に重要なところだけども、オウム真理教のクンダリニー・ヨーガの成就者には四つの体験を義務付けています。それはまず第一にエネルギーが上昇すること、第二に光そのものに没入すること、第三に化身を出すこと、そして第四の意識の連続と。この意識の連続というものは最もステージの高い状態で現われるものです。で、そのステージの高い状態で現われる意識の連続の状態が、酸素濃度九・七七という状態でもしっかりとした意識の状態でいられたということは、まさに成就者の認定にふさわしい、と考えました。

ところで、ここで一つ追加しておかなければならないことがある。それは、普通の修行者においては一三%ぐらいから苦しくなり、そしてだいたい一一%ぐらいで気絶の状態になる、ということが今までの実験で明らかになっています。したがって九・七七の状態で普通の鮮明な意識状態にあったということは、彼がまさに成就していたということではないかと言えるでしょう。

(T)なるほど。わかりました。

◎成就のタイプの違い

(司会)そうですか。もともと瞑者VA到達光正師が、以前の成就者とは少し違うタイプの成就者であるという可能性はあるのですか。

(A)修行者には四つのパターンがあります。それは功徳を重点的に積んでいるパターンと、善行を重点的に積んでいるパターン、そして、法則に従って、その法則の記憶修習によって達成しているパターンと、それから寂静によって達成しているパターンと。で、この寂静のパターンと、法則の記憶修習によって達成しているパターンの間に、成就者としてのタイプの違いが考えられる。例えば、寂静の修行を行なっている場合、酸素消費は非常に少ないということになります。しかしもし、心に乱れが生じ、酸素消費が多くなったときに、その魂が、例えば低酸素の状態で存在できるかどうかについてはまだ実験していないと。しかし、彼は消費は多いが、低酸素の状態になったときにも平然としていられるだけの意識の鮮明さ・意志の強さというものを持っています。明らかに成就のタイプが違うと言うことができるでしょう。

(司会)ありがとうございました。締めくくりとして、尊師の方から何かコメントをいただけますか。

◎死のプロセスを理解すること

(A)今回の話でもわかるとおり、修行を行なうということはわたしたちの意識の鮮明さを増し、そして呼吸がどんどん弱くなっていく、つまり死の直前の状態でもはっきりとした意識状態でその部分を通過することができるということが証明されたと思います。そしてこれは、わたしたちが生から死へ至るプロセスにおいて、正しい判断をする上において欠くことのできない条件です。したがって皆さんも、必ず人間は死ぬわけですから、その死の前に、死のプロセスをすべて理解していただきたいものです。

(22は「ラジオ真理探究」／23～26はキーレーン特集：93.3.10対談参照)

27. イニシエーションを科学する PART I
(アストラル・テレポーター)

[説法]宗教の五つの柱と救世主の命題

◎神へ至る道、または絶対の真理を得る道としての宗教

こんばんは、麻原彰晃です。

ロシアの皆さん、皆さんは「宗教」という言葉を聞いたときに、一体何を考えますか？

もちろん、〝心の安らぎ〟あるいは〝心のよりどころ〟といった一般的な概念が浮いてくる人がほとんどでしょう。この〝心の安らぎ〟や、あるいは〝心のよりどころ〟という答えに対して、わたしは何らコメントをする気持ちがありません。

しかし、もし〝宗教イコール神へ至る道〟であるとか、あるいは〝宗教イコール精神世界における絶対の真理を得る道である〟というふうにお答えになるならば、次のことを定義し、そしてその定義が正しいかどうか、皆さんに検討していただきたいと思います。

わたしは宗教には「五本の柱」が必要であると考えています。

これを、一般的宗教から、より高度な宗教への段階としてこの五本の柱を順番に挙げるならば、まず第一は「教義」と。つまり、教義がしっかりしていなければならない。つまり、そこで説かれている法則がしっかりとだれでも納得でき、そしてそれが真実でなければならないということが挙げられると思います。

そして、第二本目の柱は、いくら教義がしっかりしていたとしても、その教義を具体化するだけの「修行体系」というものがしっかりしてなければならない。これはちょうど、建造物の設計図と、そして骨組みに当たると考えられます。

そして、第三番目の柱は何かと。これは、その教義、そして修行体系にのっとって修行した魂が、その結果をしっかりと達成していなければならないということです。

理論というものは、その閉じた系においていろいろな条件あるいは原因を設定することにより、いろんな結果を想定することができます。これは宗教についても同じことが言えます。したがって、教義および修行体系がいくら完全に見えたとしても、その教義・修行体系の実践を行なってる魂が具体的にその結果を出さない場合、その教義に問題があるか、あるいは修行体系に問題があるかということになるのです。したがって、第一の条件・教義、第二の条件・修行体系、そして、第三の条件・それを行なって達成した魂、つまり「成就者」、あるいは「先達者」ということが言えるでしょう。

では、第四の柱は何でしょうか。それは「グル」です。なぜ、グルが必要なのか。いくら教義がしっかりしていたとしても、その教義の深い意味を個々に合わせて説き明かすことができる、それはグル以外にあり得ないからです。したがって、第一の柱・教義、第二の柱・修行体系、第三の柱・先達者、そして第四の柱はグル、つまり、霊的・精神的指導者ということになります。

◎イニシエーション――短い人生の修行に不可欠

では、この第一の柱から第四の柱までがそろっていれば、完全な宗教と言えるのでしょうか？

もともと人間の寿命が今よりも十倍、百倍、あるいは千倍と長いとするならば、この四つの柱で十分かもしれません。つまりわたしたちが人生を経験し、修行を行ない、そしてその修行の効果をフィードバックし、検討し、新たなステップへと踏み出すことが可能となるからです。しかし、わたしたちは、あまり時間を与えられていません。この「時間を与えられていない」とはどういうことかというと、まず少なくとも二十歳まで、あるいは二十数歳まで一般の教育を受けなければなりません。そして、その教育と世の中の流れに対して矛盾を感じた魂が修行へといざなわれるのです。つまり、わたしたちがたとえ八十年間の人生を与えられたとしても、実際にわたしたちが修行できる期間というものは六十年に満たない期間しか修行できないということになるでしょう。この六十年間というものは、あまりにも最終の状態へ到達するには短い期間と言うことができます。

では、この短い期間の中で、最高の結果を得るためにはどのようにしたらいいのか。そのためには、最後の柱、つまり「イニシエーション」が必要なのです。

イニシエーションとは何か。これは、原義的な意味・字義的な意味は別にして、具体的な意味としてはエネルギーの移入、そして、そこへ到達するための特別なショートカットの瞑想、と言うことができるでしょう。このエネルギーの移入とは、一般的にある人がある人にあるエネルギーを注ぐ、というよりも、どちらかというと、ある人の意識をある人に映し出し、それを固定すると言った方が正しいと思われます。これと、もう一つは土台のしっかりした弟子に対して、本来だったら時間のかかる実践を、瞑想によってショートカットするという特別な瞑想体系です。

そして、この第一の柱から第五の柱までそろってこそ、初めて、この現代でわたしたちが素早く解脱、あるいは悟りを得ることができるのではないかとわたしは考えます。

この意見に対して、ロシアの皆さんはどのように考えるでしょうか。

◎世紀末の救世主は科学を駆使する

ところで、修行体系には、ヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラヤーナ、ヴァジラヤーナ（＊注5）といった体系があります。多くの人をいかに高い世界へ引き上げるか、これが救世主の最高の命題と言うことができるでしょう。この救世主の命題に対してどのようにアプローチしたらいいのか。

そこでわたしは、このように考えました。それは、今から二千五百年前よりただ一つ進んでいる、「科学」を使うしかないんだと。そして、この科学を使うとは何かというと、例えば、マントラの音の成分や、あるいは、電気的な成分に対して、その成分をできるだけ正確に再現し、それを多くの人に与え、それによって多くの人を高い世界へと引き上げる道しかない。――わたしはそう考えたのです。

そして、今回ご紹介する「アストラル・テレポーター」、あるいは次回ご紹介する「ボワ装置」（＊注6）等の開発がなされました。これは既に、今から三年、四年前から検討して、実際に成果を得ているイニシエーションです。これらのことが実際このロシアに広まり、そして皆さんが、神々の世界への道を開くことを願い、今日の説法としたいと思います。

それではまた、来週。

［対談］

◎神聖なエネルギーを与える驚異の装置

（司会）それでは早速、今回の中心的な装置であるアストラ

＊注5　タントラヤーナ、ヴァジラヤーナ：別巻の注釈参照のこと。

＊注6　ボワ装置：第27回から第32回の中で出てくるこの装置は、本文中の説明にもあるとおり、意識を高い世界に移し変え、クンダリニーを覚醒させたり、トゥモを生じさせたりするためのものであり、殺生を意味するものではない。

ル・テレポーターについてお伺いしたいと思います。このアストラル・テレポーターというのは、イニシエーションということなのですが、そもそもイニシエーションとは一体何なのかご説明願えるでしょうか。

(MM)はい。イニシエーションには、主として二つの内容が含まれます。一つは秘儀瞑想の伝授、そしてもう一つは神聖なエネルギーの移入です。このアストラル・テレポーターは後者に属します。イニシエーションそのものは、二千六百年前のサキャ神賢も行なっておられたわけですが、オウム真理教のイニシエーションの特徴は、現代科学、特に物理学の知見を利用して、その効果を飛躍的に高めていることです。

(T)神聖なエネルギーの移入ということなのですが、それに関して三点お伺いしたいのですけれども。

まず第一点ですが、神聖なエネルギーとはどういったものなのか。第二点、どういった効果・メリットがあるのか。そして、どういう人がそういうエネルギーを持ち、それが与えられるのか、という点に関してお聞きしたいのですが。

(A)これについては、この一、二、三については、逆の順番で答えることが最もわかりやすいので、逆の順番から答えさせてもらいます。

まず、神聖なエネルギーを有する魂というものは、要するに成就者であると。で、成就者とは何を意味するのかというと、もともとこの人間の世界に存在していながら、神の世界へ至ることのできる魂と。そして、その神の世界も愛欲の神の世界ではなく、それよりもう一つ高い神聖世界、つまり、完全なる愛欲を止滅し、そしてすべての魂の利益だけを追求した魂の行く世界で存在する魂の世界から来た魂であるか、あるいはこの人間の世界でその条件を具えた魂と。この魂が有しているエネルギー、これを神聖なエネルギーと定義することができます。

そして、この第二番目の「神聖なエネルギーの効果・メリット」とは何かというと、その神聖世界への道筋、つまり、その神聖世界へ至ることのできる魂のデータそのものを、弟子が受けることによって、その神聖世界へ至る条件を具えることができる、と言うことができます。この場合、二つのポイントから考えることができると。一つは、浄化。つまり、エネルギーの管、あるいは意識等が完全に透明に近付くことによって、高い世界からのデータの量が増える、ということが一つ。それからもう一つは、もともと粗雑なエネルギーを微細なエネルギーへ換えるということが、まあ聖者の条件になるわけだが、その聖者の条件をそのまま伝授されることによって、そのイニシエーションを受けた魂も、粗雑なエネルギーを崇高なエネルギーへと換えることができる、というメリットがあると思います。

そして第一番目の質問内容については、神聖なエネルギーとは、まあ先程も述べた、わたしたちの心を浄化し、そしてエネルギーを微細にし、わたしたちの本質である意識を高い世界へ、つまり、神聖世界以上の世界へいざなうことのできるエネルギー、これを神聖なエネルギーと定義することができると思います。よろしいでしょうか。

(T)わかりました。

◉現代科学を応用したイニシエーション

(司会)次に、ちょっとお伺いしたいことがあるのですが、オウム真理教のイニシエーションは、現代科学を応用していると理解したのですけれども、それについて、根拠も提ぜて説明願えないでしょうか。

(MM)はい。それでは、今回のアストラル・テレポーターを例にとって説明しましょう。

仏教やヨーガ、あるいはその他の高等な宗教であれば、必ずマントラ修行というものがあります。マントラというのは、神聖なヴァイブレーションと、そして意味を持った言葉ということです。そしてわたしたちは、これを十万回、百万回と唱えることによって、自分自身を変えていく、このような修行です。

そして仏教やヨーガの世界では、解脱者のマントラを一回聴くことは、自分自身でマントラを数十万回唱えるよりも効果がある、というようにいわれています。…そのマントラを聴くことは非常な効果があるわけです。

(T)それに関して、最近二つの面白い報告がされています。オウム真理教では、一九九二年末に「キーレーン」というオーケストラを結成しましたが、その団員がある病気で危篤状態に陥りました。そのときに、その連絡を受けた尊師の指示で、信徒でもあるこの団員に、尊師の歌を聞かせました。そうすると、それまで何日間も臨死状態にあったこの団員の病状が急激に回復したわけです。こういう例は、日本の信徒の間でもよく起こることですが、言葉の違うロシアでも起こったということで、団員も皆「奇跡だ！」と言ってるということです。

(MM)ただ実際問題として、普通のカセットレコーダーや、あるいはDAT、デジタルオーディオテープに尊師の声を録音した場合と、尊師の肉声を聴かせた場合を比較しますと、大きな違いがあるということがわかっていましたから、わたしたちはそれに代わる何かもっと精度の高いものを探していたわけです。

◉成就者の放つヴァイブレーションの威力

(A)ここで一つ、なぜその成就者のマントラと、それから一般の人のマントラとは違うのかについて説明をしたいと

思います。

一概に「音」といっても、個々の心の働きによって発される周波数は違いがあります。そして、高い成就を行なっていればいるほど、高い成分、つまり高周波域の成分を出すことができるのです。わたしたちの人体は、低周波域については、人体の下部に振動を与え、そして高周波域の周波数は、わたしたちの人体の高い位置に影響を与えることができます。つまり、マントラ修行の狙いとは何かというと、まず低い部分、つまり低周波を出すことにより、人体の低い部分を振動させると。そして、そこで霊的なエネルギーの覚醒を行ない、そして上昇させると。そして結果を得ると。しかし、もし成就者がマントラを発し、それに集中するならば、いきなり高い部分の活性が生じるのです。これが、一般の人のマントラと、そして成就者のマントラの違いです。そして当然、高い部分を活性化するためにわたしたちは修行してるわけですから、成就者のマントラと、それから非成就者のマントラで違いがあることは言うまでもありません。

(司会)そこで、科学の登場となるわけですね。

(MM)はい、そのとおりです。

尊師のマントラを人体に作用させる方法としては、いく通りか考えられますが、今までにも、尊師のマントラをできるだけ正確に、周りの全方位から作用させる「音のイニシエーション」や、尊師のマントラ波形を電流に変換して、人体に流すという「火のイニシエーション」等により、例えば多数の成就者を出すというような大きな効果を上げています。

(S)補足しますと、この研究の過程でわかったのですが、尊師の声は普通の人とは大きく異なっていました。つまり、尊師のマントラをオシロスコープで観察したのですが、普通の人とは異なり、超高周波の音、つまり人の可聴限度の二〇キロヘルツを超える音の成分が多く含まれていました。また、他の人とは異なり、倍音成分がかなり出ていたことが特徴として挙げられます。

(司会)「倍音」とはどういうことですか？

(S)倍音というのは、音があるものから発せられている場合、基本的な音の倍数の周波数の音が出ていることです。例えば、六〇〇ヘルツを基本的な音とすると、一二〇〇ヘルツ、一八〇〇ヘルツがこの倍音に当たります。

(司会)もう一つ、先程の説明の中でちょっとわかりにくいところがあったので質問したいのですが、高周波の音が出るということはどういうことを意味しているのでしょうか。

(A)例えば、これは、わたしよりも聖者ＭＭ智徳成就者の方が説明をしやすいと思うわけだが、高周波の電波を人体へ受けた場合、それで例えばまあ発熱現象が起きると。で、この発熱現象というのは、ヨーガや仏教では、トゥモと呼ばれていますが、それによってナーディーを浄化すると。ま、これについてはね、少し詳しく科学的に説明してもらえるかな。

(MM)はい、わかりました。音にしろ、電磁波にしろ、振幅が同じであれば、高い周波数の成分ほど高いエネルギーを持っています。そして、この高いエネルギーは当然、例えば組織の加熱等に使うことができます。

そしてわたしたちの研究によると、人体にはナーディーという管、これは、例えば真空の管と考えることができ、そしてその中に荷電粒子がたくさん入っている、というプラズマモデルを考えることができます。このプラズマは、外部から与えられるその高周波と感応し、そして熱を発するわけです。そして、その周波数成分が高い、つまり上の方のチャクラに行けば行くほど高い周波数と感応する、ということがわかっています。

(T)それから、実際の加熱の場合でも、周波数が高い方が効率がいいわけですね。

(M)そうです。

(S)付け加えるならば、このレベルの超高周波の音は、今、最も音の再現性が優れているといわれているＤＡＴやコンパクトディスクでも再現が不可能な周波数の領域なのです。

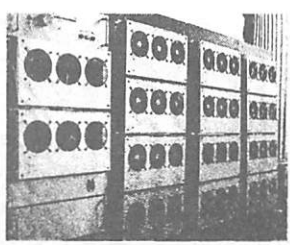
(司会)だから、超高性能のアストラル・テレポーターが必要だったわけですね。

(S)そうですね。

◉上昇の空間をつくるアストラル・テレポーター

(司会)では、アストラル・テレポーターの開発を担当された聖者ＭＭ智徳成就者から、その設計思想などについてちょっと説明願えないでしょうか。

(MM)わかりました。この「アストラル・テレポーター」の名前の由来から説明しましょう。音のヴァイブレーションを中心とした高い世界をアストラル世界といいますが、この装置によって、受けた人間の意識を瞬時に高い世界に移していく、そういう意味を込めて「アストラル・テレポーター」と名付けられました。目的は、尊師のマントラをできる限り高精度で記録し、そして再生することです。



そのためには、ＤＡＴ等で用いられている、例えばサンプリング周波数四八キロヘルツ、分解能

一六ビットでは不十分です。サンプリング周波数四八キロヘルツでは、例えば二四キロヘルツ以上の音は全く再現できませんし、それよりも周波数が低くても、高い周波数成分ほど粗雑な波形になるからです。そして、分解能一六ビットでは、特に小さな音の変化をとらえることができません。

そこで我々は、サンプリング周波数として一メガヘルツを採用しました。これはDATの二十一倍です。そして、分解能としては、六四ビットを採用しました。これは、DATの二百八十兆倍です。そして、すべてのデータはメモリ上に記録され、コンピューターを用いて再生するという、ズーバーコンピューターに似た構造になりました。

(司会)次は実際に、アストラル・テレポーターの製作に携わった聖者MN化身成就師に、製作に当たっての困難な話などをちょっと伺ってみようと思いますので、どうぞ画面をちょっとご覧ください。

(MN)アストラルテレポーターは尊師のマントラをいかに忠実に再現する入れ物を作るかということを目標に製作しました。六四ビット一メガヘルツということに関してはわたしは尊師に対して、そんな分解能を上げても意味がない。ただノイズ成分にしかならない、と申し上げたのですが、尊師はそれに対して、このノイズ成分の中に高い世界のデータが入っているんだ、ということを言われました。設計製作には約二十名で一カ月かかりました。初めのうちは尊師のマントラのデータが消えてしまうというようなトラブルがありました。そのトラブルシューティングに約二カ月かかりました。その後一年間の間にデータバックアップの改造、ADコンバーターの改造、DAコンバーターの改造と、大きな改造が三回ありました。その後三年間問題なく動いております。

(T)言葉ではわかりにくいと思いますので、実際に音を聞いてみましょう。アストラル・テレポーターとDATの音の差は、テレビではよくわかりませんので、ここでは、もう少し可聴範囲で、高い周波数成分をカットした場合どうなるかを聞いていただきます。

《音声》

と、まあこういうふうになるわけです。これは、DATとアストラル・テレポーターの実際の違いではありませんが、比喩的に考えればこういった差はあると考えられます。

もう一つ、この差について、図によって説明するとこうなります。画面をご覧ください。(図・略)

(司会)次は、アストラル・テレポーターの効果について、尊師、実際にご自分で使われてみていかがでしたか?

(A)やはり、その空間、アストラル・テレポーターが形成しているその空間そのものが、エネルギーの上昇の流れを作っているということが一つは言えると思います。それから、これあの修行してる人・してない人を含めて、心のある程度清らかな人の場合、まあ皆さん、そのテレポーターを使った段階で、非常に心地良くなるということを訴えています。これからもわかるとおり、至福、それからエネルギーの上昇の空間をこのアストラル・テレポーターが形成できることは間違いないのではないでしょうか。

(司会)なるほど。これは、もう人類への最高のプレゼントと言っていいですね。わたしも、試してみたくなりました。残念ですが、そろそろお時間のようです。

28. イニシエーションを科学するPARTII (ボワ装置)

[説法]イニシエーションと偉大なグルの存在

◉イニシエーションが効果を持つためには

ロシアの皆さん、こんばんは。麻原彰晃です。

ロシアの皆さん、先週わたしは、イニシエーションについて法を説きました。そして今週、わたしは、イニシエーションの目的と、そしてその結果について皆さんにお話をしたいと考えます。

もともと、イニシエーションの目的とは何かというと、魂を高い世界へいざなう、あるいは、魂の持っている心のけがれを浄化することが目的です。したがって、いくら形のある瞑想を伝授したとしても、あるいは、いくら心を浄化させ得るかに見える瞑想を伝授したとしても、その実態が効果がないとするならば、それはイニシエーションの意味、目的というものを達成しないということになるでしょう。

では、どのようにしたらこのイニシエーションの目的を達成することができるのでしょうか。それは、偉大なグルの存在がそれを可能とします。皆さんは「グル」というと、何を想像しますか?

わたしは、「けがれた魂の煩悩を引き受け、そして高い世界の経験をさせ得る魂」と定義します。では、この定義されたグルが一人存在すれば、わたしたちは救済されることができるのでしょうか。それは否です。なぜならば、もともとグルの有するエネルギーの量というものは、それほど多くないからです。

例えば、偉大なサキャ神賢の登場の時代、つまり、今から二千五百数十年前の大聖者サキャ神賢でも、この地球の魂のすべてを高い意識状態へいざなう、つまり、ボワ(意識の移し変え)をすることはできませんでした。それは、サキャ神賢に問題があったのではなく、その当時のイニシエーションの形態に問題があった、あるいは、それを使い得る条件、つまりそれを受けることのできる魂の数

に問題があったと言うことができるでしょう。

◎真理を科学する

ではどのようにしたら、より多くの魂をより高い世界へいざなうことができるのでしょうか。それは、先程述べた、偉大なるグルの要素のまず分析、これを行なうことから始めなければなりません。つまり「神秘を科学する」ということになるのです。

もともと神秘霊想というものは、科学文明がそこへ到達していないがゆえに「神秘霊想」なのです。つまり、科学が高度に発達した場合、その神秘的なものはすべて科学によって割り切ることができるはずです。そして、その要素の分析の結果、次はそれを再現できるかどうか、これが科学技術の領域の問題となるのです。この科学技術の領域と、そして分析し得る科学的能力、この二つが相まって、初めてイニシエーションを科学的に再現することができると言うことができるでしょう。

例えば、ある偉大なるグルがいたとして、その偉大なるグルがあるマントラを発すると。マントラとは何かというと、「秘密の詞章」とここでは定義しましょう。このあるマントラを発したとき、そのマントラの例えば波形、波の形が問題なのか、あるいは発されている波の長さが問題なのか、等々をしっかり分析し、それをしっかり再現できるかどうか検討し、再現でき得る部分を再現していく――これがまさに、多くの魂を大量に高い世界へいざなう、つまりポワ（意識の移し変え）し得る方法ではないかとわたしは考えます。

そして、この「真理探究」の流れでは、その部分について徹底的に検討し、そして、実験結果を皆さんに報告したいと考えています。

今回の「真理探究」では、わたしの考案したポワ装置、これを皆さんにご紹介したいと思います。このポワ装置の狙いは、皆さんがもともと持っている潜在的な霊的なエネルギーを覚醒させ、そして、それを上昇させると――ここで言っている「霊的エネルギー」も、回が進むごとにその本質が何であるかということを明らかにできると確信を持っています――そして、エネルギーの上昇に伴い、わたしたちの人体における高い部位の組織の活性化が生じると。例えば、大脳の活性化等がそれに当たります。そして、これによってわたしたちの持っていた潜在的な能力が活性化する。その最終的なものが神通力と呼ばれる六つの力です。

この神通力については、以前「真理探究」で説き明かしましたので、その項目を参照していただきたいと思います。いずれにしろ、最小の努力で最大の結果を得る。そして、多くの魂を高い世界へいざなわせる――これが救世主の役割なのです。

さあ、あなたも、一日も早くこのポワ装置を使い、そして、高い世界の経験をしてください。それではまた。

[対談]

◎高い世界へいざなうための儀式

(司会)では早速、今回の内容に入っていきたいと思います。人が死ぬと、通常司祭や僧がやってきて宗教的儀式を行なうのが通例になっているのですが、現在ではこの儀式は形骸化してしまった感があります。もともとこれにはどういう意味があるのでしょうか。

(A)もともと、まあ司祭、あるいは、まあ日本でいうとお坊さん等がやってきて葬式を行なうと。で、この狙いというのは、そこで死後の世界のガイダンスを行なうということが一つ。それからもう一つは、前回も述べた、その司祭やお坊さんの声のヴァイブレーション、あるいは心のヴァイブレーション――ここでヴァイブレーションとは電波あるいは音波と考えることができるわけだが――その力によって、死んだ魂の意識を高い世界へといざなうことがもともと狙いなわけです。したがって、もし司祭やお坊さんが全く力がない、つまり修行しないで煩悩的な人であるとするならば、逆にその人たちが来ることによって、その死んだ魂は低い世界へいざなわれる可能性もあります。そのような意味においては、大変危険な儀式であると言うことができるでしょう。

ところで、現代といにしえの儀式について検討するならば、いにしえの儀式の場合、先程述べた、死者を高い世界へいざなうことをポイントとして、いろいろな聖者がいろいろなものを考案しました。ま、その典型的なものがエジプトのピラミッドである、とわたしは考えています。それは、あのピラミッドの一つ一つの切り石、あるいは粘土を固めて作った直方体や立方体の煉瓦等にはものすごいエネルギーが込められています。これは、その造った人たちの霊性が非常に高く、それによって造られたものです。つまり、死の瞬間に行なわれる儀式の狙いというものは、高い世界へいざなうことが狙いなわけです。

そしてまあ、オウム真理教でも今回、ポワ装置というものを開発しました。これは、古典的なものと違い、原理は全く同じですが、現代科学を用いて作られています。

◎血流の集中する場所によって来世が決まる

(司会)大変興味深いお話だったのですが、そのポワ（意識の移し変え）に関連したことは何らかの経典に書いてある

のでしょうか。

(MM)はい、あります。これは密教の経典なのですけれども、「来世は、死ぬときに血流が集中していた部位によって決まる」というのがあります。

(T)オウム真理教の教義を考えますと、心が絶えず特定の煩悩に支配される人は、その煩悩に対応したチャクラに意識が固定されると。そして、そこで何らかのメカニズムによって血流が集中する。そして、それによって来世は決定される、ということですよね。

(MM)そうだと思います。

(司会)とても面白い内容だと思うのですが、物理学的、あるいは医学的な根拠はあるのでしょうか。

(S)物理学的な根拠については、わたしの方から申し上げましょう。以前の「真理探究」の実験で、チャクラに集中すると、その部位に電場を発生するということは確認されています。また、磁場についても今研究中です。医学的な裏付けについては、V師が説明してるのでご覧ください。

(V)医学的な裏付けを補足します。電場に関しては、血液中にイオンが大量に含まれ、電場によって移動しています。このイオンのうち、ナトリウムイオンは水を引き連れて移動しますから、電場によって、水、つまり血液が集まることになります。また磁場に関しては磁力によって、神経が刺激され、血管の平滑筋が弛緩するために血液が集まることになります。

磁場にこのような効果があることは日本の厚生省が認めており、磁気治療器の販売を許可しているほどです。よってこれらの例から電場、あるいは磁場のかかっている場所に血液は集中しやすいと言えます。

(司会)血流が集中することによって、来世が決定される、というところの最後の論理的なつながりがわかりにくかったんですけれども、これについて医師である聖者V到達光師にお伺いしてみました。

(V)例えば、消化器の癌では腹部に血流が集中しています。腹部には、食りの世界、低級霊域とつながっているマニプーラ・チャクラが存在しています。一般に消化器の癌の患者さんの場合、彼らの悩みは食べたいのに食べられないということです。

例えば、わたしの診た患者の例では、胃の出口が詰まっているために、食べれば二三時間のうちには、吐いてしまうということがわかっているにもかかわらず、食べ続けずにはいられないという患者がいました。彼の関心はほとんどが食べることに費やされ、人間の生き方というよりは、低級霊域の住人の生き方に近かったと思われます。彼はもう亡くなってしまいましたが、彼の死ぬ間際の生き方というのは、彼の転生先、低級霊域を象徴していたのだとわたしは考えています。

(司会)自分の来世が心配になってきてしまいました。

(T)来世は死ぬときに血流が集中している部位によって決まり、また電磁場によって血流の集中が起こり得るというのであれば、高い世界に対応するチャクラに電磁場を与えることによって、物理的にポワ(意識の移し変え)することが可能なんじゃないでしょうか。

(MM)そうです。その電磁場の発想をもとにして作り出されたのが、このポワ装置です。しかもその磁場には、尊師のマントラ変調をかけ、前回お話ししたイニシエーションの効果を持たせることにしました。

(A)もともとこのポワ装置の狙いは、わたしたちの尾てい骨に眠っているクンダリニーを覚醒させること、――このクンダリニーが何であるかについては追って研究し、皆さんに発表したいと考えていますが――それをポイントとして開発しました。

で、このポワ装置の役割としては、エネルギーを上昇させること、そして、生体プラズマを生じさせることによってトゥモ、つまり発熱現象を起こすこと、それからもう一つは、わたしのマントラを空間いっぱいに電磁場として満たすことによってナーディーを叩き、そのナーディーの詰まりを取る等の効果を考えています。

◉ポワ装置のシステム

(司会)大変興味深いお話でしたけれども、そのポワ装置について、少し説明願えないでしょうか。

(MM)はい。それについては、実際にこの装置の製作に携わった、聖者U化身成就師に聞いてみましょう。

(U)それでは、今回実験に使ったコイルの説明をします。このコイルは大まかに分けて、直流成分用のコイルと交流成分用のコイルの二重構造のコイルになっていまして、まず外側のコイルなんですけど、この外側の銅パイプ、これが直流成分用のコイルです。この直流成分用のコイルを説明しますと、この材質が銅のパイプでできているんですけど、ここを、この銅のパイプの中は水冷されていまして、電流で約四〇〇アンペア流れています。で、その内側に交流成分用のコイルで、材質がアルミで作った電線でコイルが作ってあります。

で、磁場の強さなんですけど、体全体の部分を覆っているこのコイル、このコイルは大体約一〇〇ガウス強かかるように設計されています。で、この頭の部分のコイルなんですけど、こちらの方のコイルは約五〇〇ガウスかかるように設計されています。

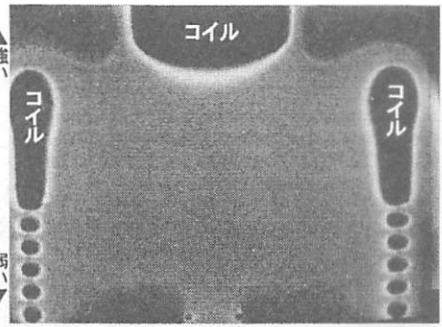
今回の実験に使ったマントラ、電子音はこの内側の方の交流成分用のコイルに、マントラおよび電子音を流して実

験しました。

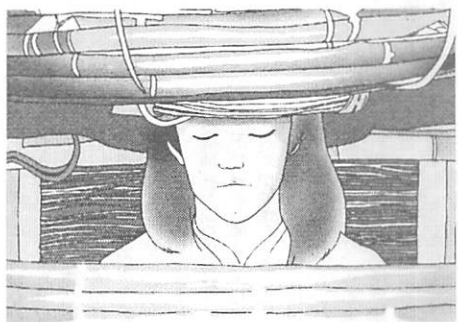
今回作りました装置なんですけど、なぜコイルが二重になっているかというと、交流成分用のコイルだけですと、磁場の方向が上下、その入ってくる信号によって、磁場方向が反転するんですけど、そういうのをなくすために、尊師の指示によりですね、すべて磁場が上方向になるようにするために、直流成分を掛け合わせて、交流成分が加わってもすべて磁場が上になるようにするために、このように二重構造になっています。

(MM)今の説明に少し付け加えると、このポワ装置は前回のアストラル・テレポーターに、このコイルを組み合わせた形になっています。

それでは、このコイルの内部の磁気分布をコンピューター・グラフィックスでお見せしましょう。



コイル内部の磁気分布



このように、上部ほど強い磁場がかかることになっています。

(T)ところで、ポワ装置の設計思想として、上の方ほど磁場が強いのはいいのですが、下の方のコイルの意味がわからないので説明いただきたいのですが。

(A)もともとわたしたちには、霊的センターが七つ存在しています。その霊的センターを順番に説明すると、ムーラダーラ・チャクラ、スヴァディスターナ・チャクラ、マニプーラ・チャクラ、アナハタ・チャクラ、ヴィシュッダ・チャクラ、アージュニャー・チャクラ、そしてサハスラーラ・チャクラの順番です。

この各チャクラは、必ず尾てい骨に存在するムーラダーラ・チャクラを開発しなければ、上位のチャクラを開発することはできません。したがって、まず低部に磁場のコイルが存在するのは、このムーラダーラ・チャクラのエネルギーを活性させ、そして、それを徐々に徐々に上へ誘導することを狙いとして、下にも磁場が存在してるのです。

(T)よくわかりました。

(S)ポワ装置のその他の設計思想として、左回りの上向きの磁場をつくるというのがあったと思いますが、これはどのような発想からそのようになったのでしょうか。特に左回りというのは、物理学的な観点からはよくわからないのですが。

(A)もともとクンダリニーの覚醒には二つのパターンが考えられます。その第一のパターンは密教的なパターンです。この密教的なパターンの場合、クンダリニーは体全体を左回りに上昇し、そして最終的にはサハスラーラ・チャクラへと到達するのです。

第二のパターンは、ヨーガ的クンダリニーの上昇です。これはムーラダーラから一直線に頭頂へと上昇します。しかしまあ実際には、小さな左回りの回転があるのではないかと、わたしは経験的に考えています。したがって、コイルを左回りにしたわけです。

(MM)確かに、わたしも被験者として、このポワ装置に入ってみたんですが、次第にナーディーの下部から振動を伴ったクンダリニーが、詰まりを次第次第に通過しながら上がっていくことがわかりました。ですから、これは尊師の左回りのクンダリニーが、コイルに同期して上がっていくというのと一致していると思います。

(司会)今回は、ポワ装置を使って様々な実験を試みました。

それでは、番組の締めくくりとして、尊師の方から何かコメントをいただけるでしょうか。

◉科学に必要な心の成熟

(A)この人類は、大いなる科学の発展を遂げました。しかし、それらの科学の発展は、わたしたち人類に対して幸福を与えるどころか、生命の危機、あるいは諸々の弊害こそ生じたとはいえ、わたしたちの魂にとって、プラスの要素はほとんど見受けることができなかったのが現状だと思われます。

それは、科学文明の発達に伴って心が成熟しなかったか

らです。そして、この心の成熟した魂の集団の登場によって、この科学文明は人類に大きな福音を与えることとなるでしょう。わたし自体、その一助ができれば最高であると考えています。

ロシアの皆さんは、大変優れた科学を有しています。あなた方の持っている科学が、すべての魂の進化に使われますように。

29. イニシエーションを科学するPART Ⅲ（血圧）

【説法】血圧と、呼吸、瞑想との関係

ロシアの皆さん、こんばんは。麻原彰晃です。

現代の科学と医学の関係、これは科学技術の進歩により、例えばわたしたちの生体内の活動については、かなり理解されてきてるように思われます。そして、この医学の領域において最近特に注目を集めるようになったこと、それは、瞑想と、そして生体内における反応の関係です。

今わたしの生活しているこの日本においても、外的な音、つまり音楽と、それから血圧の関係、あるいは瞑想と血圧の関係等が巷でよく論じられています。しかし、これらのことは経験的にインドのヨーガの文献等を見ると、もう既に今から二千数百年前からいわれていたことなのです。では一体、この血圧と呼吸の関係や、あるいは瞑想の関係についてはどのような見解を宗教では持っているのでしょうか。

もちろん、ここでいう「宗教」とは、わたし自体が実践している〝真理〟を指します。つまり、伝統的なヨーガや仏教の本質的な教えと言ってもいいでしょう。この教えにおいて、例えば、呼吸が静かで、しかもゆっくりと長くなされる場合、わたしたちの血圧は安定するとか、あるいは、わたしたちが深い意識状態へ到達すると血圧は下がるとか、あるいは、わたしたちが呼吸を速く、しかも強く行なうと血圧が上がる、等がデータ的にはっきりと表われています。これはなぜなのでしょうか。

つまり、もともと呼吸というものは、自律神経、これは交感神経と副交感神経に一般的に分けられるわけですが、この神経系の働きと密接に関係をしています。例えばわたしたちが興奮をすると血圧は上昇しますし、逆にわたしたちが落胆をすると血圧は減少します。

これらの点から、もしわたしたちが精神において活発な意識状態、つまり、やる気を出すようなデータをどんどん入れていく、あるいは肉体的にエネルギーを充実させる、例えば、酸素を活発に取り入れ、そして意欲的な意識状態を形成する、等の条件をつくった場合どうなるかと。当然、このときは血圧が上昇するのです。逆に、わたしたちが落胆し、この世に失望し、そして心が沈んだ場合どうなるか。この場合当然血圧は低下することになります。

これらの研究は、あくまでも瞑想について、あるいはヨーガについての一部の研究であると言うことができるでしょう。しかし、これらの小さな断面を積み上げていくことこそ、わたしたちがいかに長く生きることができるのか、いかに素晴らしい健康体であり得るのか等の、この現実的な生活におけるメリットを提供してくれると確信を持っています。そのための一助として、今のわたしたちの研究がこのロシアの皆さんに提供されるならば幸いです。

それではまた、来週。

【対談】

◎イニシエーションの科学的探究

(司会) 今回の「真理探究」は、今までとは少し実験方針が違うということなのですが。

(T) はい。今までの「真理探究」ではオウム真理教の成就者、修行者のうちからランダムに被験者を選び出し、そのステージの高さと実験結果の関係について調べました。その結果、両者には相関関係が認められました。

しかし、今回の実験はイニシエーションに関連しています。このイニシエーションの効果は、個々人の経験の構成、カルマ、あるいは前生からの修行等によって大きく違い、単にステージによっているわけではありません。

(TN) 少しわかりにくいのですが、もう少しわかりやすく説明していただけますか、尊師。

(A) つまり、ここにある修行者がいたとします。で、例えばその修行者が、浄化しなければならないと。例えば心のけがれ、あるいはアストラルのけがれ等があった場合、イニシエーションは、当然それを浄化の方向へ向かうこととなるでしょう。逆に例えばここに修行者がいて、その修行者がエネルギーが非常にない場合は、エネルギーを強めるような形でのイニシエーションの結果となるということが言えると思います。そのような意味において、個々におけるその条件によって結果が変わってくる、ということだね。

(司会) イニシエーションの効果はカルマがわからなければ理解できない、ということなんですね。

(T) そうです。ですから、その個々人のカルマを尊師に分析していただき、それに測定結果を照らし合わせてイニシエーションの効果を検証したいと思っています。

(司会) お話を伺っていると、内容がかなり宗教的な感じがするのですけれども、もう一度、今回の実験の趣旨を尊師にお伺いしたいのですけれども。

(A)宗教的であるか科学的であるかについては、わたしは科学的だと考えています。その理由というのは、その「科学的である」という意味合いは、そのバックボーンにしっかりとした理論が成立しているということが一つと。それから、測定そのものが科学的な測定を行なっているということ。この二つをもって、まあ科学的であると言ってるわけですが。

例えば、まあ、ある人がいたと。で、その人が、他に対してどのような影響を与えるか、ということが結論からいうとイニシエーションの効果となるわけです。例えば普通の人と、例えばまあ、わたしがいたとして、この二人が与える影響が全く同じものであるとするならば、それはわたしとその人との差というものは全くないことになります。

しかし逆に、もしその二人の間で科学的、まあ数値というか、データによって変化があるとするならば、それは何らかの違いがそこに見いだせると。で、まあその違いとは何だろうかということが、この今回のそのイニシエーションの解析における重要なポイントであるとわたしは考えています。

(司会)それでは、今回の実験について説明していただけますか。

(TN)今回は、六人の修行者に被験者になっていただきました。内訳は、成就者二名、出家修行者三名、在家信徒一名です。この六人の被験者に一人ずつ、前半・後半二回に分けて、各々一時間ずつ合計二時間ボワ装置の中に入って座ってもらいました。そして、一回目は単純に電子音を電流にしてコイルに流し、二回目は尊師のマントラを電流にしてコイルに流し、異なった条件の場にしました。今回の実験では、二つの音を対照実験としました。一つは尊師のマントラの音で、もう一つは単調な音の例として電子音を使用しました。

この装置を使うことで、もとの電子音や、尊師のマントラの効果が増幅されると考えてください。この際被験者の血圧・心拍・酸素飽和度・体温・呼吸・脳波の測定を行ないました。このうち呼吸と脳波以外は、一回目、二回目とも実験前、実験開始十五分後、三十分後、四十五分後、六十分後というように、十五分間隔で五回に分けて測定しました。

(司会)電子音というのはどういう意図で使ったんでしょうか？

(TN)わたしたち修行者は、経験上、尊師のマントラは人間にいい影響を与えるもの、上昇させるものと考えています。その音が人間に与える影響を見る一方、比較するものとして、中立的な音で実験することが必要でした。それが電子音です。

(司会)音を電流にして流す、というところが少しイメージしにくいのですけれども。

(T)音というのは、空気の密度の変化が伝わりますけれども、この変化を電圧の変化に変換し、電気的な信号として流すということです。

◎最高血圧と最低血圧

(司会)それで実験結果の方についてはどのようになったのでしょうか。

(V)はい。今回の実験については、測定項目が非常に多く、二回の番組内では紹介できませんので、まず今回は血圧についてお話しさせていただきます。

血圧は、自動血圧計で測定しました。

左手の肘の部分にマンシェットを巻きます。スタートボタンを押すと、マンシェットが自動的に膨らみ血圧を表示します。血圧の表示は最高血圧と最低血圧、平均血圧が得られます。

最高血圧とは、医学用語では収縮期血圧と言い、心臓の収縮力を表わしています。血液は心臓が収縮したときに送り出されます。したがって、このときに血圧が一番高くなるのです。これが最高血圧です。また、最低血圧とは医学用語で拡張期血圧と言い、末梢血管抵抗と関係しています。

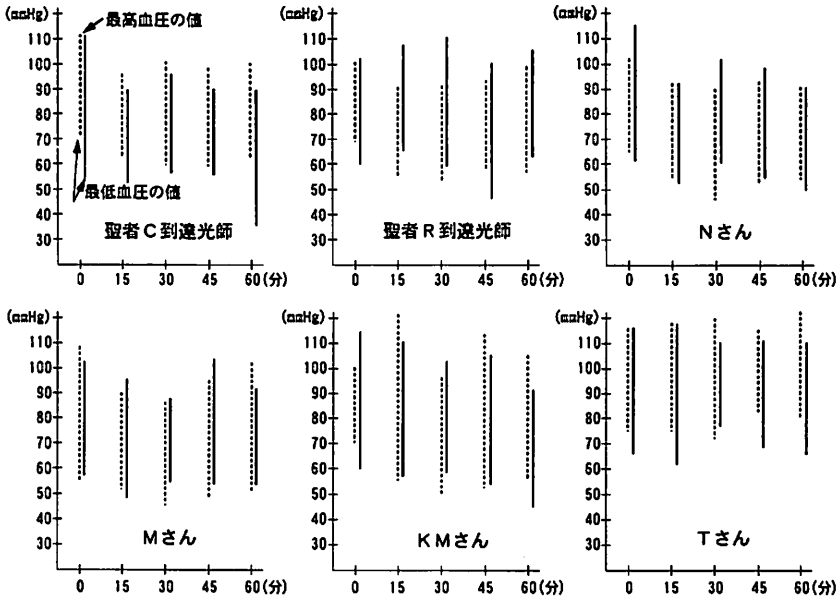
(司会)尊師、オウム真理教の理論では、最高血圧というのはどのような意味合いがあるのでしょうか。

(A)オウム真理教においては、この最高血圧については、ナーディーとエネルギーの関係によって説明しています。つまりエネルギーが強く、ナーディーが詰まっている、管が詰まっている場合、最高血圧は高くなると。そして、逆にエネルギーが弱くて、まあナーディーが詰まっている場合、これは最高血圧は高くならないと。それから次に、エネルギーが強く、ナーディー、つまり管が大きくなっている場合、この場合にも血圧はいったん高くなり、そしてまあ普通になるということだね。

そして、ナーディーと血管の関係については、ま、血管も一つのナーディーの現われであるというふうに考えています。つまり、例えば血流とナーディーの関係を比較した場合、血流も同じように血管に詰まりが生じると。そして、押し出される力が一定の場合、当然その血圧は高くなるわけですし、逆にその血管の詰まりが取れた場合、正常な血圧になると。したがって、七万二千本のナーディーの働きの中のある部分は、この血管の働きと密接に関係している、というのが基本的な理論です。

(V)次に、最低血圧について説明します。最低血圧は、末梢の血管の広がり方によって決まります。末梢血管が収縮してると最低血圧は上がり、開くと最低血圧は下がります。最低血圧が下がるということは、末梢血管が開いているこ

……は、電子音を使用したときの血圧
――は、マントラを使用したときの血圧



とを意味し、ここに血液が溜まり、例えば、脳などの臓器の血流が低下しているということを意味します。

尊師、最低血圧についてはどんな意味合いがあるのでしょうか。

(A)まず、交感神経の興奮と、それから副交感神経の興奮との関係を考えたら理解しやすいわけですが、まず交感神経の興奮がなされている場合、当然末梢の血管は収縮します。逆に、副交感神経の興奮がなされている場合、当然末梢の血管は拡張します。これによって、要するに最低血圧が上昇したり下降したりするわけですが、この交感神経と副交感神経というのは、現実的生活の神経と、それから眠りの神経として分類することができます。

これを真理に照らし合わせた場合、次のことが言及できます。つまり交感神経は、現実的生活の神経の働きであると。そして副交感神経は潜在意識、あるいは深い意識状態に至らせる神経の働きであると言うことができるでしょう。つまり、末梢の血管が拡張し、そして脳に血流が行かなくなる、あるいは心臓に血流が行かなくなる等の働きは、わたしたちを深い瞑想状態へ導き、そして最終的にはサマディへと導くことができるのです。

◉ストレスを与える電子音

(T)ところで、先程の表をご覧ください。この表を見てお気付きの方もいると思いますが、パターンらしきものがあります。まず一回目の単調な電子音の方ですが、出家して日の浅いKMさんと信徒のTさんは、最高血圧が高く、彼ら以外は最高血圧に関しては、いったん下がって上がるというパターンになっています。また最低血圧に関しては、信徒のTさん以外は同様のパターンになっています。また参考までに付け加えますと、このとき悪寒を覚えた被験者が何人もいました。

(司会)この原因については医学的にはどのように分析していらっしゃいますか。

(V)はい。一般に安静にすると最高血圧・最低血圧ともに下がります。実験中は静かに瞑想するわけですから、血圧は当然下がると考えられます。

いったん下がったあと、上がる理由としては、電子音を与えた場合、体調の不良とか悪寒を覚えた人が多かったのですが、一種のストレスがかかったとも考えられます。その影響が長く続いたため、安静の血圧を下げる効果よりも、ストレスの血圧を上げる効果の方が大きくなったため血圧が再び上昇した、と考えれば納得がいきます。つまり、電子音が入ってる場合、この装置自体がストレスを高めている可能性があります。尊師、真理の眼から見て、この現象はいかがでしょうか？

(A)いや、全くそのとおりだと思います。"ストレス効果"

ではないかと思います。で、その理由としては、まずステージの高い人たちは、いったん血圧が下がった、つまりエネルギーがなくなった状態であると。逆に新しい人たちは、もともとナーディーが詰まってるわけですから、ストレスによっていったん精神が興奮することによって、血圧が上がると。そののちに、徐々に徐々にストレス効果によってエネルギーがなくなり、血圧が下がっていくというのはまさにそのとおりだと思います。

例えば例を挙げて説明するならば、ここに小さな器があったとして、その小さな器に対する外的影響を考えた場合、大きな器と比較して、そのストレス効果の出方は当然前者、つまり、修行がまだおぼつかない人たちの方が先に出て当然です。

(T)オウム真理教の考えでは、ナーディーを一種の"容器"と考えております。ここで、修行の進んでいない者にとって、この容器は小さく、しかもその中にあるエネルギーは弱いといった状況になっています。この容器に対して外側からエネルギーを加えますと、内側のエネルギーの粗雑な働きが大きい。そこでいったん、血圧は上昇します。そののち、そこでエネルギーを失い、エネルギーの消耗によって血圧が下降すると。

一方修行の進んでいる者は、この器が大きく、しかももともと持っているエネルギーの量が多い。したがって、外側から粗雑なエネルギーを入れると、エネルギーの低下を引き起こします。これは、被験者の悪寒の体験と一致すると考えられます。その後、生命の恒常性を保持する機能によってもとに戻ろうとし、最後に上昇すると考えられます。

◉マントラの威力

(T)ところで、今回の実験者の被験者には、成就者の女性が二人います。性別が同じで、二人ともクンダリニー・ヨーガの成就者であるのに、この二人の実験結果が対照的で興味深いところがあります。

(司会)どのような点で対照的なのですか。

(T)これは、二回目のマントラの方の実験結果ですが、最高血圧に関してはC師はこの被験者の中では低く、R師は毎回の測定で一〇〇以上あり、この被験者の中では高い値が出ています。

(司会)これはどういった原因によるのでしょうか。

(V)はい。まず、C師に関しては、完全なリラックス状態であったのではないかと思います。具体的に見ていきましょう、グラフをご覧ください。

二回目のマントラの実験では、最高血圧・最低血圧ともに低いのですが、最高血圧に関しては実験開始後十五分からはほぼ一定です。最低血圧に関しては、最後の十五分間で最低血圧が五七から三七まで下がっています。最低血圧が五〇を割ると測定誤差の関係上測り直さなければいけないのですが、結局二回測り直しても、測定ミスがないことが確認されています。さらにこのとき、指尖脈波でも、脈波が非常に拾いにくかったことを確認しています。これは末梢の血流が止まりかけてることを意味していますが、尊師、いかがでしょうか。

(A)いやまさに、そのとおりだと思います。この場合、例えば、温熱五〇度十五分間を平気で、こなすわけだけども、これができるということは明らかに、ナーディーが大きくなければならない。そしてナーディーが大きいということは、他の人と比べて、一般の人と比べて、非常に煩悩が少ないということが言えると思います。で、この煩悩が少ない状態の場合、当然、サマディには入りやすいと。つまり、心が静まり、サマディには入りやすい現象が起きているんではないでしょうか。それによって結局最低血圧が下がり、そして、完全に血流が停止し、サマディの前段階まで入ったということだと思います。

(V)はい。次にR師について、グラフをご覧ください。神秘体験のあった二回目の方が最高血圧が上がっています。

特に、一回目に一〇一だった血圧が下がるならともかく、安静にしているにもかかわらず一一八に上がっています。これは通常では考えられないことです。特殊な状態にあったのではないでしょうか。いかがでしょうか、尊師。

(A)このRの場合は、明らかに、外的にエネルギーが供給されていっている段階であると言うことができると思います。したがって、それが、最高血圧の上昇につながったと。で、まあその例として、それと関連して、例えば自分のエネルギーでない証明としては、体温にあまり変化が見られていないと。ということは明らかに、このボワ装置、およびアストラル・テレポーターから出ているマントラによって、つまり外的なエネルギーを吸収し、おそらくこのときに、彼女自体は意識の高揚みたいなものを経験してるんじゃないかと思いますね。

(V)はい、そのとおりです。

(司会)尊師、なぜ同じクンダリニー・ヨーガの成就者であるのに、このような差があるのでしょうか。

(A)これは、二人が生活している環境にある、ということができると思います。まずCの場合は、最も修行環境のいい富士山のふもとの道場で、修行中心の生活ができているということです。ところが、例えばRの場合、最もエネルギー状態の悪い東京で、しかも多くの信徒さんと、肉体的にも接しながら瞑想指導等を行なわなければならないという条件、これによって、例えばRの場合はナーディーに詰

まりが生じたと。そして、Cの場合には逆に寂静の状態へ至ったと。

ここで、少し説明をしなければ理解できないでしょうから、もう少し説明を加えると、このナーディーの詰まりが取れたのちは、Rも当然寂静の状態に入ったんではないかとわたしは推定します。したがって、Rにとってはこのポワ装置のテレポーターは、時間的に短かったと言うことができるんではないでしょうか。

(T)先程のV師の発言は、相違点中心だったのですが、この二人の結果には類似点もあります。二人とも二回目に一種の神秘体験をしています。また二人とも二回目のマントラの実験のときの方が、一回目よりも調子が良かったと言っていました。実験に立ち会ったV師も、同じように二回目の方が体調が良くなったと言っています。

◎ステージが高いほど影響大

(TN)被験者のステージによって、時間的な違いがあると思いますが、今回の実験結果や体験談を考えると、このポワ装置に尊師のマントラを流した場合は、人体に大きな影響があると予想できるのではないでしょうか。

(司会)それも、ステージが高いほど、顕著に影響が現われるということは言えるんじゃないかと思いますけれども。

(A)まあそれは、オウム真理教の教えにかなってる、と言うことができます。つまり、ステージが高いということは、より表層意識よりも潜在意識で生活をしていると言うことができます。この潜在意識は、アストラル世界とつながっています。そしてこれは幽優位の世界です。そして、それよりもよりステージが高くなると、今度はコーザルとつながります。これは光優位の世界ですが、まあ、電気的なエネルギーをより受けやすいと言うこともできるでしょう。したがって、このポワ装置そのものが音、あるいは、この電気的なエネルギーを使うとするならば、当然成就者に大きな影響を与えることができるはずです。

(司会)残念ながらそろそろお時間のようです。番組の締めくくりとして、尊師の方から何かコメントをいただけるでしょうか。

◎宗教的側面の分析によって正しい結果を

(A)今回のようなイニシエーションについての科学的検討は、もともと、初めに司会のM君も説明したとおり、宗教的側面が存在します。しかしこの宗教的側面も、その宗教的側面の部分を論理的に分析することにより、より科学に近付いた形での検討と、そして正しい結果が得られるのではないかと考えています。

しかし、この部分についてはあくまでも宗教的部分ですから、この番組を見ていらっしゃる方のいろいろな意見を、わたし自体聞いてみたいと考えています。よろしくお願いします。

30. イニシエーションを科学するPARTⅣ
(心拍数)

[説法]宗教と科学の融合の道

◎宗教と科学

ロシアの皆さん、こんばんは。麻原彰晃です。

わたしたちは、それぞれ自分の人生を豊かにするために、あるいは死後の世界を信じて宗教というものを有しています。そうすうと皆さんの中には、

「いや、無神論者という人たちもいるはずだ」

と反論なさるかもしれません。しかし、無神論者というのもまた、これは一つの宗教なのです。つまり、神を信じない、死後の世界を信じないということも、一つの宗教的主張であることには変わりはないのです。したがって、いかなる魂も、心において、あるいは心を反映させた言葉や行動において、宗教というものを有していることは間違いありません。

ところで、この「宗教」というものに対して、もし科学的なメスを入れた場合、一体どのような結果が出るのでしょうか。これについては二つの点から考えなければなりません。まず第一の点は、現代科学の範疇に宗教というものが入るのか。つまり、現代科学のいろいろなセンサー等の機械群で、宗教のすべてが理解できるのかどうか、という点について考慮する必要があるわけです。そして第二の点は、今の計測技術等によって測れるいろいろな内容をどのように検討するのか、という二点に絞ることができるでしょう。

◎現代科学で宗教が理解できるのか

まずこの第一の点については、もともと現代の科学は光以上のスピードというものを規定していません。それは、例えばアインシュタインの相対性理論がそうであるように、それ以上の存在を見いだしていないからです。しかし例えば、わたしを含めた多くの修行者は、それ以上の経験をなしています。

もしそれ以上の経験がないとするならば、例えば死生観、つまり、自分自身が今積み上げている結果、これが未来にどのように反映するのかを、実際に超自然的な視覚や聴覚や、あるいは嗅覚・味覚・触覚といったもので経験することはできないし、またわたしたちの過去世、つまりわたしたちがどうして今この人間として生まれてるのか、あるい

は自分自身の一つ一つの性格の成り立ちが一体何生前に存在するのか、等を科学的に理解することができないのです。

しかし、逆の言い方をすれば、この世の中の規定、つまり、生まれて死ぬまでの間のことについて、ある程度の言及をすることはできるのではないでしょうか。――ま、これが今の科学の限界と言うことができるでしょう。しかし、この今の科学の限界とはいえ、この科学技術を使い、そしてわたしたちの身体に対して、あるいはわたしたちの心に対して、どのような形で瞑想が、そして宗教というものが影響を与えるのかということを検討することは、わたしたちに決して不利益を被らせるわけではありません。いや、それどころか、利益を被らせると言った方がいいでしょう。

なぜならば現代は、もともと個人主義というものを土台として形成されています。この個人主義というものは、例えば二億人いれば、二億人の考え方があると言っていいでしょう。その場合、その二億人の考え方に立脚した二億人の宗教がある場合どうなるかと。当然、この中で人間を堕落させる、つまり人間を無智にする考え方を根本とした宗教と、それから逆に、人間を智的に向上させることを根本とした宗教の二つに分かれることが考えられるのではないでしょうか。

そしてこの人類がもし前者を選択するとするならば、それは堕落の道を歩くことになりますし、逆に後者を選択するとするならば、それはわたしたちがより高い人類を形成し、そして未来については明るい希望の光というものが見えてくるように思われます。そしてそれらを、何をもって前者とするのか、あるいは何をもって後者とするのかは、もちろん宗教理論、つまりディベート等によって論議を戦わせることも必要でしょうが、それよりも客観的な数値、つまり科学的データというものを根本として、その部分を測ることこそが、わたしはただ一つ、今の人類に残された正しい道の選択のように思われるわけです。

◉計測技術が与える利益

では次に、第三番目の点、つまり計測がどのような形でわたしたちに利益を与えるのかについて、検討してみたいと思います。現代は、科学の進歩、あるいは基礎医学の進歩等によって、例えば血圧を低下させた場合、人間の意識というものが非常に怠慢になるだとか、あるいは血圧が亢進するのは交感神経系と非常に関係があり、それは活発な意識活動を形成するんだ、だとかいう肉体と精神の関係については、かなり研究が進んできてるように思われます。もちろんこれは「解脱」という宗教の最終的な目的から考えると低次元の研究ではあるわけですが、しかしわたしたちが生まれ、そして死にゆく間において、これらの研究はわたしたちを生命活動において一定のレベルに安定させるためには、大きな役割を演じていると思われます。

これらの点から考えると、例えば少なくとも宗教活動がわたしたちの日々の生活において利益を与えてるのか、あるいは不利益を与えてるのか、――ここでいう「利益」、あるいは「不利益」というものは、短い目で見た利益・不利益という点からしか論じていませんが、その部分については計測その他によって非常にわかりやすくわたしたちにデータとして提供されるはずです。

そしてこのデータを検討することによって、何をどのように改善するならばどうなるのか。例えば、呼吸の仕方等によって血圧を安定させるとか、あるいは瞑想によって高血圧が治るとか、ま、いろいろデータとしてあるわけですが、このような現実に即した瞑想の効果というものをわたしたちは得ることができるのです。

◉管・風・心滴の影響

では一体、これを精神的な科学、つまり神秘的な科学の面から見たら、何によってそのような変化がなされているのでしょうか。これは、「管・風・心滴」と呼ばれる三つの要素を検討すれば、わたしたちに、よりわかりやすい、精神と、そして肉体との関連について示唆を与えてくれるように思われます。

この「管」とは、もともとわたしたちが視覚で見ることのできない、しかし、身体内に存在している七万二千本の管のことを指します。この管は加圧されたり、あるいは減圧され、真空状態になったりしたとしても耐えられるような構成でできているといわれています。「風」とは何かというと、その中を流れているエネルギーのことを指します。そして「心滴」とは、これは、そのエネルギーによって上下するわたしたちの意識のことを指すわけです。

この管・風・心滴の影響を顕著に受けるのは、成就者です。「成就者」とはわたしたちの根源的エネルギーの上台、つまりクンダリニーを覚醒させた、そしてそのエネルギーが一定の段階に到達し、意識がそれに乗っかり、人間よりも高い意識状態を形成している魂と言うことができるでしょう。

この魂に対して、外的なある一定のヴァイブレーションを供給すると二つの現象が生じます。それはまず第一には、エネルギーが強くなるということです。このとき成就者の血圧は亢進し、しかし精神的充実と高揚感、そして活発な――例えば大乗の修行者の場合、救済に対する意欲、あるいは普通の修行者の場合、修行に対する意欲等が高揚します。

そしてこの段階が過ぎると、管の大きさが大きくなり、エネルギーの流れが、つまり生成されたエネルギーが管を通る場合、その管に対するエネルギーの量が若干不足気味となり、しかし管が大きくなっている分だけ精神は落ち着き、血圧が下がるといったような現象が生じます。これらの二つの現象は何を表わすのか。それは、まずわたしたちが進化する場合、必ず強いエネルギー状態になり、そして管が大きくなり、それによってわたしたちの心が寂静へと導かれることを表わしているのです。

これらの状態から、わたしたちは次のことを断言できると思います。つまり、修行者が修行する場合、第一歩はエネルギーを強めることである。そして、次の段階で管が大きくなり、エネルギーが弱められたかのように見える。しかしそのときには既に、その管が大きくなり、エネルギーが全体的には強められてる結果、わたしたちの意識は少しずつ高い世界の経験を始め、心はどんどん静まるのであると。つまり、単なる道徳的な教えによって心を静めるのではなく、正しい修行を実践するならば、わたしたちは自然と本当の意味での寂静を経験することができるのです。

さあ、あなたもこの管・風・心滴の経験をぜひともしてください。

【対談】

◉心拍数について

(司会)今回も前回に引き続き、最高のイニシエーションの一つであるポワ装置を用いた実験について考察を進めていきたいと思います。

前回は血圧の変化を見ていって、興味深い結論が得られたのですけれども、ほかの項目についてはどうなんでしょうか。

(V)はい。では、今日は実験項目の一つである心拍数について見ていきましょう。

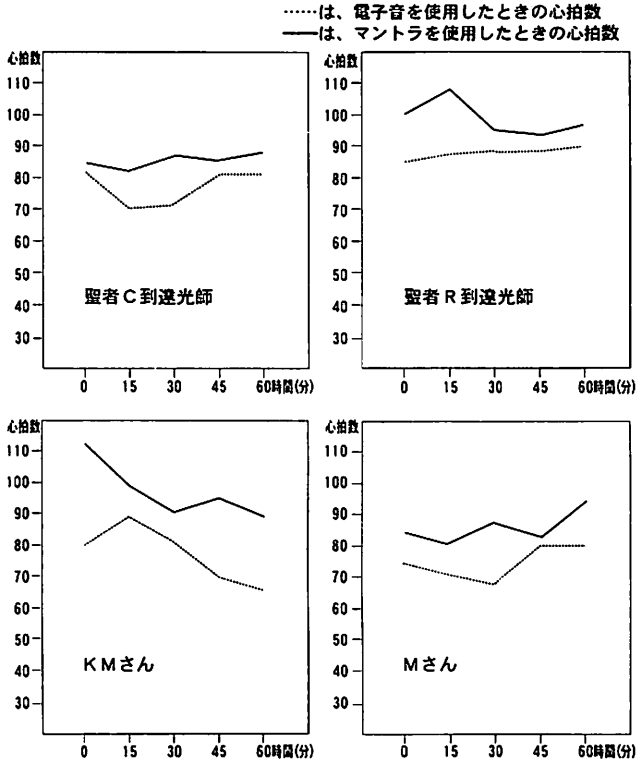
まず測定方法から申し上げます。左手の親指に、パルスオキシメーターを付けます。これは、指先でのヘモグロビンとオキシヘモグロビンの流量を体外から検出する装置です。ここから脈波と呼ばれる波形が出て、脈拍数を数えることができます。

(司会)この心拍数は、医学的にはどのような意味があるのでしょうか。

(V)はい。心拍数とは、心臓が一分間に打つ回数を言います。例えば運動したときとか、ストレスがかかったときに心拍数は上がります。

(TN)では、次に図をご覧ください。

まず、全体的な傾向から見ていくことにしましょう。左の図は、被験者C師の心拍変化のグラフです。破線は二回目の不快な電子音、実線は二回目の尊師のマントラを使用した場合の測定点です。右の図はR師のグラフです。これらを見てわかることは、この二人のクンダリニー・ヨーガの成就者について見ると、二回目の尊師のマントラを使用した場合の方が、二回目の電子音を用いたときに比べて心拍



数が常に多いということです。

また、次のグラフをご覧ください。左はKMさんのグラフ、右はMさんのグラフです。今度は、逆にマントラ波の実験のときは、電子音の実験時よりも心拍数が常に少なくなっています。

(司会)この結果は医学的にはどのような意味合いがあるのでしょうか。

(V)はい。クンダリニー・ヨーガの成就者は、マントラで心拍が上がり、比較的修行歴の浅いKMさんとMさんは、単純な電子音を用いた実験で心拍が上がったことになります。電子音のためにストレスがかかり、心拍が上がるというのは普通の、一般の人の反応として納得ができますが、成就者だけがマントラの音を聞いて心拍が上がるのは、現代医学では説明しづらいですね。他の者たちは、マントラと電子音で自覚症状に大差がなかったのに比べ、クンダリニー・ヨーガの成就者は電子音とマントラでは、マントラの方が明らかに調子が良くなったと直後に言っていましたが、これは何か関係があるのでしょうか、尊師。

(A)この心拍数が、なぜ成就者が高くなるかというと、それは呼吸との関係だと考えることができます。つまりサマディに入る前、また生命活動は行なわれています。生命活動が行なわれているということは、呼吸回数が減少するときに、当然心拍数を多くすることによって、つまり、拍動の回数を多くすることによって、体中の生命活動を維持する働きがあるわけです。したがって、Rのような体験談が出てきているものと思われます。

逆に、まだ修行歴の浅い場合は、この電子音によるストレスによって心拍数が増大した、と考えることができるでしょう。

◉神秘体験をもたらすマントラ

(T)では、個人の実験結果の分析に入ります。

二回目のマントラを用いた実験についての二人の成就者のグラフをよく見てみると、実験中、C師が八二前後の心拍数で安定していたのに対し、R師の場合、実験開始直前で一〇〇と高かった心拍数が十五分でさらに上がり、一〇七にまで上昇しています。この一〇七という値は二回目のマントラを用いた実験では、六人中最高になっています。参考までに、体験談も伺っていますのでちょっと聞いてみましょう。

(R)二回目の方なんですけど、気が下がりまして頭がくらくらしてしまって、体が芯の方から冷えてガタガタ震えるという状態でした。二回目の方はすぐ気が上がって足から体が固定されてきまして、回数を重ねることに体が固定されてしまう時間が短くなるというか体が固定された後、光がうねっているようにアージュニアー・チャクラから見えて非常に呼吸も微弱になりました。この状態は長期の修行に入らなければ今まで経験できなかったけれど、この装置に入りましたら五分とかからないうちにこの状態まで引き上がってしまいました。そのときにはクンバカやバンダをしていませんけれど、この装置だけの力でそこまで数分で至ることができるという違いがあると思います。

(C)一度目のときは入って中にいる間に、すごく首のあたりにエネルギーが詰まるような感じがして重いような感じがしたんですね。体温もだんだん下がってきて体が冷える感じがしました。全体的にエネルギーが下がっているような感じがしました。二度目のときの尊師のマントラのときは入ってすぐ体が上に引っ張られるような感じがして体にトウモが起こって熱くなりました。実際に体温の上昇があって視界が明るくなってきて、蓮華座を組んでいても楽の状態で何時間でも組んでいられる状態になりました。

(司会)ちょっとわかりにくくなってきましたので、要点をまとめていただけますか。

(T)要するに、イニシエーション中のC師の心拍は八〇台で安定していたのに対し、R師の場合、一〇七まで上昇しました。またR師の方が、C師よりも平均心拍数が一〇以上も多かったということです。また尊師のマントラの場合、電子音と違って、両方の師とも神秘体験をしたと言っていました。

(TN)一方、二回目の電子音を用いた実験での心拍数ですが、十五分から六十分にかけて、C師の平均は七五・三で、R師は八七・八です。

(司会)この測定結果と上に述べた体験談、そして、被験者の条件から先程の実験結果を解釈していただけないでしょうか。

(A)まず、R師の場合、わたしのマントラに対する感応性がCよりも高い、ということが言えると思います。次に、呼吸回数の減少も、自覚的所見しかわかりませんが、Rの方が少なくなり、停止寸前だったという話を聞いていますので、これはまさに教義どおり、つまり、呼吸停止の前に心臓が心拍数を多くすることによって生命の維持活動を行なっていたということが言えると思います。

逆にCの場合、一定の感受性とともに、ゆっくりゆっくりと心が静まり、そして、前回の血圧との関係から見ると、まあサマディに入っていく段階であったということが言えるんじゃないでしょうか。

(TN)ところで今回の実験で、尊師のマントラを使用したときには被験者が神秘的な経験をし、単純な電子音を使用

したときには調子を崩した人が出ましたが、これは大変興味深いことだと思います。また神秘体験をしたのは、クンダリニー・ヨーガの成就者でした。

(T)そうですね。尊師のマントラを使用した場合のみ、神秘体験があったことを考えると、被験者の神秘体験を誘発したのはポワ装置というよりも、尊師のマントラにあると思われます。

(A)もともと、このような科学的な機械は、その源のデータが勝負である、と言うことができるでしょう。したがって、これはインド、チベット等の古典的伝統を有する仏教やヨーガの系統においても、グルの選択が成就のすべてのカギである、といわれています。それは何を意味するのかというと、そのグルの発する光、あるいはヴァイブレーション、あるいは声の周波数、その他がその弟子たちのステージを引き上げるんだ、ということを裏付けてるものだと思われます。そして、この前回・今回の結果は、それを裏付けたものと言い切ることができるでしょう。

◉心拍数の意味合い

(TN)尊師、一つ質問があるのですが。今回の実験の中で、心拍数に関しては全体的に一般の平均よりかなり高く、逆に血圧に関しては一般の平均よりかなり低いのですが、これはどういうことを意味してるのでしょうか？

(A)V師、どう思いますか？

(V)はい。一般に血圧に関しても心拍に関しても、一般人の血圧ないし心拍が正常値だとされていますが、それに関しては疑問のあるところです。といいますのは、今回の被験者は、オウム真理教の信徒であり、あるいは出家修行者であるわけですから、出家修行者、あるいはオウム真理教の信徒には、それなりの正常値、あるいは平均値があってもおかしくはないんじゃないかなと。こう考えますが、いかがでしょうか、尊師。

(A)そうだね、例えばこれは心拍数にしろ、あるいは血圧にしろ、修行の段階によって実際に変わります。これはある例ですが、修行を非常に一生懸命行なってた信徒さんが、血圧が上がったと。しかしそのとき非常にエネルギッシュであったと。それを、現代医学のドクターが注意をして血圧を下げたと。その瞬間に無気力になり病的になった、という話を聞いています。こういう例は、わたしの信徒、あるいは弟子たちのいろいろな話において枚挙に暇がありません。したがって、血圧にしろ、あるいは心拍にしろ、すべては心の働きによって、あるいはいろいろな条件によって成立してるんだと考えたらいいんじゃないでしょうか。

(V)はい、どうもありがとうございました。

(司会)今回の実験では、単に宗教を科学するにとどまらず、より積極的に科学を宗教の分野に取り入れていこうとする姿勢が表われていますね。ところで、今回ステージの高い人ほど、このイニシエーションを受けた効果が高かったようですが、これはどのような理由によるのでしょうか。

(A)いや、効果が高かったというのは、正しくはないと思います。つまり、まだ修行をしていない人たちは、その内側の要素がこの現象界の肉体に現われる影響が弱いと考えるべきだと思います。

これについては仏典を引用しましょう。仏典の中にイニシエーションを受ける場合、その種子を植えるんだ、と表現しています。種子を植えるということは、ステージが高いということは、既にその種子が一つの形、例えば木になったり、あるいは花になったりするわけですが、そのような状態として現われていると。しかし、まだステージの低い人は、種子のまま深い意識状態に根付かされている、と考えたらいいんじゃないかと思います。

(司会)残念ですが、そろそろお時間のようです。番組の締めくくりとして尊師の方から何かコメントをいただけないでしょうか。

◉より幸福に生きるために

(A)わたしたちは、この世に生きています。それは正しい。しかしわたしたちが、また死ぬことも正しい。そして、この世をどのように生きたら、より幸福になるのか、そして、この世をどのように生きたら次の世界へ正しく移行することができるのか、これを考え続け、そして研究し、実験し続けていくのがこの「真理探究」だと思います。したがって皆さんの意見、あるいは質問をお待ちしています。

31. イニシエーションを科学するPARTV
(体温)

[説法]密教の特徴とプロセス

◉二つの密教――ヒンドゥーイズムと仏教

皆さんこんばんは、麻原彰晃です。

皆さんは、生命について、どのような見解をお持ちですか？

この「生命」について、徹底的に経験科学的に検討した教え、これが密教です。

この「密教」には、二つのタイプの密教があります。その第一のタイプはヒンドゥーイズムにのっとった密教、つまりヒンドゥー教を土台とした密教です。そして、第二のタイプは仏教を土台とした密教です。これらの二つの密教の共通性と、そして違いについて、これから少し考えてみま

しょう。

まず、これらの共通性は何かというと、それぞれ、今生じさせている、つまりこの世での身体である自分自身の身体を神々の身体へと観想して変えること、そして、次に、その神々の状態に完全に自分自身の心を定着させ、神々の要素、つまり、この人間の世界からはるかに超越した高い世界への要素を自分のものとして生じさせ、次の段階でその経験を完全にし、そして、それを終了すると。これが、ヒンドゥー密教や、あるいは仏教を土台とした密教の特徴です。

では違いは何でしょうか。違いはまずヒンドゥー密教における特徴は、この人間の世界より高い世界へ生まれること。つまり、欲望を満足させながら、高い世界へより多くの欲望を満足できるような状態を目的として修行すること、これがヒンドゥー密教の特徴と言うことができます。

では仏教を土台とした密教は何を目的としているのでしょうか。それは、この密教体系を活用することにより、いち早くすべての経験をし、そしてすべての魂を利する。つまり、偉大なる四つの心の覚醒を土台としているのです。

ではなぜ、この二つに違いが存在するのでしょうか。それは、修行となる土台の心の働きが違うと言うことができます。一つは、この苦しみの世界から脱出し、そして幸福だけの世界へ生まれ変わろうとする姿勢、これがヒンドゥー密教です。そしてもう一つは、この苦しみの世界に存在し、そして自分自身が苦しんでいるのと同じように、すべての魂が苦しんでるんだということを認識し、そして、そのすべての魂をこの苦しみの世界から完全に解放させることを目的とする――つまり、四つの偉大なる心の覚醒をポイントとしているのです。

◉密教と顕教

では、密教と顕教の違いは何でしょうか。

まず、密教とは、生成のプロセスとそして完成のプロセスという二つのプロセスから成り立ちます。顕教とはどうかというと、これは蓄積の道という形で表現されます。

つまり、密教においては、その要素を既に有している生命体、魂と自分自身の意識をまず合一させる。つまり、その形を獲得する。次の段階で、その生命体に自分自身が成り切り、そして、完全にそこから心の本質へ到達する。つまり、その生命体の心の本質へ次は心を移し変える。これが、密教の生成のプロセスと、それから完成のプロセスと言うことができます。

では顕教の「蓄積の道」とは一体何でしょうか。これは、善・徳、そして真理の法則、寂静というものをひたすら記憶し実践し、記憶し実践し、これを繰り返し、それによって最終的にはブッダへの境地へと到達する道ということになります。

◉密教の生成と完成のプロセス

ではこの密教の生成のプロセス、および完成のプロセスについて説明しましょう。

もともとわたしたちの身体には、七万二千本の管が存在しています。そして、この管の最も大切なものの三つ――それが、右の「太陽の気道」、そして中央の「わたしたちの煩悩を完全に解放する気道」、そして左の「月の気道」です。これら三つの気道に、まず外的〝風〟、つまり呼吸のヴァイブレーション、あるいは秘密のマントラのヴァイブレーションを合わせることにより、そのナーディーを――ここで言う「ナーディー」とは管のことを指すわけですが――その管を少しずつ振動させ、浄化し、そして、左の気道にしろ、あるいは右の気道にしろ、中央の解放の道へといざなう。これが密教の生成の道における段階と言うことができるでしょう。

そして、中央管に入った外的風は内的風へと変化し、そしてわたしたちの意識は、この中央管の下の世界から、徐々に徐々に上の世界の経験を行ない、そして上の世界から、より中心的な気道へと移行し、そしてこのサムサーラのすべて、つまり欲六界のすべてを経験します。そして、この欲六界のすべてを経験したのち、その構成要素の原因・条件・結果を経験的に悟り得る。これが、密教のすべてであると言うことができるでしょう。

したがって、今述べたのは中心的最も簡略的な説明ですが、これらを達成するためには、一つの条件が必要となります。それは、先程述べた外的風、あるいは秘密のマントラによってナーディーを振動させるとき、内側の熱が発生しなければならないということです。そして、これを「トゥモ」といいます。「トゥモ」とは何かというと〝粗雑なものを最高のものへ変える〟という意味です。

そしてこの〝粗雑なものを最高のものへ変える〟実践を熱によって行なうことにより、わたしたちは、この人間の世界で経験することのできない、より崇高な意識状態を経験することができるのです。

さあ、あなたも、もし時間がおありになるなら、この素晴らしいタントラ・ヴァジラヤーナ（＊注7）の道を実践してみてはいかがでしょうか。

＊注7　タントラ・ヴァジラヤーナ：別巻の注釈参照のこと。

【対談】

◉重要な意味を表わす体温

(司会)それでは、今回も前回に引き続き、イニシエーションの一つであるボワ装置を用いた実験について考察を深めていきたいと考えています。

(T)前回までは、その実験の際の被験者の血圧、そして心拍についての結果をお知らせしました。実はこの際、同じ時間間隔で体温も測っておりますので、今回はそれを紹介いたします。

(司会)ところで聖者K到達光師にお伺いしたいのですけれども、通常体温が高い、あるいは体温が低い、そして体温が変化する、といったようなことには、医学的にはどのような意味があるのでしょうか。

(K)体温は、一般には体内部での重要臓器のある場所の温度というふうに表わせます。一般には「核温度」というふうにいわれてますけれども、それは熱の産生ですとか、あるいは放散というのが平衡に保たれて、ある範囲で一定の範囲に保たれるというふうになっています。一定の範囲で維持されるというのはどういうことかというと、体内でのエネルギー代謝がよく維持されているということを意味します。

今回の場合のように、体温の上昇・下降が生理的範囲内でのものであるならば、体内のエネルギー代謝の亢進あるいは鎮静を、その上下というのは表わしているというふうに考えていいと思います。

(司会)尊師、同じ質問についてですが、仏教あるいはヨーガの見地では、どのようになるのでしょうか。

(A)この「体温」というのは、仏教あるいは密教においては、非常に重要な意味を表わしています。

まず、仏教的見地からいくと、もともと小乗仏教、つまり自分自身がブッダの境地へ到達するためには、熱の克服が必要である。つまり、わたしたちがいろいろな煩悩を生じさせるとき、そこには多くの熱が発生すると。そして、その多くの熱の発生、これを完全に止めてしまい、いかなる状態においても熱を発生させなくする状態をつくること、これが小乗仏教における阿羅漢の状態であると言うことができます。

したがって、小乗仏教の最終段階である寂静、この寂静イコール熱の全くない状態、つまり低体温の状態から、熱が完全に外界の温度と平衡に達する状態、この状態をもってサマディとなし、そして本当に生命維持活動に最低限必要な熱の状態をもって、阿羅漢の境地となします。

次に密教の場合は、全く逆のプロセスをとります。つまり、多くの喜びを経験するための条件とは何かというと、それは、多くのエネルギーの代謝であると。このエネルギーを発生させる源、これは、当然瞑想という条件があるわけですから、この人間の意識状態ではなく、神々の意識状態に至ることにより、より多くの欲望をまず達成できるような状態をつくり上げるわけです。

この意識状態を形成する方法、これが、まあマントラを唱えるとか、特殊な呼吸法を行なうとか、特殊な観想を行なうとかあるわけですが、それによって、わたしたちは通常考えられないような高い温度へと、この肉体の体温を上昇させることになるわけです。

したがって、瞑想上に生じる体温の上昇と、あるいは瞑想上に生じる体温の下降というのは、このような、つまり、体温の上昇は、わたしたちの徳の顕現化、つまりわたしたちが神々へ至るための条件ということになりますし、また逆に体温の下降は、わたしたちの心が完全に静まり、そしてこの輪廻から脱却するということにつながるわけです。

◉修行経験によって変化する体温

(司会)ありがとうございました。それで、実験結果はどうなったのでしょうか。

(T)はい。では、実験中の体温の変化について説明いたします。図をご覧ください。これらは、一回目の単純な電子音を使用した場合の結果と、二回目の尊師のマントラ音の場合の結果をグラフにしたものです。一回目の実験の方は破線、二回目の方は実線で表わされています。

(司会)これらのグラフですが、どのように分析できるのでしょうか。

(S)そうですね。気温に比べて、かなり薄着を指定しましたから、体温が下がる傾向にある人については、合理的な説明が付けられます。しかし、途中で体温が上昇した人もかなりいました。これは、ボワ装置の影響によるものと言っていいのではないでしょうか。

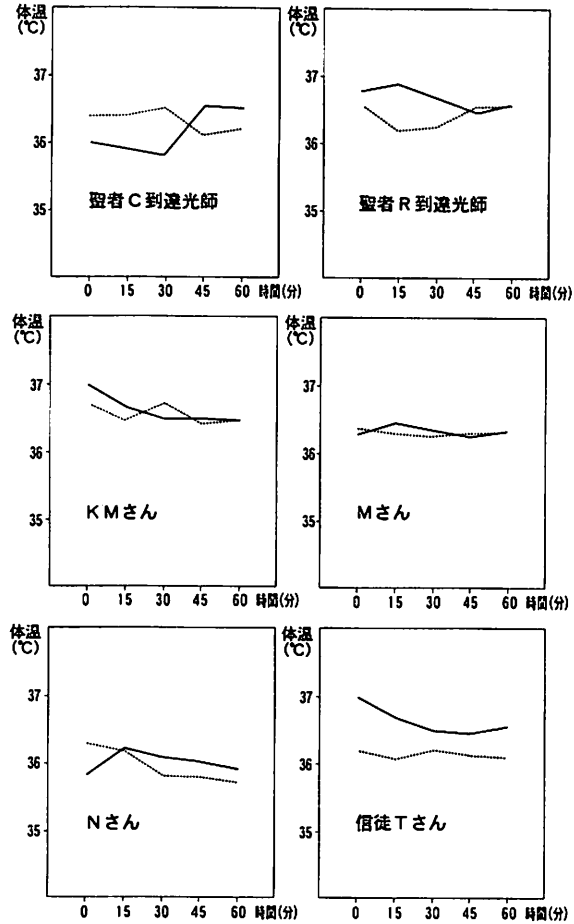
まず言えることは、単純な電子音を使用した実験と尊師のマントラ音を使用した実験とで、体温の変化の様子が大きく異なっていた人と、あまり違いのなかった人がいることが挙げられます。

(T)では、まず初めにボワ装置の実験で、電子音とマントラの場合とで、体温の変化に差がなかったグループ、Mさん、KMさんの場合から見ていきましょう。

まずMさんのグラフです。一回目、二回目ともほとんど体温変化は見られません。二回の体温がほぼ一致していると言えると思います。ただ二回目のマントラ音の実験では、実験開始十五分後、体温が若干上昇しています。これに関して尊師、何かコメントいただけますか。

(A)これは、M君がマントラ修行、つまりタントラヤーナ

……は、電子音を使用したときの体温
——は、マントラを使用したときの体温



（T）なるほどわかりました。

次はKMさんの場合です。図をご覧ください。

この方の場合、体温自体はある程度上下いたしますが、一回目・二回目で差はほとんどありません。その点では先程のMさんと同じです。

また、MさんとNさんとは異なり、尊師のマントラ音を使用した二回目の実験では体温は下がり続け、単純な電子音の場合では、体温は、実験開始後三十分後の場合のみ、やや高い値を示しています。このグラフをご覧ください。実はこの実験開始三十分後の時点では、血圧・心拍とも前後の時間と比べて下がっています。

尊師、これに関してはいかがでしょうか。

（A）KMさんの場合は、わたしの……。

（T）尊師のマントラの場合は、体温は単調に下がっています。

（A）これは、要するに彼女のもともとの実践の土台が、煩悩捨断に重きを置かれていますから、わたしのマントラ、つまり声に対する反応というものは、煩悩捨断の方向に向かうと。となるとどうなるかというと、彼女の、当然体温は減少する方向へと向かいます。で、逆に、三十分後に体温が、電子音の場合上昇してるわけだよね？

（T）はい、電子音の場合は体温は……。

（A）だよね。

（T）はい。

（A）これは、心拍数・血圧の低下と関連して、非常に重要なことだが、生命維持活動として、体温の上昇があったんではないかとわたしは見てるわけだけども、K師、どうですか？

（＊注8）の基本的な修行を行なっていることを表わしている、と言うことができると思います。しかし、まだ、それほど激しい、成就へ至るような修行の体験がないと。というのは、わたしたちの経験というものは面白いもので、例えばわたしたちが無意識に、ナイフやフォークを使うことができるのも、それは、経験を何度も何度も積んでいるうちに、それが自然と潜在意識に根付き、自然に使えるようになるわけです。

それと同じように、例えばわたしたちがもしマントラ修行によって体が変化する、体温の上昇が例えば生じる、等の経験を何度も何度も繰り返しているうちに、わたしたちは、マントラが聞こえるだけで体温の上昇を起こすことができるようになるわけです。したがってM君の場合、十五分後に若干の体温の上昇があったということは、その前兆、つまり種子が存在するということが言えるのではないだろうか。

＊注8　タントラヤーナ：別巻の注釈参照のこと。

(K) どこまで下がったかということにもよりますけれども、そういう可能性は非常にあると思いますけれども。

(A)特に、わたしが聞きたいのは、医学的に、自律神経のバランスを電子音で崩して、それによって体温の上昇、逆に血圧・心拍数の減少につながってるんではないかと思うけど、どうだろうか。

(K)この場合の電子音は一定のリズムで聞こえてきますので、それはいわゆる麻酔的な効果があると。それは結局は、副交感神経を刺激して血圧・脈拍を低いレベルに保つと。しかしながら金属音自体というのは、いわゆる大脳皮質に対してはストレスというふうに普通の人は働きますので、大脳皮質がそれをストレスと感じて一時的に体温を上げる、というような機転が起きたんだというふうに理解することができると思います。

(T)次にボワ装置に入った一回目・二回目で、大きな変化があった方を見ていきましょう。C師、R師、信徒のTさんの三名です。図をご覧ください。

(司会)なるほど、先程の二人と比較すると、一回目と二回目の変化の仕方が顕著に現われていますね。

(S)そうですね。ところが、信徒のTさんのグラフをもう一度ご覧ください。

信徒のTさんの場合、一回目と二回目の実験のスタートの時点で、体温が大きく異なっていますが、実験開始後の体温の変化の仕方は、どちらも全体的には単調に下がっており、あまり違いがないんです。つまり、彼の体温の違いは、ボワ装置によるものではなく、一回目と二回目の実験の間に何かがあったからだと考えられます。

(司会)ということは、結局信徒のTさんというのは、むしろ体温の変化の仕方のなかったグループに含めるべきだ、ということなんでしょうか。

(S)そのとおりです。グラフをご覧になればわかると思いますが、彼のグラフはスタート地点が違うだけで、形は綺麗に重なります。つまり、二回の実験ともボワ装置の影響は同じであったけれども、スタートの条件だけが違っていたと考えるのが自然です。

ですから、ボワ装置の磁場を電子音にするか、尊師のマントラ音にするかによって、体温に大きな相違があった被験者は、C師とR師の二人のクンダリニー・ヨーガの成就者だけであったと言ってもよいのではないでしょうか。

(司会)尊師、これについてはどのようにお考えになるのでしょうか。

(A)あ、全く同じ意見です。はい。

(T)では次に、Nさんのグラフです。ご覧ください。

彼のグラフは、ある程度一回目・二回目で差があります。しかし、成就者の方ほどの差はない。つまり、ほとんど差がなかったMさんと、大きく差があったC師の中間的なグラフと言えます。

単純な電子音の場合、体温は単調に下がっており、これは室温が約二八度と体温より低い環境で、静かに座っていたことを考えると自然な反応と考えられます。しかし、尊師のマントラ音を使った実験では実験開始十五分後、いったん上昇し、その後下がり続けます。これはボワ装置の影響とも考えられますが、尊師はどのように考えられますか。

(A)N君の例だね?

(T)はい、そうです。

(A)まさにボワ装置の影響だと考えていいと思います。ただ、まだ精神集中の仕方が低いんじゃないだろうか。つまり、彼の場合、体験的にも、もうかなりの段階までの体験をしてるわけだが、まだクンダリニーの成就までは行ってないというのは、まだこのマントラと、それから然との関係を見てもわかるとおり、集中がもう少し足りない。つまり、肉体に変化をさせるだけの集中にまだ至っていない、ということが言えると思います。

(T)なるほど。

(S)では再び二回の実験で体温の変化に大きな差のあった二人の成就者について分析を続けていきたいと思います。

(司会)お願いします。

(S)はい。では、この二人のクンダリニー・ヨーガの成就者の体温変化のグラフを比較してみましょう。図をご覧ください。破線は単純な電子音を使用した二回目の実験の際の体温変化、実線は尊師のマントラ音を使用した二回目の実験の際の体温変化を表わしています。T師とR師では破線と実線の折れ線の位置が逆転しています。

つまり、C師の場合、二回目のマントラのときの上昇の度合いが大きく、R師の場合、逆に二回目の単純な電子音のときに体温が上昇しています。そういった意味でこの二人の温度変化は対照的です。

(K)医学的には、体温が上昇する原因というのはいろいろあるのですけれども、この場合には、おそらく反射的な機転が働いた、つまり交感神経の緊張などによって、アドレナリン、ノルアドレナリンの分泌が増加した、あるいは皮膚の血管の収縮が起こったというようなことが考えられると思います。

(A)確かに、Kの言うとおり、このCの体温上昇は、交感神経系に依存するものと考えて正しいと思います。これはわたし自体の体験でも言えることですが、例えばエンパワーメント等を行なったのち、トウモの服組を行なうと。そうすると体温が上昇すると。そして、ナーディーが詰まっている場合、例えば体中に独特の痙攣が走る、ということ

があります。

この痙攣は、明らかに交感神経系の働きによって生じたものである。つまり、病的な痙攣と非常に近い経験を、わたしは何度かしたことがあります。したがって、マントラの効果によって、その交感神経が興奮すると。そして、それによって体温上昇がしたものであると考えていいと思います。

では、この交感神経系の興奮というものは、わたしたちに利益を与えるのか、という問題について次は考えなければならない。もともと密教修行というのは、この肉体そのものを、より大きな刺激の領域において対応できるようにつくり変えていく技法である、と言い換えることができます。したがって、交感神経系の興奮による体温上昇、これは一般的には、五〇度、六〇度といったような、想像もつかないような体温上昇まで至るわけですが、そういう状態を形成すること、そして、逆に今度は、副交感神経の働きをより活性化することによって、全く死人のような状態、死人の体温の状態までもっていくこと、これを自在に経験し、そして最終的には、この交感神経・副交感神経を完全に操れる状態までつくり上げていくという意味において、このポワ装置の働きによって、C師の体温上昇が生じたということは、大きな意味合いがあるのではないかと思われます。(K)実はこの二人については、血圧を加味して比較しても、対照的であるということがわかっています。

もう一度、先程の図をご覧ください。これはC師の二回目の実験結果なのですが、三十分後まで下がり続け、次の十五分で〇・七三度上がっています。彼女自身、このころから「暑くなってきた」と言っていました。で、体温の上がった三十分後から四十五分後にかけての血圧は、最高血圧・最低血圧ともに下がっており、その後の十五分で最低血圧が二〇も下がり、実験開始六十分後には、最低血圧が三七という非常に低い値が出ました。

それに対して、R師のグラフをご覧ください。二回目の実験では実験開始十五分後に体温のピークを迎えており、そのときの血圧については、最高血圧・最低血圧ともに上昇しています。

簡単に言えば、C師の場合には体温が上昇したときに血圧が下がっており、R師の場合は体温が上昇したときに血圧も上昇しているということです。

(司会)この結果については、医学的にはどのように分析されていますか。

(K)C師に関しては、体温の上昇と血圧の低下に少し時間的なズレがあります。これは体温上昇が持続されていたわけですから、その体温上昇によって血管が拡張し、血管の抵抗の減少により血圧が下がったというふうに考えられます。特に最低血圧が著しく下がったことから、これらの可能性が非常に高いというふうに考えています。

R師については、体温上昇と血圧上昇っていうのが一致しているために、おそらく、交感神経の最初に起こる緊張状態によって、もたらされた状態というふうに考えています。

(A)これらのことについて、少しコメントを差し挟ませていただけるなら、C師の場合、トゥモが起きたと。そしてトゥモが起きることによって、ナーディーが広がり、そしてエネルギーが充実してきたということを表わしているんではないか。

これは、M君、C師の体験では、このときに、熱が上がるだけではなくて意識が鮮明になってきたんじゃないのかな?

(司会)えっと、確かそのような体験談があったと思うのですけれども。

(A)つまり、このC師の体験はまさに、トゥモのファースト・ステップというか、完全なるトゥモに入った状態であると見ることができるでしょう。

(司会)わかりました。

(A)ところで、ポワ装置における、わたしのマントラによる、C と、それからRの比較について少し言及させてもらいます。

まずRの場合、体温の下降、および血圧の低下等からもわかるとおり、心が静まり、そして寂静の状態へと至っていたことがグラフではっきりと現われています。逆に、Cの場合は、トゥモによって煩悩を破壊する。つまり密教的なプロセスを経験してることが、ここで、皆さんにはよく理解していただけると思います。

◉ステージと装置が与える影響

(司会)なるほど。今まで血圧、あるいは体温に関して分析があったのですが、尊師、これまでのところでステージと、それからポワ装置が与える影響について何か言えることはあるでしょうか。

(A)まず、ステージが高ければ高いほど、ポワ装置は大きな影響を与えることができると。しかし、実際には、外的影響と内的な反応というものは、正しく相関関係があるはずですから、すべての人にポワ装置は効果がなければならないはずです。

ではなぜ、まだ修行の進んでいない弟子たちにはそれほど大きな影響がなく、ある程度修行の進んでいる弟子には大きな影響があるのかについて、考えなければなりません。それは、例えばこれはマントラ修行もそうですが、五回、十回、百回、千回というような、小さな回数のマントラを唱

えたり、あるいは、呼吸法においてもそうですが、例えば一日二十分を二回三回、これを一年、二年行なったとしても、それほど大きな肉体的変化や、あるいは精神的変化が起きるわけではありません。

しかし、これらを土台とした上で、例えば千回から、二万回、十万回、百万回とマントラ修行を唱えたり、あるいは、その二十分の三回のプラーナーヤーマを、一年ではなく五年、十年と続けてるうちに大きな変化が起きてくるのです。つまり、結果的には、すべては経験の量によって決まるわけですから、このポワ装置によって成就者が変化するということは、既に土台としての経験がしっかりとしてる、と言うことができるんじゃないのでしょうか。

(司会)次に、ポワ装置による神秘的な体験の話に、話を持っていきたいのですが、大きな神秘体験をしたのがいずれもクンダリニー・ヨーガの成就者で、ともに二回目の尊師のマントラを使った方の実験の方だと聞いているのですが。

(S)はい。実はこの尊師のマントラを使用した実験中には、被験者が神秘的な経験をし、単なる電子音を使用したときには弱子を加した人がいました。これは大変興味深いことだと思います。

(K)そうですね。一回目の実験中、非成就者の中には寒さを感じた人とそうでない人がいました。クンダリニー・ヨーガの成就者の方は、二人とも「悪寒を感じた」というふうに言っています。

(司会)この場合、悪寒はどのようなメカニズムで起きるのでしょうか。

(K)悪寒というのは、通常ストレスを大脳皮質が感じて、それで、体温中枢のセットポイントが高いレベルに上がると。そこで中枢は、要するに、血液温を上げるためにいろんな、ノルアドレナリン、アドレナリンを分泌させたり、あるいは皮膚の血管を収縮させたり、鳥肌を起こしたりするわけですけれども、そのときに感じるいわゆる不快な感じというのを「悪寒」というふうに普通言っています。

この場合には、要するに、その電子音を大脳皮質は、自覚はしないながらも、ストレスというふうに感じたのではないかというふうに考えます。

(S)この悪寒は、物理学的に説明するのは難しい現象です。両方の実験の磁場のエネルギーは、物理的には同じなのですが、電子音を使用した粗雑な磁場の場合、特にステージの高い者は悪寒を感じるようです。

そこで、まだ研究中ですが、このようなモデルを考えています。エネルギーには量が多い・少ないという以外に、質が高い・低いというのがあるのではないか。そして、高いステージに達した修行者は、質の高いエネルギーを有していて、彼らは質の低いエネルギーを浴びた場合、逆にエネルギーを奪い去られるのではないかということです。

(A)これは、体験的にまさにそのとおりだと言うことができます。そしてそれを、粗雑なエネルギー・微細なエネルギーだと表現しているのではないだろうか。

(司会)今回の番組では体温についてでしたけれども、残念ながらそろそろお時間のようです。

32. イニシエーションを科学する　PART VI
(呼吸)

[説法]意識が呼吸の働きを超えるとき

◉呼吸と心、寿命の関係

こんばんは、麻原彰晃です。

皆さんは、「呼吸」ということについて意識したことがありますか?

この「呼吸」は、わたしたちの生命にとって、そしてわたしたちの感情の流れにとって大きな影響を与えるのです。

例えば、例を挙げましょう。わたしたちが何らかのショックを受けたとき、わたしたちの呼吸はいったん停止します。あるいは、わたしたちが大変な喜びを経験してるとき、あるいはわたしたちが大変な感情の波に左右されてるとき、わたしたちは通常の呼吸回数より、多くの呼吸を繰り返すことになります。

仏教や密教においては、人間が生まれてから死ぬまでの呼吸回数を規定しています。そして、もしわたしたちがこの呼吸回数に達しない状態で死ぬとするならば、それは病死であると規定しているのです。では、それはなぜでしょうか。それは、この肉体を構成している要素、つまり、地元素・水元素・火元素・風元素・空元素、この要素と外的風との関係に起因すると考えることができるでしょう。

これを現代の化学的な見解から検討するならば、例えば酸素の吸収による、ヘモグロビンにおける酸素と二酸化炭素のガス交換と。当然ここで行なわれているものは、物質ですから、その成分あるいは組成がそのまま永続するとは限らないと。つまり、新鮮な状態で保持できるとするならば、それはその方が当然、わたしたちの生命維持活動にとっては有利ということになるわけです。

しかし、この呼吸回数と生命の長さについては、いろいろと検討する価値があるように、わたしには思われます。したがってこれは、これからの長期の実験によってのみ、正しい結果を皆さんに表わすことができるのではないでしょうか。

◉呼吸法で利益を得よう！

しかし、もし皆さんが、呼吸についてより深い知識を得たとするならば、皆さんには大きな利益が存在します。

例えば、皆さんが感情の波が高ぶったとき、ゆっくりと吸ってゆっくりと吐くという呼吸のコントロールをするだけで、皆さんの心は当然落ち着くでしょうし、あるいは逆に、皆さんがエネルギッシュになりたいと考えたとき、強く速い呼吸を行なうだけで皆さんの肉体的パワーというものは増大するはずです。

つまり、わたしたちの精神活動と、それから呼吸との間には多くの相関関係があるんだということを、今回のわたしの講話においてはご理解いただければ十分ではないかと思います。

そして、この呼吸の出入り、つまり、息の出入りが鼻・口から入り、そして、また鼻・口から出るという単純な観想だけではなく、例えば、わたしたちの頭頂から息が出入りするとか、あるいはわたしたちの喉から息が出入りするとかいう特別な観想を使うことにより、わたしたちは、より大きな利益を得ることができます。

これについては、わたしたちの心の働きが完全に呼吸に勝ったとき、つまり、わたしたちが通常考えている呼吸の働きに対して、それを意識が超えたとき、わたしたちは、この呼吸からより多くの利益を得ることができるのです。

さあ、皆さんも、今日簡単に説明された、呼吸とそれから心との関係、これを実体験してみてはいかがでしょうか。

[対談]

◉外的風と内的風

(司会) 今回の「真理探究」では、前回までにご紹介してきたポワ装置によって、修行ステージと深い関係にあると思われる呼吸が、どのように変化するかを見、前回までの実験の考察をさらに深めていきたいと思います。

では、初めて番組をご覧になる方もいらっしゃると思いますので、前回までのポイントとそれに対するコメントをいただけますか。

(A) まず、ポワ装置に使われているマントラと、それから電子音によって人体に与える影響というものは、全く逆の結果が得られると。そのままマントラの場合、人体に対して、エネルギーを増大させると。そして、電子音の場合は、逆にエネルギーを低下させるという結果が出ているように思われます。そして、成就者・非成就者によってその影響は、成就者で、しかも高いステージにあればあるほどはっきりと現われ、それからステージが低ければ、精神的経験および肉体的変化も含めて、なかなか現われづらいというのが今回のまとめではないでしょうか。

(司会) はい。それでは今回の主題である「呼吸」について、話を進めていきたいと思います。まずお伺いしたいのですが、呼吸は医学的にどのような意味合いがあるのでしょうか。

(K) はい。通常呼吸は、生体と外界との間のガス交換を行なう外呼吸と、細胞レベルでのガス交換である内呼吸という二つの過程を指します。外呼吸により肺から取り入れられた酸素を、細胞組織内で代謝に利用して、エネルギー生産をもたらす、というのがその目的です。

そして、呼吸中枢においては、自律神経、そして動脈血の酸素濃度、炭酸ガスの濃度、あるいは pH（ペーハー）というもので、調整が行なわれ、リズミカルなパターンにつくられていると。

ただ心臓みたいなものと違いまして、呼吸は大脳皮質からのコントロールがなされるというところが、一つ大きな特徴があると思います。大脳皮質からのコントロールというのは、例えば、感情が乱された場合に、やはり呼吸も乱れてくる。あるいは、感情が沈静化したときには、呼吸が落ち着いてくるというような結果として現われてきます。

(A) これは仏教やヨーガにおいても、先程K師が説明したのと同じような説明を加えています。つまり、外的風――"風"とは呼吸を指しますが――と内的風の関係があると。で、この外的風が完全に静止し、そして内的風だけの活動によって、この生命を維持させようとする試みこそがまさに、ヨーガやあるいは仏教の求めている道であると言うことができます。

それはなぜかというと、わたしたちが外界にいろいろ縛られる。例えば、目で見ることによってその対象の音を認識するとか、あるいは耳で聞くことによって対象の音を認識するといったようなこれらの動作の根本的なものはすべて、風の働き、つまり呼吸の働きと密接に関係があるんだ、と規定しているからです。

したがって、完全に呼吸を停止させ、そして内側の風のみに精神が集中する状態、まあこの状態を"サマディ"と言うわけですが、その状態をまずつくり上げると。そして、最終的にその内的風の経験をすべて終わらせて、完全なる解脱を果たす、というのがヨーガ・仏教の目的であると言うことができるでしょう。

◉実験結果と呼吸の意味合い

(司会) では、呼吸数の測定方法を説明していただけますか。

(K) はい。呼吸の測定は、単純な電子音とマントラ音を用いた二回の実験において、その実験前と実験後に計四回測定します。被験者には、仰向けになって安静状態を維持し

てもらい、その間に呼吸曲線を記録します。

実際の記録は胸部、あるいは腹部にセンサーの付いたバンドを巻き付けて、そのバンドの伸び縮みを脳波計で記録するものです。

息を吸ったときには波が高くなり、吐いたときには波が低くなる、ということになります。

(司会)ありがとうございました。ところで、今回の呼吸に関する実験の結果はどのようになったのでしょうか。

(T)はい。では、表をご覧ください。全体の傾向を見ましょう。これは単純な電子音を使った一回目の実験です。この実験では六名の被験者のうち四名が、実験後の呼吸数が多くなっています。特にNさんの場合約二倍になっています。残りの二名についてですが、C師に関しては、測定ミスのため、二回目の呼吸に関してはデータがありません。また一名の信徒、Tさんについては変化はない、といった結果になっています。

(司会)ということは、C師については不明で、残りの五人については、呼吸はほぼ一定か、あるいは増大しているということですね。

(T)はい、そうです。

(司会)呼吸数が多くなっているということは、一回一回の呼吸が短くなっているということだと思いますが、この結果は何を意味しているのでしょうか。

(K)交感神経の緊張状態を意味していると思います。やはり、この電子音の磁場を発しているポワ装置自体が、ストレスを生じさせる働きを持っているというふうに理解しています。

(A)他の四名とT君の違いというものは、他の四名は非常に音に敏感に訓練されていると。つまり、それは彼らが普段からマントラ修行等を行なうことにより、そのヴァイブレーションを自分の身体に受け入れる訓練ができているからである。この場合、例えば、自分にとって利益のあるヴァイブレーションの場合は呼吸数が少なくなり、そして精神が安定する、あるいは至福感に包まれるといったような経験をしますが、もし今回の電子音のような不利益を被るような音の場合には呼吸数が増大すると。

特に、この呼吸数と輪廻転生というものは、大きな関係があります。これは皆さんも実際に自分で調査していただいたらわかりますが、人間よりも少ない呼吸数の動物というものはほとんどいません。まあ例外的に、海の哺乳類である例えばクジラ等は、長時間のクンバカ、つまり三十分ほどの呼吸停止等を行なうといわれていますが、まあそれも肺の大きさ等から考えれば不自然ではないと。しかし、この陸地の動物について言及するならば、この人間よりも少ない呼吸数で生きている生命体というものは、非常に少ないということが言えます。

したがって、この電子音が精神に与える影響というものは非常にマイナスである、ということが言えるんじゃないだろうか。

(T)二方、尊師のマントラ音を使用した二回目の実験です。図をご覧ください。被験者六名のうち四名は、実験後の呼吸数が減少しています。一方でNさん・Mさんは増加しています。

(司会)今度は、二人を除いて、呼吸が長くなっているということですが、これに関してはどう考えられますか。

(S)はい。電子音を用いた一回目の実験では、五人中四人が明らかに呼吸数が上昇し、尊師のマントラ音を使用した二回目の実験では六人中四人が呼吸数が減少しています。全体的に見れば、一回目の電子音を使用した実験に比べて、二回目の尊師のマントラ音を使用した実験では、呼吸数が減る傾向にあるのではないかと考えられます。

(K)そのときの精神状態をもろに反映している、というふうに考えます。電子音の場合には、交感神経優位な状態がもたらされて、マントラ音の場合には、副交感神経優位な状態がもたらされたと。したがって、マントラ音の場合には、いわゆる心が安定した状態というのが表わされているのだというふうに考えます。

(A)ただ、今K師の説明に少し付け加えさせてもらうならば、これは前回にも説明したわけだが、要するに成就者の場合、交感神経・副交感神経の機能の幅が広がる、領域が

ポワ装置による実験前後の呼吸数
(電子音)

	実験前	実験後
R　師	18.0	21.3
N	9.6	18.3
M	12.0	13.7
KM	10.6	13.7
信徒T	13.3	12.8

回／秒

ポワ装置による実験前後の呼吸数
(マントラ)

	実験前	実験後
C　師	15.3	14.5
R　師	23.3	19.0
N	9.9	13.5
M	6.5	13.9
KM	17.8	14.0
信徒T	17.7	13.5

回／秒

広がるとわたしは、まあわたしの瞑想体験、および弟子たちの指導によってそれを経験的に考えています。ということは、例えばCのように体温が上昇する。まあこれを交感神経の働きだとするならば、それプラス呼吸の減少という交感神経・副交感神経の幅、つまり、両方が興奮する、両方が活発に機能する状態を現出できている弟子もいるんではないだろうか。

◉心を安定させる高周波成分

(K)ところで今回の実験では、際立った神秘的な体験をした被験者は二人で、両方ともクンダリニー・ヨーガの成就者で、しかも、尊師のマントラ音を使用した場合でした。単純な電子音を使用した場合には、調子を崩した被験者は二人の成就者をはじめとして何人か出たのですが、実はこれに関連した興味深い裏話があります。

この単純な電子音の実験をしているとき、上のフロアにいた尊師や、多くのステージの高い成就者の方々は、装置の中に入っているわけでもないのに、ことごとく調子を崩し、尊師は一時は実験の中断もお考えになられたそうです。

それでも、結局は実験を続けたのですが、電流を単純な電子音からマントラ音に変えたほんの数秒後、尊師から電話がかかってきたのです。尊師は、電流をマントラに変えた瞬間、空間の様子が大きく変化したのを感じられたそうです。

(A)空間といっても、一般の人は目で見る、あるいは耳で聞く等のことをお考えになるかもしれませんが、成就をすると、距離が関係なく、自分の知覚できる範囲のその空間の様子というものを直感的、あるいはイメージ的にとらえることができるようになります。ここでいう「イメージ」とは、漠然としたものではなく、はっきりとした、例えば目で見る・耳で聞くレベルより、よりヴィヴィッドな感覚器官の働きと定義することができるでしょう。そして、それらの感覚器官あるいはそのフィーリング等が、電子音からマントラ音に変わった瞬間に柔らかくあったかく、そして至福に満ちた状態に変わったのです。

(T)先程のお話とも関連しているのですけれども、今回の実験では、ステージの高い人ほど電子音やマントラ音に対する反応が大きく、逆にステージの低い者ほど反応が小さい、あるいは遅かったように思われます。つまりステージの低い者ほど「鈍い」ということになるのでしょうか。

(A)そうだね、これは、ヨーガ理論におけるタマスの度合いが違う、ということじゃないかね。つまり、現象に対して、より原因・結果というラインがはっきりわかってこそ高い悟り・高い成就へと至ることができるわけだし、また高い悟り・高い成就を得たと言うことができると思います。そのような意味において、外的刺激が何を意味するのかということを体験的にクンダリニー・ヨーガの成就者は知り得た。しかし、まだ修行がそれほど進んでない人たちは、それを体験的に知り得ることはできなかった、ということではないだろうか。

(T)なるほど。

(S)ところで話は変わりますが、超高層ビルが立ち並ぶ大都会では、ノイローゼになる人の割合が多いと聞いていますが、その原因の何割かはビルが音の高周波成分、つまり、高い音の成分を吸収してしまうからであるといった報告がなされています。

(司会)基本的な質問で申し訳ないんですけれども、音の高周波成分というのは、高い音の成分と考えてよろしいんでしょうか。

(S)そのとおりです。

(司会)そして、その音の高周波成分というのが、人間の心を安定させる一つの要素であるということなんですね。

(S)そうです。また面白いことに、高周波成分はわたしたちにとって不可欠であるというだけでなく、これはまだ検討段階なのですが、その高周波成分の中には、人体に好影響を与える成分が含まれているようなのです。

実際、通常の人間には見られないような特殊な高周波成分が、尊師のマントラに含まれていることが、マントラ音の成分分析により確認されています。尊師によると、これは、実は高い世界のデータと関係があるらしいのですが、これについては、今後、より詳しく検討していきたいと思います。

(司会)なるほど。尊師のマントラには特殊な高周波成分があるわけなのですね。

(A)そうだね、これは、今から六年ぐらい前から、まあ実験的にいろいろと成就者のその成分、マントラ成分について検討しているわけだが、やはり高い成就をしていればしているほど、高周波の成分が多いということははっきりと現われています。したがって、例えば修行前段階、そして修行がどんどん進んでいく段階において、密教修行者の声というのは、一般的に聞いてもいい声になっていくわけだが、そのいい声になっていく理由というのはこの高周波成分の影響、つまり、高い成就をしていけばいくほど、振動数を与える成分が多くなるということがわかっています。そして、これらの振動数が、例えば当然心の働きによって、声というものは発声されるわけだから、例えば四つの心の覚醒、つまり四無量心を土台としたものであるとするならば、当然それは、人の心を安らがせるものとなるでしょう。

(S)実際、わたしたち人間は、人間の感覚器官では通常と

らえることのできない外的情報、あるいは外的刺激の影響を大きく受けています。先程の音の高周波成分もそうでしょうし、我々が普段知らないうちに浴びている電磁場も、様々な影響を我々に与えていると考えられます。

(K)実際に、医学的なデータも出ています。これは悪い方の例なんですけれども、一九七九年に、ワルツハイマーやリーバにより、送電線の影響を受ける場所に住んでいる子供が、白血病になる確率は、一般の約二倍であるという発表がありました。それに続いて、アメリカのワシントン州で、職業上電磁場に曝される環境にある、二十歳以上の白人男性の死因の死亡統計が発表されましたが、それによると癌、その中でも急性白血病やリンパ腫による死亡の確率が通常の一・六二倍から一・六四倍と高くなっています。

(S)それに比べ、このポワ装置は、尊師のマントラの効果をある意味で増幅する装置であり、今回の実験結果や体験談を踏まえると、人間に好影響を与える磁場を発しているのではないかと考えられます。

このポワ装置は、人間の意識に好影響を与えるのみならず、人間の霊的進化や覚醒を促すと思われる点で、我々現代人に大きな恩恵を与えてくれるのではないでしょうか。

(A)現代は急いでいる時代といわれています。例えば、ロシアの場合、ゆったりと休暇も多いし、しかも労働時間も短いという好条件に恵まれているわけですが、わたしたちの住んでいる日本は、よく働き、そしてよく遊ぶと。で、このような条件において、どのようにして魂は進化できるのかと。

その魂を進化させうる二つの光として、このポワ装置があるのではないだろうか。つまり、わたしたちがこのような科学技術を使い、そして高い世界の成分を、自分の身体に取り入れることを行なうことによって、自分一人で、もし覚醒へ至ろうとするならば、ものすごい長い時代、長い期間かかる修行を短く、しかも心地良く達成できる時代が、これから先、到来するように思われます。そして、そのための福音として、このポワ装置、あるいはアストラル・テレポーターが活用されるとするならば、それは素晴らしいことだと思いますね。

(司会)ところで、残念ながらそろそろお時間のようです。番組の締めくくりとして尊師の方から何かコメントをいただけないでしょうか。

◎精神生活の進化のために

(A)もともと悟り・解脱へ到達する道は、特にマントラ修行者の場合、体温の上昇、および呼吸数の減少です。

そして今回この実験で、ポワ装置にマントラを入れることにより、体温の上昇、および呼吸数の減少の可能性というものを、わたしたちは得ることができました。したがって、この装置を改良し、そして入れるマントラの成分を、より現実のものに近い、つまり生のものに近いような研究が進むならば、皆さんの精神生活は飛躍的に進化するはずです。

その探究をこれからも、オウム真理教では行なっていきたいと思います。

(司会)ありがとうございました。